校友會誌

第參號
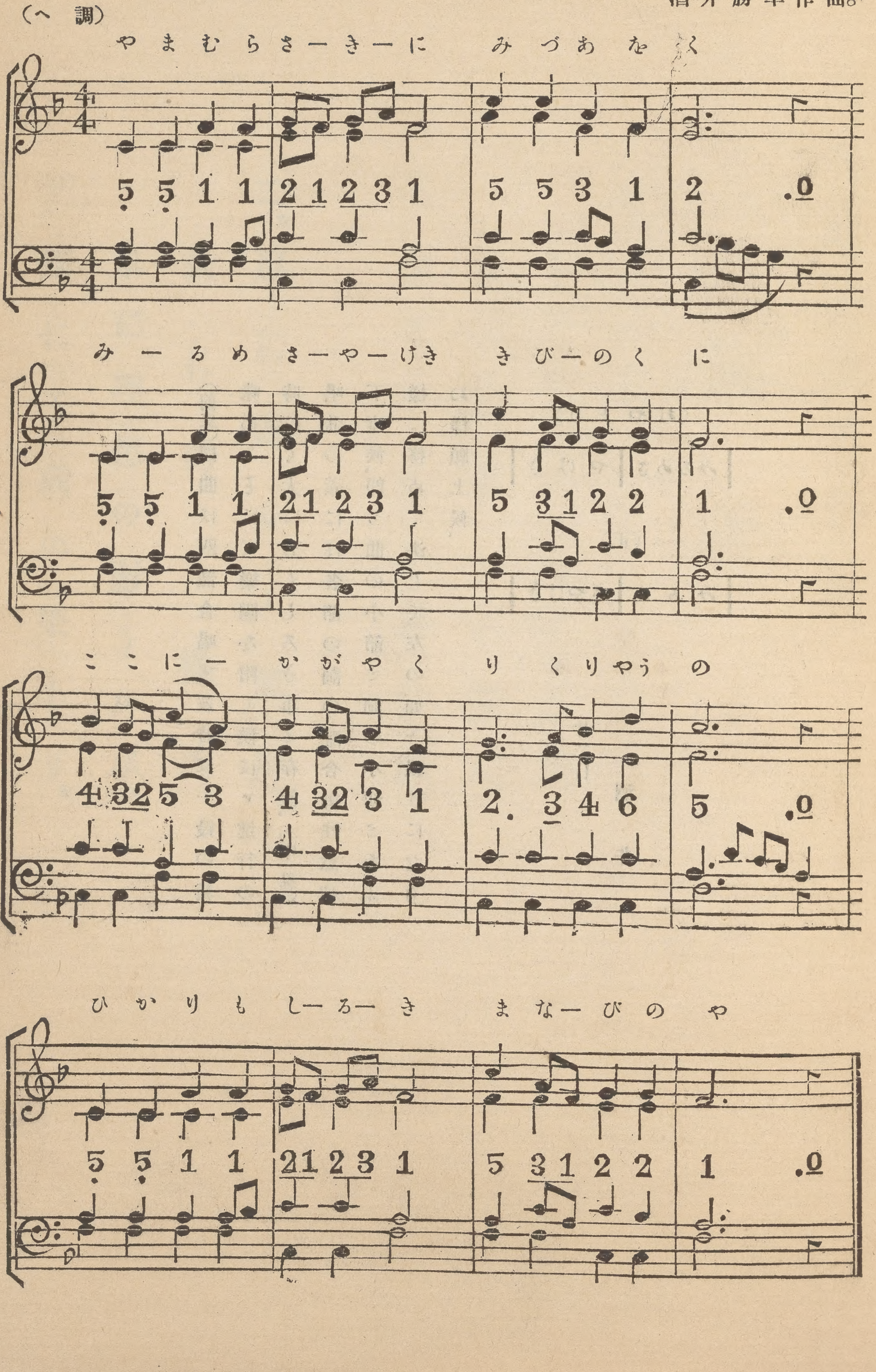
第六高等學校校友會

UFR AZ 793 .K3 no.3 [1903:May]

校友會會誌第參號目次

校　　歌

酒井勝軍作曲。


(ヘ 調)
やまむらさーきーに　みづあなく
5 5 1 1 21231 5 5 3 1 2 .0
みーるめ　さーやーけき　きびーのくに
5 5 1 1 21 2 3 1 5 31 2 2 1 .0
ここにー　かがやく　りくりやうの
4 32 5 3 4 32 3 1 2. 3 4 6 5 .0
ひかりも　しーろーき　まなーびのや
5 5 1 1 21 2 3 1 5 31 2 2 1 .0

（前畧）同曲は四部合唱する時は一段の興味あるヿにて樂隊を附し候はゞ進行の時にも大におもしろき事と存候、（中畧）唱歌の義には各節の詞の配合御注意被下度候、即ち曲の小節と詞の小切とあふ樣に務めて決して左の如き誤りにならぬ樣願上候、

（あやまり）

|みるめさ|やけき|

（正）

|みるめ|さやけき|

廿二日　酒井

校歌

一、山むらさきに水青く、
みるめさやけき吉備の國、
たゝに輝く六稜の、
光もしるき學の舍、

二、前に流るゝ旭川、
後に仰ぐ操山、
水に理想の影うかび、
松に千歳の榮あり、

三、身は青春の血に燃えて、
希望の花をかざしつゝ、
文の林に入りたてる、
健兒のむれをたゝに見る、

四、春さりくれば霞立つ、
兒島の灣に舟きほひ、
秋は月澄む金山に、
旅ねの夢も寒からず、

五、智惠のこばりを褰げては、
たの世の祕密あらはしつ、

徳の寶石みがきては、
心の闇も照すべし、

六、丈夫の意氣は天を衝く、
世路の艱苦は物ならず、
大志一度決しては、
何今更にためらはん、

七、わけ行く道は異れど、
心は一つ諸共に、
をゝしき歌をうたひつゝ、
いざや進まん勇ましく、

論說

我が幸福主義

加地歌三郎

(一) 序言

人生は行樂のみ、亦何んぞ必しも義務を語らん、然かく樂天主義の親玉、何を苦んでか忙はしき語學研究の餘暇を偸んで、迷信多き宗教界に往來して、奇跡に包まれたるバイブルや、醜聞に富みたる佛教界に耳を傾くるか、答へて曰く、其樂天主義なるが故に聖書を讀む、何となれば奇跡を見ても不平を起さゞればなり、其厭世主義に非ざるが故に佛說を聽く、何となれば涅槃樂に無中になりて、醜聞の記事を讀む暇なければなり、フヰヒテ曰く、

人の如何なる哲學思想を取るやは、其人の人と爲りによる、何となれば哲學は、人の好惡に從つて取捨し得べき死せる道具に非ずして、之を有する人の精神によりて活きたるものなればなり、

佳い哉言や、樂天主義も厭世主義も、將た亦苦樂併進論者も、十人十色は千古の名言、されど其樂天主義は、樂天主義なるによりて貴きに非ず、骨稽中に眞面目あり、浮薄の中に赤誠あり、樂天主義の樂天主義として價値あるは、實に此一點なり、嗚呼敬愛なる讀者よ、徒らに皮相の見解を以て、

吾人の微衷を畫餅視する勿れ、能く之を嚼み、能く之を味へば、甘味十分とはゆかずとも、多少の砂糖を加味せし餡に到着すべし、之を序となす、

（二）人生の目的

人力の及ぶ限り、廣く天地間の事物を蒐集して、其間に共通の點を發見し、之を原則とし、之を基礎として、萬般の事物に適合せしむ、換言せば、歸納的 inductive に把捉し得たる根底を、演繹的 deductive に布延す、學問の要は實に是に外ならず、されば吾人は今幸福主義を論ずるに當り、先づ吾人々類の目的の如何なる所に存するかを考究し、次に其目的を達するに必要なる材料の主なるものを掲げ、最後に其材料を以て吾人の最大目的を達すべき手段を論究して此篇を結ばんと欲す、

新約全書馬太傳五章に曰く、

心の貧しきものは福ヒなり、哀しむ者は福なり、柔和なる者は福なり、饑え渇く如く義を慕ふ者は福なり、憫ある者は福なり、心の淸き者は福なり、和平を求むる者は福なり、義の爲めに責らるゝ者は福なり、我爲に人爾等を罵り、又迫害(セメ)いつはりて樣樣の惡言をいはん、其時は爾等福なり、

釋迦牟尼曰く、

諸行無常、是生滅法、生滅々矣、寂滅爲樂、

仲尼曰く、

不レ可ニ以久處一レ約、不レ可ニ以長處一レ樂、仁者安レ仁智者利レ仁、（其意は仁者安レ仁、以長處レ樂となり、）

孟軻曰く、

今王與ニ百姓一同レ樂則王矣、

是に由て之を觀れば、世界の文明の淵藪たる歐洲の天地を支配して、二千年間の歷史を左右したる基督敎の中心たる山上の垂訓も、一種の幸福主義に外ならざる事は、吾人の贅辯を要せず、九個の福の字之を證して餘あり、又東洋史上に出沒して、印度、支那、朝鮮の俗界を蹂躪し、更に進んで我國に渡來し、神道、儒道、武士道の振はざる今日迄も、猶其餘燼を以て新興の科學と戰ひつゝ、深遠なる宇宙觀を哲學者に給與して、將に大に其新方面を展開せんとする佛敎も、亦一種の幸福を求むるものなる事は、寂滅爲樂の樂の字によりて證明せられたり、更に轉じて儒道に至りては、勿論其主張する所道を樂しむに在る事は、前記孔孟の言に徵して明白なり、然るに玆に一種風變りの者あり、之を老莊となす、老莊の道は儒道と正反對なるを以て、一見其目的の一致せざるものゝ如し、然れども熟〻其窮極の目的を考察する時は決して其目的の異るものに非ず、或は大道廢有ニ仁義一、知慧出有ニ大僞一といひ、或は絕レ仁棄レ義、民復孝慈といへる如きは、儒道と全く反對の立脚地に在るに似たれ共、一方より之を考ふる時は、老子も亦一種の幸福を目的とするものにて、佛敎と等しく慾を棄てゝ靜寂無爲なる樂を求むるなり、卽ち其目的は仁義に由らず、天下の民をして無爲にし

て化せしめんとする者なり、故に治國平天下を目的とする點に於ては孔孟と異るなく、其平天下は万民の幸福ならむ事を目的とするなり、莊子に於ても亦然り、彼が所謂至人、神人、聖人なる者は無己、無功、無名を以て其目的とするを以て、恰も欲望なきが如く見ゆれ共、其實莊子も亦快樂を求むる者なる事は次の一言にて明白なり、曰く、

特犯二人之形一、而猶喜レ之、若二人之形一者、萬化而未二始有一レ極也、其爲レ樂可二勝計一邪、

以上列擧せし所に由りて、基佛孔孟老莊の諸教は皆是れ幸福を目的とするものなるを知れり、是に於てか吾人は眼を轉じて他の方面を觀察せざるべからず、梁の惠王孟子に問ふて曰く、

叟不レ遠二千里一而來、亦將レ有三以利二我國一乎、

齊の宣王孟子に謂つて曰く、

寡人有レ疾、寡人好レ勇、(又曰)寡人好レ貨、(又曰)寡人好レ色、

利を求め、勇を好み、貨を好み、色を好む、人間の欲求を一括したるものに非ずや、此四者は快樂を求むるものなる事言を待たず、然るに快樂と幸福とは廣き意味に於て同一なり、或人は善に伴ふ快樂を特に幸福といふと說く、されど吾人は此區別をなし得ず、例へば生れ乍ら巨萬の財産を相續すべき者は、身に一事の稱揚すべき善行なくとも、彼は幸福なりと稱する事多し、故に吾人は幸福と快樂とは其元を一にするものなりとの見解を以て、右に述たる諸例證によりて、人生の目的は幸福に在りと斷定す、ベンザム曰く、

The end of human life is the greatest possible pleasure of the greatest possible number.

ジョンスチュアートミルは此説に從ひ、快樂なる語に代ゆるに幸福なる語を以てし、且つベンザムが快樂の量を計算するに用ゐたる七種の標準（强弱、長短、確否、遠近、豐瘠、純雜、衆寡、）に由らずして、別に快樂の品位 quality を以て快樂の量 quantity と共に快樂選擇の標準となせり、是に至りて熟慮的快樂說と稱せらるゝ實利主義 Utilitarianism は完成を告げたり、ジャネー曰く、

The practical end of human life is happiness.

吾人は既に斯る大家の目的論を得たり、人生の目的の幸福に在り快樂に在る事火を睹るよりも明なりと謂つべし、

論　說

難問に答ふ

凡そ人生の目的を論ずるに二種の標準あるべし、其一は事實的にして、其二は規範的なり、事實的に目的を考究するは、あらゆる社會的現象に就きて、利害を別にして其目的を討究するなり、規範的に目的を論ずるは、如何なる主義目的を以て人生の目的とせば、最も適當なる功果を收むべきやに就て論究するなり、此二者は兩々分離すべからざるものなれ共、吾人は先づ事實的に人間の目的を攻究し、而る後若し其目的が、之を主義として唱道する時は、不都合多き事を發見せば、再び規範的に目的の考究を要すべし、然るに吾人は此事實的考究に由りて一般に認容せらるゝ幸福主義は、其唱道の方法によりては、決して不都合を生ずる事なしと信ず、現に基督教の如きは其適例ならず

や、之を要するに、幸福主義又は快樂主義は、事實的證明に於ては、他の活動主義 Thätigkeitsprinzip の如く、人生の目的を論ずる上に於て困難を感ぜず、唯規範的に之を應用する場合に於て最も困難の點なきに非ず、故に吾人は其困難の點に就て後段に之を詳論し、此目的論に於ては最も簡單に二三の難問に就て答へ、或は直覺主義、或は克己主義、或は他律主義等に就て一々詳細の問答をなす事は之を略すべし、唯活動主義卽ち生々主義に至りては、近來の倫理學者の一般に採用する所なれば、淺薄乍ら多少の論戰を試みざるを得ず、或活動論者ミルの說を難じて曰く、

何故各自の幸福を求むる人々が、全体の人の幸福を求めねばならぬか、又求むるやうになるか、曰く吾人の幸福主義は決して「ねばならぬ」とは言はず、凡そ人社會の幸福を希ふは天性なり、世に惡を好むが如く見ゆる者あれ共、其實惡を好むには非ず、其惡行に由りて生ずる他の利益又は快樂を好むなり、「盜みをするは好まざれ共、金がほしき故盜みをなすなり」とは、最も能く社會の罪惡を言ひ盡せるものなり、然り善を好み社會の幸福を希ふは人の先天的本性なる事は、吾人之を喋々せずとも、孟軻既に詳論して餘蘊なし、かるが故に吾人は愛他心は一の欲求 Verlangen なりと信ず、而して此欲求も他の欲求と等しく、人々によりて其度の强弱大小あり、故に愛他慾の大なる者は、其慾の少き者に對し、此欲求を强大ならしめんとて努力す、其目的二あり、一は其人自身の幸福にして、他は社會全体の幸福なり、凡そ愛他慾の大なるものは、自ら其欲求を遂ぐる事に由て直接に幸福を得る耳ならず、又社會より愛せらるゝ爲に大なる幸福を受くるものなり、故に此直接間接の

幸福を味ひたる愛他的大慾者は、他人にも此幸福を受けしめんとす、是れ上述の目的の第一理由なり、又他愛慾大なる者世に其數を增す時は、間接に社會の幸福を增進す、是れ上述の目的の第二理由なり、換言せば各自の幸福を求むる人々が、全体の人の幸福を求むるは、全く其欲求を遂ぐる所以にして、愛他慾の大なる者が、愛他慾の少き者に博愛を奬勵するは、一は其人自身の幸福を得しめんとし、一は社會全体の幸福を得しめんとするものなり、愛他慾の大なる者は幸福なりとの見解は、後段に詳論せんとする基督及釋迦牟尼を以て其適例なりと信ず、大慾は無慾に似たりとは此をこれ謂ふならずや、活動論者又難じて曰く、

飮酒の結果は却て苦痛多きを知りつゝ暴飮するものあり苦痛を追求する欲求ありといひ得ざるか、

答へて曰く、是れ決して苦痛を追求するに非ず、飮酒によりて目前に得らるべき快樂を追求する欲求强き爲、將來の結果を熟慮して其苦痛を免れんとする意志に從ふを得ざるなり、幸福主義又は快樂主義は決して斯る目前の快樂のみに注意せよと敎ゆるものに非ず、否之を避けしめん事を務むる時あり、何となれば此主義は生涯の幸福を目的とするものなればなり、論者又難じて曰く、

赤子の乳を求むるは、乳の味によりて快樂を受けんとの意志なき事あり、されば快樂を目的とせざる欲求ありといひ得ざるか、

答へて曰く、赤子の行爲は殆ど無意識なり、故に其欲求も隨つて無意識に近し、殆ど無意識の欲求には、殆ど目的なし、故に其追求する快樂も亦殆ど無きなり、若し赤子が全く快樂の觀念なくして

乳を飲むならば、そは欲求といふ可からず、何となれば是れ全く無意識なればなり、論者亦難じて曰く、

某商曰く、金錢は吾人の快樂をなしたる糟なりと、されば人金錢を貯積せんとするは快樂を目的とするものには非るべし、

答へて曰く、快樂には種々あり、金錢を用ひて得べき快樂もあり、亦其金錢を得んとする期望の快樂もあり、玆に引用されし商人は期望の快樂を目的とせしものなり、論者又難じて曰く、

快樂主義の自家矛盾は如何、

答へて曰く、快樂を求めて快樂を得ざる者多きは、快樂主義其もの〻罪に歸すべからず、是れ唯世に知者の尠き事を證するのみ、即ちミル等の如き熟慮精察の力あるもの稀なりといふのみ、故に快樂主義の自家矛盾てふ語は、人生の目的の快樂即ち幸福にある事を斷論せしめざる理由とは爲らず、所謂規範的に主義を選擇すべき參考となるに過ぎず、吾人が幸福主義を唱ふるに當り、之を快樂主義てふ名稱を以てせざるは、聊か其規範的なるに適せしめん爲なり、即ち快樂主義と命名する時は、往々狹き意味の快樂主義と誤解されん事を恐れてなり、實利主義といひ、公衆利用主義といふもの、皆其名稱を快樂主義と異るかの如くなせるは蓋し其意なるべし、

活動主義其他の主義を評す

若し人生の目的が幸福に非ずんば、論者の目的とする個人及社會の維持と安寧と發達とは無意味の

ものに非ざるか、是等の目的は幸福を增進するを以て始めて價値あるに非ずや、然らば人生の窮極の目的は幸福に在りと云ふべきものに非ずや、吾人は素より活動を爲す、然れ共活動其れ自身が最後の目的に非ず、故に吾人若し或欲求を起して、活動せんとする事あるも、其結果幸福少くして苦痛多き事を知る時は其活動を中止す、是れ活動其ものが目的に非ざるを以てなり、之を克己主義の起る所以となす、然れ共克己主義は唯吾人の快樂と快樂と衝突せし時にのみ必要にして、吾人の行爲の自由なる範圍に於て快樂の大小を論ずるものに非ず、故に吾人は此主義にのみ依賴して滿足し得ざるなり、又カント一派の直覺主義は、意志の命令に從つて行動せよといふ、然れ共意志にも亦善惡あるを以て此主義も不可なきに非ず、其他他律主義を稱ふるものは、曰く神の命に從へ、曰く君主の命に從へと、されど人間の行爲は複雜にして、一々神の意志又は君主の命令に照し難き事多し、此場合には必ず自己の判斷を以てせざるべからず、故に純然たる他律主義は實行さるべきものに非ず、唯是等の諸主義は、吾人の幸福主義を實行する參考となるべきのみ、

以上論ずる所によりて、吾人は人生の目的の幸福に在る事を斷言すると同時に、之を主義として唱道する上にも、其方法の宜しきを得ば、强いて他の主義を以て之に代ゆるの必要なしと信ず、否吾人は寧ろ幸福主義の長所を認むるなり、卽ち幸福主義は最も世人の注意を引く、吾人の目的實に此に存す、

(三)幸福の材料

幸福は主觀的のものなれば、其材料は絕對的に何人にも幸福の原因となるものには非ず、されど今此には最も廣く一般人類の幸福を產出すべき材料を擧ぐべし、

甲、財產

幸福の材料其種類多しと雖も、財產の如く其手段に富むものは無かるべし、以て肉慾を充すべく、以て名譽を求むべく、以て權勢を張るべく、以て慈善を行ふべし、殆ど人生の事其意の如くならざるはなし、されど是に由つて求むべからざるものなきに非ず、就中重要なるものは智識慾と健康なるべし、其他口髯の如きも然り、さて智識慾は他人より之を見れば、單に名譽的幸福に過ぎざる如く見ゆ、故に實業家には往々誤解さるゝなり、如何に黃金は山の如く積むとも、如何に田園は海の如く廣くとも、科學的又は哲學的研究の愉快詩的趣味、是等は到底物質的交換の媒介者たる金力に由りて求むべきものに非ず、然るに學生より身を起しゝ財產家は然らず、既に智識的快樂を求むべく、亦金力的快樂を受くべし、然らば健康の樂は如何、醫藥の以て施すべきものは知らず、身は鉅萬の財寶に包まれて、其間に呻吟せる者亦尠しとせず、阿房宮を競賣に附すとも、不死の藥は求むべからず、是れ豈始皇のみの運命ならんや、財產家たる期望を懷けるもの、豈健康を度外視すべけんや、

吾人は財產の萬能論者を稱揚すること上述の如し、而も財產を以て目的とはせず、抑ゝ人生の目的は幸福に在り、財產は唯是を求むべき手段のみ、子女の敎育より醫藥の料に至るまで、全く之を拒絕

して、積財の外餘念なき拜金者流は論外なり、苟も某氏の所謂多少の敎育を受けたる者が、豈夫れ黄白を以て目的とせんや、然るに吾人は往々學生中に、財産を以て目的とすと稱する者を見る、何ぞ其手段と目的とを混同するの甚しきや、彼等に向て反問せば、必ず他に其目的を發見すべし、或は衣食住の驕奢、或は名譽、或は俗權勢、或は公益、何等か他に其財産を以て求めんとするものあるなり、然り而して吾人々類の生涯の幸不幸は、其財産を以て如何なる慾望を充すかに由て定まるなり、或は以て欽慕すべく、或は以て唾面すべき人格の相違は、全く其金の用途に在て存するなり、かるが故に財産を以て目的とするものは、其實未だ確乎たる目的を決せざるものなり、然り理想なき人物なり、否盲目なり、譬へば大工たる決心なくして、鉋鑿を購ひつゝあるが如し、其愚や憫むべし、吾人は好んで誹謗をなすものに非ず、唯此一事は大に考察すべき問題なりと信ずるを以て、識者の注意を求めんと欲するなり、

乙、學問

科學といはず哲學といはず、凡て認識を以て現象に對する概念 Begriff を作り、又は實在 das Sein に對する直觀 Anschauung をなすもの、皆智識欲に非るはなし、林檎問題の解釋をなし得たる時のニユートンの滿足は果して如何、Paddle の實驗が成功せし時のジユールの愉快、近くは無線電信を成就せし時のマルコニー、天にも昇る心地やしけん、哲學者としては批判哲學を完成せし時のカント、社會學の開祖となりしスペンサー、快樂説を以て歷史を動かしたるベンザムやミル、近くは二

十世紀の文明中に一頭を拔くヴントの博識、東洋にては老莊か楊墨か、將又陽明か、數へ去り數へ來らば際限なし、而も皆是れ一世を風靡したる大家にして、尙未來不朽の智識的源泉なり、嗚呼智識慾も亦偉大なりといふべし、恰も良し二十世紀の日本學生は、和漢の書以て東洋の天地を窺ふべく、英獨佛伊の語學は以て泰西の古今を通覽すべし、此利器を有し此幸運に乘ず、豈亦千載の一遇ならずや、自重せよ我同窗の幸運兒、

丙、宗敎

人生の幸福は期望より大なるはなし、期望の永遠なるもの宗敎之なり、世人皆之を知る、而も宗敎家たる能はざるものは、往々信仰と迷信との區別を知らざるに基因す、信仰は敎熱を伴ふ、故に多くは迷信に陷る。否之を「陷る」といはんよりは、寧ろ「迷信に達するを得」といはん、何となれは人生の目的は幸福に在り、而して幸福は却て迷信中に多ければなり、然りと雖も迷信は故意に求むべからず、唯信仰の極點に達したる時、自然現象の一部分が神の如くに思はれ、或は神は天の一局部に踞座するかの如く考へらる、之を迷信といふべし、基督敎に於て神像を設けざるは此迷信の下等なるものを生ぜざらんが爲なり、然れ共人類は十數億の夥多に達するを以て、其智識の度は平均上甚低き者なり、故に救世主が其宇宙觀を廣く上下の人類に傳へんと欲せば、殆ど之を表言すべき辭なきに苦しむなり、故に宗敎の開祖たるものは之が爲に如何に苦心せしかを想像する時は、思半ばに過ぐるものあるなり、然るに他人を愛する心少き者の中に、學力を有する者甚多きを以て、此種

の學者は救世主の苦心を想像する機會なくして、唯外面より皮相的に神てふ詞のみを批評す、故に其眞意を解し得ざるは當然なり、然るに又一方には救世的慾望の甚强き學者亦多し、此種の學者は單に愚民の迷信を迷信として退くるを欲せず、如何にもして眞の神を發見して求道者に滿足を與へんと努力するものなり、斯の如くして發見し得たる神は殆ど皆無人格的の神にして、哲學者の所謂實在なり、此神觀の一例を示さば、村上專精博士の「吾人は古今を貫き十方に洽き實在を信ず」、といひ又「吾人は知解以上の實在の表彰として佛陀を信ず」といへるが如き是なり、又中には良心を以て神なりと斷定する人もあり、基督教界の三傑たる海老名彈正氏の如きは、或は良心即神説によりて「我生ける神」など稱へ、又萬有的の神に近き神觀を説く時もあり、然れ共畢竟是等の説明は單に學生などの求道心を滿足せしむるに過ぎずして、人類全体を標準として説く時は解し得ざる者最も多きを見る、是に至りて始めて救世主の眞意は解し得るなり、然れ共村上博士又は海老名牧師の如きは立派なる宗教信者なり、豈之を信仰を有せずといふべけんや、已に是等の人の神觀を宗教界に存し、而も其數日々增殖して迷信に非る信仰を有する人非常に多し、然るに迷信と信仰とは同一なりといふ者あるは餘り輕卒には非るか、吾人は上述の二説の外の信仰は皆迷信なりとは決して言はず、少くも上述の二説は信仰といふを得れ共迷信と云ふべからずとの證明をなす迄なり、一言を以て云へば、信仰と迷信の區別を爲さざるものは、未だ宗教の研究を爲さゞるものにして、愚民貧民を救はんとする愛の心少き者たるを白狀する外に何の功用もなきものなり、

抑ゝ神は無限なり、絶對なり、認識以上の實在なり、然るに人間の經驗は有限なり、人間の言語は不完全なり、不完全なる言語と各人特有の有限なる經驗とを以て、無限絶對の神を説明す、各人其説を異にするは寧ろ至當ならずや、故に神は或は人格的に見たる實在なる事あり、或は無人格的に見たる純有なる事あり、吾人は其求道者の學力知識を計りて其何れを説くも妨げなしと信ず、然れ共吾人自ら信ずる神は其實在中の一部分にして而も最も主要なる essential の部分を求め、其方面より此無限の實在を見たるものなり、抑ゝ此世に基督教あり佛教ある所以のものは、基督の傳記又は釋迦の傳記あるを以てなり、故に己れの信仰は假令言語を以て完全に表彰し得ざるも、是非之を他人に説明するの必要ある時は、成る可く基督又は釋迦の名を通じて定義を設くるをよしと信ず、何となれば人は感情なくして動くものに非ず、或は人格的の實在といひ、或は無人格的の實在といふ如きは死的言語にして、他人を感激せしむる力なし、故に吾人は神の定義を下すに左の詞を以てせんとす、即ち神とは基督より歴史を除きたるものなり、換言せば基督の精神なり、歴史的基督は肉体を有す、故に有限なり、然れ共基督の精神即ち理想的の基督は無限なり、故に神は無限なり、而して基督の精神は統一的主格の活動なり、故に神は人格的實在なりといふを得べし、而して基督自身は己の精神の神性に合一せし事を自覺したりき、又ヨハネ傳の所謂ロゴスなるものは右の神觀を顯したるものと見るべし、即ち

太初(はじめ)に道(ことば)あり、道は神と偕(とも)に在り、道は即ち神なり、

とは理想的の基督を以て道卽ちロゴスと稱せしものなるべし、又

この道は太初に神と共に在りき、萬の物之に由て造らる、

とは今日の唯心論等に甚だ符合するものならずや、

之に生（いのち）あり、此生は人の光なり、光は暗きに照り、暗きは之を曉らざりき、

とは理想的基督卽ち神の良性が基督以前に、個人として完全に表現したるものなかりし意には非るか、右の如く解する時は吾人は毫も疑を容るべき點なし、卽ち神とは理想的基督にして、神は万物の創造者なりとは現今の唯心論と同一に解して差支なしと信ず、然れ共此の如き哲學的解釋は一般の人類に理解せしむるを得ず、故に馬太傳、馬可傳及び路加傳等には最も平易に神を寫象したるなるべし、信仰は迷信なりと思惟するものは未だ右のヨハネ傳を知らざるものならざるか、

吾人は佛教に所謂阿彌陀といひ、眞如といふものも右の如き解釋をなし得べしと信ず、卽ち阿彌陀如來は理想的の釋迦牟尼をいひ、眞如はロゴスに相當するものにして、哲學者の所謂實在を一面より表はせしものなるべし、又歷史的の釋迦は有限にして、理想的の釋迦は無限なり、故に阿彌陀如來は無限なり、無限は無差別なるを以て、神と如來は同一なるべし、故に理想的基督と理想的釋迦牟尼は同一ならざるべからず、是に由て之を觀れば、神を信ずるは如來を信ずる所以にして、理想的基督を信ずるは理想的釋尊を信ずる所以なり、故に吾人は基督教の神を信ずと雖も、同時に又佛陀を信ずる事になるなり、强て基督教と佛教の差別を考出して、反對するには及ばず、ホール博士

は後に揭ぐる如き見解を以て基佛二敎を比較せられしが、其眞の目的は兩者の一致に在るなり、吾人は宗敎心の人類間に發達する狀態を察するに三大根據を認む、曰く愛情、曰く同情、曰く感謝之なり、基督敎に愛といふは廣き意味に於て用ふるものにて、右の愛情及同情を合して云ふなり、佛敎に慈悲といふもの亦然るべし、されど狹き意味に於ては愛情 Liebe は寧ろ樂觀的にして幸福を他人に與ふる事をいひ、慈悲又は同情 Mitleid は孟子の所謂惻隱の心をいふものにて、他人の苦痛を憐み之を免れしむる意なれば、寧ろ悲觀的の意を多く含めり、此二者は他人の幸福を計り苦痛を免れしむるものなれば、兩々相離るべからざる事車の兩輪の如し、然るに此に是等の二者よりも尚ほ宗敎心を激發せしむる爲には有力なるものあり、卽ち感謝又は報恩 Dankbarkeit にして、基督敎にても佛敎にても、信仰を起し發心する所の大動機となるものなり、凡そ人は愛情又は同情を有するのみにては、多くは普通の生活にて滿足するものなれ共、一たび基督の傳を聞きて、其博愛心によりて吾人々類を救濟せん爲に福音を宣傳し、其結果十字架上に虐殺さるゝに至りし事を知る時は如何なる無情なる者も感謝報恩の念を起さゞるを得ざるものなり、若し人間にして此報恩心を起さざるものあれば獸類と異る事なし、又若し釋迦牟尼が吾人々類の爲に苦痛を免れ安心立命をなさしめん爲、太子の位を棄てゝ諸方を流浪し、難行苦行の後始て寂滅の說法をなし玉ひたる事を思ひやる時は、如何なる利己心强き者も其恩を思はざるを得ざるものなり、若し然らざる者あらば蟲類と異る事なし、吾人は基督及釋尊の死後今日に至る迄二千前後の年數を經る間に、此二人に依て幸福

を得、苦を免れ、安心立命の生涯を送るに至りし者幾十億人に達するかを想像し、且亦現在の世界到る處の人基督の精神の爲に感化されつゝありて、或は赤十字社となり孤兒院となり、さては施療病院など各種の慈善事業が是によりて起りしもの最多きを思ひ、又印度、支那、朝鮮より日本に亘りて、釋尊の爲に救はれたるもの如何に多きかを想像する時は、感謝の念起らざらんと欲するも能はざるなり、見よ其身には赤袍を着せられ、其頭には荊棘の冠を戴せられ、其手には葦を持たされ、幾多の嘲弄罵詈を加へられ、剩さへ其面に唾せられ、其首を擊たれ、辛じて其苦を免れたる後は卽ち釘づけの十字架上に虐殺されたる其基督を、吾人は實に此數行を書くに筆鋒の震ふを感ずるなり、恐らく讀者中にも多少の感なき能はざる者あらむ、又見よ悉達太子が父王首圖駄那の慈愛を割き、親愛なる妻子耶輸陀羅母子を棄て、暗夜乘馬して宮城を遁れ、跋伽仙人に就きて苦行外道の如何なるものなるやを實檢し、又轉じて阿羅邏迦蘭仙人に就き修行數年、終に伽闍尸梨沙山に登りて苦行六年、或は日に一麻或は一米、或は二日乃至七日に一麻米の窮乏、肉落ち骨高まりて尸連禪河に浴水するに、殆ど立つ能はざりしと言ふに非ずや、何ぞ夫れ悲慘なるや、吾人は此苦學苦行が遂に佛敎を產み出す基となりて、今日に至るまで其餘澤を蒙むるを得る事を追想する時、其釋尊の胸中を推測して措く能はざるなり、嗚呼亦誰か之を聽き棄てにするものぞ、未だ之を知らざる間は問はず、苟も一び之を聞いて、其虛僞の事實たるを證する事なしに、之を不問に屬し、人類の爲に其救主たる基督及釋尊を眼中に置かざる者は、忘恩無道の人非人、犬馬以下の人物、吾人の齒するを

耻づる動物なり、然れ共斯る動物は教育を受けたる者の中には尠し、否苟も人間たる者は多少の報恩心なきはなし、故に如何なる者も一び救世主の傳記を讀む時は、必ず感奮するものなり、唯或者は故意に其研究を避けて、「知らざる者は罪なし」との辯解の口實を得んとするのみ、之を要するに一般に人間は感謝報恩の天性を有す、是れ即ち宗教心の奮興激發し來る最大動機となるものなり、

吾人の宗教的立脚地は實に此に在るなり、されば夫の神の觀念又は佛陀の解釋は、人々多少の相違あれ共、吾人は其意見の異る爲に、他を排する事は情に於て忍びざるなり、故に其人にして若し行爲の上に見るべきものあらば、吾人は其神觀の相違は之を問はずして其人に從はんと欲す、是を以て吾人の發表せる神觀は、成る可く基佛兩教の信徒に相近きものにて、共に滿足し得べき折衷的の定義を求めんとせり、されど是れ至難の事にして、素より完全なるものに非ず、唯其不完全の點をば、之を補ふに行爲を以てし、他日一定の資力と一定の學力とを得ば、是を以て救世的生活を爲し、其實行に由りて宗教の眞價を顯すを得ば、神觀の不完全は世人之を咎めざるに至るの日あるべきを豫期するの一事あるのみ、露ノトルストイ伯曰はずや、「信仰とは使徒ヤコブの定義の如く、行を生ずるの動機にして、而して行は信仰の發表たる耳」と、然り眞の宗教は實行に於て見るべき耳、吾人は是より同伯及四大博士の宗教見を摘要して、讀者の參考に供せん、伯曰く、

(一)耶蘇の全教理は唯一の目的を有す、即ち人々の間に平和を來らす事、神の國の建設是なり、

(二)地上に平和を來す道は、彼の五誡を遵守するに在るのみ、

（三）五誡中特に「惡に敵する勿れ」との一語は、全福音書を一貫す、
（四）人生の幸福に五大要件あり、曰く、人其周圍の自然界と密接の關係を維持する事、曰く、業務を有する事、曰く、室家の樂、曰く、交際、曰く、健康是なり、

井上巽軒博士の宗敎見を摘要せば、
（一）實在を人格的に寫象するは各宗敎に共通なり、例へば婆羅門敎の高等梵天は人格なき實在なれ共、劣等梵天は人格的なり、佛敎は如來を人格的に、眞如を萬有的にせり、儒敎は天帝を人格的にし、基督敎も「ゴツト」を人格的に寫象せり、
（二）然るに實在を人格的に觀る事は人智の發達に伴はず、
（三）日本民族は佛敎と基督敎との融合調和をなすべき天職を有す、
（四）倫理的實在たる大我を理想とせる理想的倫理的の宗敎、卽ち理想敎は、佛敎及基督敎に代つて人類の世界的統一を催進す可し、

村上專精博士の論旨は、
（一）宗敎は守舊的のものなり、例へば佛敎興りて婆羅門敎滅せず、基督新敎興りて舊敎猶盛なるが如し、故に井上博士の宗敎論は行はれず、
（二）宗敎は感情的のものなり、佛敎徒は釋迦の人格に、耶蘇信徒は耶蘇の人格に重きを置く、然るに此二人に優る人格の顯はれん事難きを以て宗敎合一論は行はれず、

(三)宗教は歴史的のものなり、故に全く舊慣を脱する能はざるなり、上述三條件に由り、今後幾千年後は知らず、猶數世紀間は井上氏の論實行されず、

(四)二十世紀に起らんとする新佛教の中心は涅槃なるべし、

元良勇次郎博士は曰く、

(一)村上博士の所論の理由により、井上博士の宗教合一論は破れたり、

(二)宗教は人道を以て其基礎とし、各自其職業に全力を注ぐべし、

(三)宗教の成立に三要素を必要とす、曰く信徒の信念を生せしむる客觀的觀念の存在、曰く自己の運命を完からしめんとの期望、曰く宇宙感情是なり、就中客觀的觀念は各宗各別にして、其他は皆共通なり、

以上三大博士の宗教論を一括せば、夫の四大教の契合點を發見して、之を人格的實在なりとし、其持論たる現象卽實在論と結合し、進んで理想教を主張せられしは井上博士なり、宗教は守舊的、感情的、歴史的なりとの事實證明に由りて、井上氏の立論に不同意を稱へしは村上博士なり、其反對論に賛成して、單に宗教の要素及其倫理を主とすべき事を論ぜしは元良博士なり、之を要するに、立教的新見解を唱道されしは唯井上博士の理想教あるのみ、吾人は理想教に對する意見左の如し、

(一)理想教は人格的の神佛を認めざるを以て、宗教と稱するは不當ならん、加之若し之を宗教となす時は、却つて基佛二教の反目嫉視を受け其目的たる宗教合一は其功果を得ざる耳ならず、唯

一小宗派を増すに過ざざる事、既に其實例を日蓮宗に於て之を見るべし、即ち佛教統一は日蓮の理想なりしにも關はらず、却つて宗派の分爭を増せしのみ、故に其人格的の神を有せざる理由と共に、此理想教は之を宗教と名けず、ユニテリアンの如き宗教的倫理的の會組織となす方功果多からんか、

（二）理想教は活動主義を取れり、吾人は幸福主義を取らんとす、

次に米國紐育ユニオン神學々校長ホール博士の宗教論を摘要せんに、

（一）基督教は佛教と同一なる點は、絶對無限の實在を神とせる事なり、

（二）自然神教は神と世界とを隔絶し、人間を神の奴隷とす、而して其結果は二元論に陷る、基督教は神人交通を説き、神は人間を通じて働くとす、

（三）汎神教例へば佛教の如きは、世界の實在を否定し、經驗を迷妄とし、唯否定によりて達し得る純有 Pure Being のみを認む、基督教に於ては人間の理性及良心は、之を神の屬性とす、汎神教と雖も自我は否定すべからず、若し之を否定せば何等の立言をもなすべからず、

（四）基督教的哲學に由れば、神は個別の人間を通じて働き給ふ、又基督は吾人の心に活き給へり、

（以上大阪にての講演、以下は岡山にて演述）

（五）宗教の起原は吾人の外に非ず内に在り、吾人の Soul より發す、即ち人類が無限を慕ふ、是れ宗教の Origin なり、或は祖先崇拜といひ或は自然崇拜といふ、皆是れ十分に宗教の本源たる

に足らず、又人生を迷妄なりとする根據は、期望に滿ちて活動する人類には適せず、以上四大博士の宗敎論を讀む時は、近來我國に於ても亦外國に於ても、佛敎と基督敎との調和を冀望するもの如何に切なるかを推知するに難からず、然り人類の統一は人生の最大事件なり、夫れ道德は漸次に其範圍を擴ぐるものなれば、一個人が結合して一家の道德即家庭の愛を生じ、數家族結合して村落の一致となり、今や其範圍は擴大して國家となれり、故に二十世紀以後に於ける發達は國家と國家との結合、即何々同盟と稱するものが其範圍を廣め、世界の人類の結合を見るに至るは必然の勢なり、國家主義者の愛國心は吾人大に同情を有すと雖も、世界の潮流に逆つて保守主義を取るは、國を愛して國を滅すものなり、國家百年の大計を決せんとするもの豈輕卒なるべけんや、我國の議會に片岡健吉氏及江原素六氏又は島田三郎氏の如き人物が續々として選出さるゝに非ずんば、辭職勸告の口實に窮して、絕對的議案の否決を爲さゞるを保せず、國を愛する名義に由りて基督敎を排せんと欲するもの、角を撓めて牛を殺すものを笑ふ勿れ、吾人は旣に信仰必しも迷信に非ざる事を論せり、然れども唯此說明のみを以て人間の行爲を動かし得るものに非ず、凡て人間は感情的のものなれば、先づ彼の「坊主嫌ひ」、「耶蘇嫌ひ」てふ惡感情を除かしむるに非ずんば、如何なる說敎も徒勞のみ、如何なる福音も畫餠のみ、是に於てか宗敎家たるものは、意氣最も快活にして、擧動最も活潑なる事を貴ぶなり、因循固陋は實行的宗敎の最も忌む所にして、俗人と少しも區別なく、寧ろ俗人よりも淡泊にして磊落なる僧侶又は牧師を以て最も必要とす、換言せば口に天國又は

極樂を唱ふるのみならず、其擧動の上に涅槃樂又は入天國の愉快なる狀態を表顯して、世人をして好んで其周圍に集らしめ、喜んで其敎を請はんとする者あるに至らしむ、是を實行的宗敎家の秘訣とす、近來我國に於て、口頭的倫理の講義の無能なる事と、敎育界の腐敗及び中學生徒が唯一の快樂とする所は牧師をいぢめる事に在るなど、種々の道德不振の現象を慨嘆する者多く、眞に國家を憂ふるものは、宗敎の必要を感じ、佛敎の改革を稱ふる者、基督敎の大擧傳道を迎ふる者、宗敎合一を叫ぶもの、倫理敎を鼓吹する者、異口同音に宗敎改革を論じ、其專門家なると局外者なるとを問はず、各其見識を發表して何等か貢献する所あらんとす、是れ豈明治維新の文化をして、單に科學的又は物質的の進步たるに止めず、深遠にして且つ趣味ある、高尙にして且つ偉大なる哲學思想又は宗敎思想を以て、此文明を完め、此社會を靈化せんとする大々的精神界の變動を見んとする前兆には非ざるか、兵力に於て、敎育に於て、既に世界的の國家たる資格を得たる帝國が、豈唯宗敎に於てのみ幼稚なる狀態に安んずべき理あらんや、然り吾人は我國をして偉大ならしむる爲には、決して知識的又は物質的の文明に一任せず、大に人間最高の價値を顯はすべき有德の國民たらしめざるべからず、而して其目的を達する爲には、獨り机上の理論たる形式的倫理學に一任せず、形体あり實行ある人間の行爲を左右すべき宗敎に由るの外、他に其良法を見出す能はざるなり、嗚呼有爲多望なる廿世紀の學生よ、眞に我國の前途を泰山の安きに置かんと欲せば、徒に物質的文明にのみ安んずる勿れ、眞に人類の統一を實現せんと欲するものは、此風雲際會の機を逸せす、唾手一番

蹶起して、大に其手腕を振ふべき秋ならずや、

人生の快樂一にして足らずと雖も、何物か能く宗教的快樂に上越するものぞ、「我は世に勝てり」と揚言せし時の基督の愉快、吾人は想像力の乏しき事を慨嘆す、幾百萬の貔貅を養ひて世界の帝王たらん事を標榜せし神聖羅馬帝國も、三百年の快戰遂に物質的政治的の無能を證明し、精神的帝王たる基督の前には其跡を隱せしに非ずや、肉体的基督逝きて千九百餘年の今日、羅馬帝國はむかなくも歷史上の夢物語りとなりし現今、唯獨り精神的の基督は吾人々類の心に活きて此筆を取らしむ、武勇や、政治や、將亦金力や、大は卽ち大なりと雖も、未だ二千年間の人心を一貫するものを見ず、未だ世界を屈服するものを見ず、未だ一冊の書を以て幾千萬の學者を惱ますものを見ず、宜なる哉歐洲の天地を振動せしめし奈翁をして、僅三年半の基督の大事業に敬服せしめし事や、「カイザルの物はカイザルに返せ」とは實に此大勝利を先見せしに由るなり、何ぞ其度量の廣濶なるや、吾人は基督の活氣、基督の功績を想ふと同時に、亦大智慧者たる釋尊を想起せざるを得ず、夫れ太子の位は俗權の最高なるものに非ずや、幾多の金銀財寶は燦然として其身邊に橫はり、百千の臣妾は左右に俯伏して其媚を爲す、誰か其榮譽を羨まざらん、而も其金殿玉樓に眩惑せず、超然として世間樂の上に起ちしもの、悉達太子其人ならずや、何ぞ其節操の高潔なるや、太子一たび衆生の濟度を志すや、惜しげもなく迦比羅城を見棄て、幾多の難行を遂げて、伽耶の里なる菩提樹の下に豁然として正覺したる其一刹那、太子の心地や如何なりけん、羨ましといふも愚なりや、宜なるかな先に俗權

に戀々たらざりし事や、既に釋迦牟尼至尊の肉は拘尸那揭羅に荼毘にされて二千幾百年、東洋の諸大國是が爲に活き、是が爲に宗敎の味を知れり、嗚呼何ぞ其恩澤の多大なるや、時は過去現在未來に通じて一貫せる無限の時間、空間は三千世界を包括する十方に洽き無限の法界、此二者を方寸の中に因果律と化し去りたる釋尊の卓識、誰か能く其意を解するものぞ、吾人は先に偉大なる基督を畫き、今又茲に深遠なる釋迦牟尼を寫す、讀者尙「坊主嫌ひ」を主張して佛敎を棄つるか、「耶蘇嫌ひ」を固守して基督敎を退くるか、馬援嚴敎を誡めて曰く、

效二伯高一不レ得、猶爲二謹勅之士一、所レ謂刻レ鵠不レ成、尙類レ鶩者也、效二季良一不レ得、陷爲二天下輕薄子一、所レ謂畫レ虎不レ成、反類レ狗者也、

旨い哉言や、基督又は釋尊に效ふて成らずんば、尙謹勅の士とならむ、ビスマーク又は岩崎に效ふて成らすんば、如何なる狗に類するならむ、よしや宗敎の專門家たらずとも、傍ら其時間を割きて此快味を味ふは必しも損には非ざるべし、

丁、名譽心

學問といはす、技術といはす、凡そ人文の發達進步を催進するもの、恐らく名譽心より大なるは非ざるべし、吾人は公正なる批評眼を以て、己れの行動を判斷する時は、確かに其中に名譽心の大なるものを發見するなり、吾人若し名譽心なからんか、其公共的事業に盡さんとする熱心は、其半ばを失ふべし、夫れ「己が心の欲する所に從つて距を越えす」てふ境遇に達するは、孔子すら七十の高

齡に達したる時ならずや、況んや吾人に於てをや、然るに茲に注意すべき事あり、抑々名譽は比較的のものなれば、或は自己の功績を以てせずして、他人を陷擠せんと欲する事あり、所謂嫉妬心是なり、嫉妬心は殆んど人間の免るべからざる心理的作用なれ共、單に之を心理的作用として放棄すべし、凡そ名譽を求むるに嫉妬心を以てする程迂遠なるはなし、何となれば自己の功績に由りて一段高き名譽を得る時は、全人類に對し各人との比較上一段の名譽を得たるなり、然るに他人を陷擠して是に等しき名譽を得んには、全世界の人間を一段づゝ己より下らしめざるべからず、人豈斯る迂遠の手段を取る時間ありや、畢竟嫉妬心を以て行爲を左右するものは、人間の競爭者を二三の人に限れるが如く思惟するに基くなり、嗚呼何ぞ眼界の狹小なるや、之を要するに嫉妬心は人間の全く棄て難きものなりとするも、之に從つて行爲を左右する事は全く之を廢せざるべからず、然らずんは人生の目的たる幸福を完ふすべからず、

戊、美慾

人の美を好むは天性なり、人類は美慾を有する爲如何に大なる幸福を受けつゝあるかは喋々を待たず、然るに此に大問題あり、美慾全体としては之を奬勵すべきは異論なけれども、其美の一部が人間の形体上に現はれたるものを好むは如何、吾人は既に人生の目的は幸福にある事を論じ、其幸福の一部分が美慾によりて生じ、其美が人間の形体上にも存すとせば、之を如何に處すべきかを不問に屬する時は幸福主義の完結を得ず、況んや其人体美が實際上の人間行爲を左右する大原動力たる

に於てをや、宗教家倫理學者中の多數は謂へらく、人体美は淫慾と連結して害毒を流し、且又人間は過度に此慾を求めつゝあるを以て絶對的に禁慾主義を命ずれば可なりと、是れ一理あるに似て而も大々的謬見なり、現今人類が義務を知りて而も實行の難きは此論者の謬見に基くなり、抑ゝ人間の行爲なるものは種々の慾望の混合せるものなれば、少くも其中の二種以上の慾望を比較して、何れか最も幸福に適せるやを決定するに非んば、之を實行するものに非ず、故に單に宗教又は倫理の敎ゆる行爲が如何に價値ある事を聞くとも、一方に其行爲に反抗する慾望の價値を論ずるものありて、兩者の何れがより大なる幸福を與ふるかを明にせざる間は到底根本的動機となるべき宗教又は倫理の成立を見るべからず、吾人は此に苦心する事數年、而も未だ完全なる結論を與ふるに足らざれ共、近來多少得る處ありて自ら實驗しつゝあり、而して甚だ實行し易きものあるに似たり、請ふ試に之を述べん、讀者若し吾人の爲に同情を有せば、虚心平氣なる批評的公正と哲學的冷眼とを以て之を讀み玉へ、吾人は學生間に於ける宗教道德の不振の原因は學生其人の謬見に基く事を發見せり、卽ち多數の學生は全く美人慾を捨てずんば宗教家又は道德家となる能はざるものゝ如く思惟するならずや、抑ゝ宗教又は倫理てふものは人類の幸福を最大ならしむるを以て目的とす、而して人類全体の幸福は個人の幸福の集れるものに非ずや、故に宗教も倫理も及ぶ限り個人の幸福を大ならしめんとする事言を待たず、而して其幸福は慾望を滿足せしむる事によりて生ずるなり、かるが故に個人の欲求にして他人の幸福を害せざる限りは出來得る限り之を遂げしめんとするが宗教家道德

家の目的なるべし、果して然らば宗敎家又は道德家が、學生の行爲に對し、他人の幸福を害せざる範圍に迄も立入りて、絕對的の禁慾主義を主張する時は、是れ其目的と正反對するものに非ずや、是に於て問題は轉じて意志の强弱論に移らざるを得ず、卽ち吾人が他人の幸福を害せざる範圍に於て快樂の最大量を求めんと決心したる時、之を實行するに足るべき强固なる意志を有するや否やの問題なり、吾人の見る所を以てすれば、學生一般を平均して意志の弱きが如く見ゆるは、美人慾に對する全体の欲望を取り去る事を道德なりと誤解する故には非るか、美人慾にして他人の幸福を害せざる範圍に於て求め得る幸福の量は實に大なり、而して道德は之を禁ずる必要なきなり、美人慾の全体と博愛的慾望の全体とを比較して幸福の量を取捨するは難しと假定すとも、他人の幸福を害せざる範圍の美人慾と、放縱なる邪淫を伴ふ美人慾との差額は、必しも宗敎又は倫理を實行する自重自尊の快樂より大ならず、否却て一夫一婦の制に於ける美人慾又は男女交際に由りて求むべき快樂の方大なる事あり、之を要するに、絕對的に意志の强弱は論ずべからざれ共、放恣にして無制限に美人慾を貪らんとする者は、次の三ヶ條の理由を考ふる時は、非常に强固なる意思を有せずとも、此幸福主義の危險を避くべき丈けの意志の强さは之を有するなるべし、卽ち

（一）宗敎又は倫理は絕對的に禁慾を命ずる必要なく、却て他人の幸福を害せざる範圍にては、出來得る限り各個人の欲求を滿足せしむべし、

（二）宗敎又は倫理と衝突せざる範圍に於ても、愛美人的快樂は非常に大なるものあり、

(三)如何に極端なる美人慾を貪らんとすとも、法律の規定以下に過ぎず、
右の理由を熟慮せば、宗敎的快樂を捨てゝ、極端なる美人慾を貪るは却て快樂を損するものなり、

己、健康

富士登山をなす者、往々山頂にのみ着目して、眼前を顧みず、不意に岩石に躓きて足を挫き、或は脚を折り、中途にして登山を廢するもの少なからず、前途遼遠にして且高尙なる理想を有する者、豈健康に注意せざるべけんや、語に曰く「志大なれ心小なれ」と、高山博士の如き大人物も健康の爲には大膽に失したり、之を小にしては殷鑑遠からず我輩に在り、三日の徹夜三年の休學を償する大失策は世人の爲の良き見せしめなり、勉强と運動は其一に重きを置くべからざるは勿論なるに、賞品を以て勉强過度の者を益過度にし、運動に偏する者を益偏せしむる學校は、殘酷にも全生徒奬勵の爲に數人の優等生又は運動家を犧牲にするなり、而も其犧牲となつて不具者となりつゝあるを自覺せざる者もさりとは餘りに無邪氣なるかな、

(四) 幸福の最大量

以上列擧したるは人生の幸福の材料中の主要なるものなり、今是等の材料によりて自己の幸福の最大量を求めんと欲せば、其中にて先最大なる幸福の源泉なりと信ずる一種の材料を選み、其他の材料は是と衝突せざる範圍にて出來得る限り之を取る、此に注意すべきは、知識慾、名譽心、美慾等は假令其一半を欠ぐとも他の一半の幸福は尙存す、然るに獨り宗敎心に至ては之と大に異り、假令

或人に對し博愛的行爲あるも、他の人に對して愛を欠ぎて其幸福を害する時は、既に博愛家たる自信を有せず、譬へば知識慾美慾等は珍品美味の如し、一部分之を得れば其れ丈けの幸福あり、數學的知識慾は必しも歴史的知識慾を有せずとも、或部分の幸福を受くべし、博愛慾は譬へば電信線の如し、一箇所切線さるれば其用をなさず、一方に百人を愛するも、一方に十人を害せば、既に博愛家たる自信を有せず、故に博愛心と他の欲望との衝突には最も熟慮するを必要とす、卽ち斯る場合に博愛心をして勝たしむるも他の欲望の一部分を欠ぐに過ぎざれ共、他の欲望をして勝たしむる時は、博愛家たる自信の幸福を全く棄てざるべからず、是れ一朝一夕に實行し難き理論なれ共、幸福の最大量を得んと欲するものは大に修養を要する所なり、

吾人は先に列擧せし幸福中、基督及釋迦の幸福を以て最大なりと信ず、其理由左の如し、

(一)宗敎的快樂は永遠不斷なる事、
(二)宗敎的快樂は人類全体を欲望の對稱とするを以て、何人をも恐れざる自信大なる事、
(三)宗敎的快樂は度に於て色情よりも弱き事あるも、時間の上に於て最長き事、
(四)宗敎的事業は肉体の死後に不朽なるを以て、日常期望の快樂を以て滿さるゝ事、
(五)宗敎的快樂は一部分の缺陥なき事、

故に吾人は宗敎的快樂を以て第一位に置くべきものと信ずるを以て、其他の欲望は之と衝突せざる範圍に於て出來得る限り之を求むる事を要す、

吾人は基督教及佛教に對し平等無差別の立脚地に在る事前述の如し、然るに自己一個人としては基督教信徒となる、其理由の主なるは左の如し、

(一)宗教は人類に共通普偏なるを要す、然るに基督教は既に全世界に其歩を延したれば、是と共同一致するは人類共通の信仰を振興するに最も適當なり、

(二)宗教は實行的なるを要す、然るに吾人日常の行爲を托するに最も適當なるは基督教の日曜集會制度なり、

(三)基督教信徒は有德なり、國教制度の基督教國民は種々なれ共、少く共日本の基督教信者は有德の士最も多し、故に是と交際して感化を受くるは最も必要なり、

(四)博愛主義は幸福主義の實行に符合せり、佛教の目的も涅槃樂に在るなれ共、其手段としては消極的なる寂滅主義即ち禁慾的寂靜主義を取れり、是れ二千餘年前の印度には必要なる制なりとすとも、活動主義、進化主義の盛なる廿世紀以後の世界には適當ならず、之を積極的博愛主義の如くなすには最も困難なり、

吾人は上述の理由、特に其世界一致の信仰上に基督教の適當なる事と、佛教の寂滅主義が進化主義と相容れざる事との二大理由によりて、寧ろ基督教を採れりと雖も、亦大に佛教の長所に待たざる可からざる所多し、第一佛教は大乘小乘の兩方面を有して、人格的の佛陀は以て一般の人民を指導すべく、純理的の眞如は以て學者を滿足せしむべし、是れ實に佛教の一大長所と稱すべきものにし

て、單に佛教は深遠なる哲學思想を含有して、哲學者の一大文庫たるに止まらず、宗教としての價値も亦大なるものあり、加之其深廣なる對動物見は、唯人間のみを以て慈悲の對稱とせず、大に其範圍を擴大せり、是れ我田引水的ならざるべき宗教の性質上、大に賞揚すべき高潔なる思想なり、されば若し基督教にして、略〻其目的を達し、人類自ら獨立して以て世界的秩序を有するに至り、進んで他を顧るの餘力あるに至らば、唯其博愛心を以て簡單なる禁動物嫉苦論に止めず、大に佛教の深遠なる動物見を研究して、出來得る限り殺生手段を避けて人類の需要に應ずべき方法を攻究せざるべからず、唯かゝる大慈悲は、今後數世紀間は、人類自立の急なるが爲に之を實行する事を延期するの已を得ざるあるのみ、

（五）結論

智仁勇兼備の神武帝、一たび建國の基礎を固め玉ひし以來、二千五百有餘年間、亞細亞の極東に偏在して、殆ど別世界の狀をなし、萬民皷腹の太平を夢みし島帝國、二十七八年戰役後、一躍世界の强國に列し、明治維新後三十年間に輸入したる歐米の文物を利用して、富國强兵の實を擧ぐるに急進的教育の普及を以てしたる敏腕は、當に人類史上に特筆大書すべき一大功績なりと謂はざる可からず、然りと雖も吾人は猶是に滿足する能はず、否大に我國民の一大陷缺を曝露して、識者の反省を請はざるべからず、其陷缺とは何ぞや、我國の軍備猶其獨立を維持するに足らざるか、曰く否、我國の財政能く政治機關を運轉するに足らざるか、曰く否必しも然らず、夫れ吾人が世界に對して

我國の强大を誇るに足らずとする所以のもの、富國强兵の其れならで、世界的人物に乏しきこと是なり、吾人は我國の領土の小なるを憂えず、何となれば國民の幸福の大小は領土の大小に由らず、例へば露國の人民必しも我國の人民より幸福ならざるが如し、吾人は亦我國の人口の少きを羞ぢず、例へば支那の國民必しも我國民に優らざるが如し、唯た獨り吾人の最も羞ぢざるを得ざる所以のものは、國民の偉大ならざる事是なり、或は北條時宗の如き、或は豐臣太閤の如き、將た亦山田長政の如き、多少外國に對して武勇を示したるものなきに非れ共、未だ以て是等の人物は、世界的人物と稱するに足らず、或は歷山大王の如き、或はシーザーの如き、將た亦成吉斯汗父子の如き大武勇は到底我國の史上に之を求むべからざるなり、而も是れ猶眞に偉大なる人物と謂ふ可からず、唯彼等は一時的功名心を滿足せし外、後世の人類を支配するに足る痕跡を止めざるなり、否吾人の所謂偉大なる人物とは、時に古今の別なく、地に東西の隔なく、有りとあらゆる人類をして、靡然として己に向はしめ、其中心點となり、其主人公となり、以て永遠不朽の活動をなすべき世界的人格を有する者是なり、即ち道德界に在てはソクラテスの如き、宗教界に在ては基督及釋尊の如き是なり、孔孟の如きは或は之に準ずべき大人格なれ共、未だ其對稱とする所、人類全体の統一にはあらで、支那の天下を其理想とせしが如し、故に彼の夷狄に對して冷淡なる事、釋尊の無我平等、又は基督の愛敵の精神には及ばざるべし、之を要するに、宗教界道德界は更なり、武勇界又は政治界、或は經濟界に於ても、眞に萬國に誇るに足るべき世界的人物は、之を我國に求むべからざるなり、是れ吾

人は我國の强大を世界に對して誇るべき價値なしと稱する所以にして、吾人の最も憤慨に堪えざる國民的耻辱なりとす、勿論我國に於ても日蓮の如き大理想を有せし人格なきに非ざれ共、其結果の上より云へば、法然、傳敎、空海、親鸞と異るなく、單に佛敎界に一宗派を增せしに過ぎず、其大理想たる佛敎統一は其實現を見るに至らざりしなり、嗚呼惜い哉、

夫れ人類の統一は、太古野蠻の時代に在ては、武力を以て之を征服するも不可なかりしならむ、而も現今世界の秩序比較的に進步したるものあるを以て、歴山又は奈翁の如き武勇も、殆ど之を用ゆるの餘地なかるべし、否斯る肉体的戰術を以て、世界征服を試むる事の無益なるは、旣に羅馬勃興の時代には、其未成功を先見したる者あり、之を基督と爲す、是れ吾人が基督の理想の爲に働かんと決心したる所以なり、然りと雖も吾人は宗敎にのみ依賴して滿足するを得ず、即ち廣き意味に於ける幸福主義の必要を感ずるなり、抑ゝ基督敎又は佛敎は、博愛又は慈悲を唱道するものなれば、其他の欲望に關しては寧ろ禁慾を命ずるを常とす、然るに吾人は此點に就ては多少其見解を異にするものあり、抑ゝ人類の發達進步は欲望に由りて導かるゝものなれば、博愛以外の欲望と雖も、是と衝突せざるものは、積極的に之を奬勵せざるべからず、若し然らずんば、此社會は彼の進化主義と相容れざるものとなり、柔仁無氣力の人間を造出するに至るべし、是れ吾人は宗敎信者中に軟弱のもの多きを認むる所以なり、かるが故に一方に於ては宗敎によりて博愛を奬勵すると共に、亦一方には進取的競爭場裡に立て活動すべき人物の必要なるを信ずるなり、是に於てか吾人の唱道

せんとする幸福主義は、單に在來の宗敎的欲望卽ち博愛心を奬勵する耳ならず、更に進んで是と衝突せざる範圍に於ては總ての欲望を奬勵せんとする所以なり、

夫れ基督又は釋迦牟尼が、單に精神的快樂のみを奬勵して、肉体的快樂は之を抑壓したる所以のもの、吾人の見る所を以てすれば、現今と其時代境遇を異にすればなり、例へば今家屋を建築せんとするに、其宅地と爲すべき地面が、若し荒蕪なる叢林の如きものなる時は、先其竹木を伐り、荊棘を刈り、以て其全地面を一掃せざる可からず、斯る場合に當つては其荊棘雜草を區別して、美花を着すべきは之を存置し、其他を刈取るが如き綿密なる處置を爲す遑なきなり、然れ共一旦其宅地を開拓して、其上に建築せる家屋も畧ゝ其形体を具へたる場合には、或は他より花卉珍木を移植するも可なり、或は又其地面に生ひ出でたる草木に就きて、其有益なるは之を存し、有害なるは之を除去するを得べし、吾人は基督又は釋迦の立敎當時の狀態と、現今の社會の境遇とを比較して、大に此例に類似する所あるを信ずるなり、卽ち二千年內外古代に溯りて、印度及猶太の社會の狀態を想像するに、到底尋常一應の手段を以て之を改良すべからず、凡て肉体的欲望は悉く之を排斥し、絕對的禁慾主義を取るに非ずんば、新に其上に建築せんとする天國又は涅槃の實現を見る能はざるなり、然るに今や人文は大に發達し、國家としての社會的秩序は既に完成し、更に進んで世界的秩序を見んとす、此場合基督敎又は佛敎は、各々此世界に移植するに博愛慈善の美花を以てし、又宗敎家以外の者も、或は敎育倫理或は政治法律等により各其貢獻する所ありて、基督の建築せる天國は

用に適用すべけんや、即ち博愛慈善てふ精神的欲望を鼓吹すると共に、或は衣食住等の肉体的欲望、或は競爭心、知識慾等に至る迄、凡て之を奬勵すべし、何となれば人生の目的は幸福に在り、幸福は獨り博愛慈善にのみ存するものに非ず、肉体的欲望中にも亦之を存すればなり、是れ二千年前に於ける幸福主義と、吾人の取れる幸福主義の異る點にして、時世の要求、社會の境遇に應じ、其手段を變せざる可からざる所以なり、以上縷述する所、之を切言すれば左の如し、

殆んど美花を以て圍繞されざりし、此時に當り庭園の改良を司る者、豈二千年前の方法を其儘に適

（一）宗教的快樂を奬勵して、人類統一の欲望を有する世界的人物を作り、以て我國民をして眞に偉大ならしむる事、

（二）博愛を妨げざる範圍に於て、凡ての欲望を奬勵し、以て幸福の材料の範圍を廣め、宗教的弊害たる柔仁軟弱に陷る事を避けて、進化主義、活動主義と併行せしむる事、

然り而して此理想を實現するは勿論容易の事に非ず、生涯の時間を全く之が爲に盡し、全き智力と全き同情とを以て活動すべきは勿論、時として父母の孝養を怠らざるを得ざる事もあるべく、時として兄弟妻子の愛を絶つ事あるを豫期すべし、基督曰く、

凡そ我に來つて、其父母妻子兄弟姉妹又己の生命をも憎む者に非ざれば、我弟子となる事を得ず、

嗚呼多士濟々たる四百有餘の六高の健兒よ、苟も血あり涙ある者は、吾人の微衷を眞面目に考察せよ、

義太夫美論

α、β、子

美と藝術……義太夫美の具象的階級……藝術に於ける義太夫の位置……女義太夫美論……
……現今の戯曲……余論

一、美と藝術

『過つる春の頃、色珍らしい草中へ、繪にある様な殿御のお出で……』と言う千本櫻の鮓屋の娘が言を想起せよ、其の處に彼女は、大なる自然美と個体形式美を感じて恍惚たりしならむ、崎嶇羊腸たる山間の細徑を上つて、水あり、然れども其水たるや、眉細き美婦が紅を溶さん水には非ず、詩趣ある草屋の側に、斷えず廻れる小さき水車を動かさんの水にも非ず、全てそれ等の泉源たる、小石を轉がして潺々聲あるの細き清き溪流なり、松杉長に青く亭々天を蔽う其下、其流れに、手拭を濕し、右手に袖をかゝげ、流るゝ汗を拭う、一個旅人を見よ、玆に吾人は自然が齎す至大なる壯美を見ずや。

然り自然は美なり、吾人は一日の旅行に於ても各所に自然美を感受し得べし、天然は美に就て富充なり、然れども熟慮稍久うせよ、然るとき吾人は自然の他の半面、即ち醜を認知すべし、實に現實世界に於ては、個々物体間には必然の關係ありて存す、爲に自然の吾人に供するものには、互に相牽引する力ありて、絶對の自由を欠く、從つて本來の理想をそが上に表象することを得ず、於玆

哉吾人は自然の產物の中、嫌惡の情を喚起せしむる物は除外とするも、尙、天然美は吾人に對し、冷淡且無趣味なり、而して時に吾人をして恍惚三昧に入らしめ、此間我あるを忘却せしむる、藝術が美に及ぶべくも非るなり、其理如何を問うを止めよ、フヒヒテが所謂、精神の有無にあり、前者には精神を欠く、後者には藝術家が死せる物質の中に攝取せる精靈の呼吸存す、爲に對觀者に一種の高尙なる精神的活動を催起せしむるに非ずや。

尙これをヘーゲルが理想論に聞け、彼は、世界の發達は理想の實現の進程なりと極言せり、自然は實に理想に對して無意識なり、故に自然は理想實現の進程に於ては最も初步に屬す、隨つて自然美はあらゆる美中の最劣等なるものなり、實に無機物は、全く機制的法則の下に成立し、何等の發達をも、何等の理想の發現をも、爲すの餘地を有せず、漸く有機体の至高、人類に至つて、自餘の有機体の單に感覺上の美を備ふるのみなるに反して、更に精神美を具足するに至る、これにより人類を以て自然美中の最高等なるものとすべし、然れども人類と雖、尙因果律の拘束するあり、絕對の自由を有せず、未だ有限界に放浪せるもののみ、美の至高には非ず。

理想の發現は、この有限界に於て滿足すべきものなりや、非ず、更に無限の理想を渴仰して止まず、實に此渴仰を醫せんが爲に藝術は生る、斯の如くして、自然美は藝術美に數步を輸せざるべからず、藝術は自然の摸倣に非ず、自然の醇化にあり、キルヒマンは之れを理想化と稱せり、理想化は實に藝術の第一義なり、且藝術家の權限內にあり、それと共に大なる手腕を要するの所たり。

非自然、非眞實、非道德を以て、藝術家の作物を罵るが如きは、未だ藝術を解せざるものなり、義太夫に於て詞たるべき所をも、歌うと雖、これを不自然非眞實なりと咎むべきに非ず、裸体畫及裸体彫刻を以て非道德と爲すが如きは未だし、美は常にハルトマンが所謂感覺的若くは空想的假象(シャイン)に存在す、且藝術美は藝術家が感興ある實体の理想化せる所に表はることを忘るべからざるなり。

言多少枝葉に渡つたるも、かくの如くして、美は自然に於て認知せられ得るより、藝術に於てより大なるものを求め得らるゝを知れり、實に美と藝術は決して離るべからざる關係を有す、高級美の大部分は藝術に於て求められ、藝術は美なくして存在すべからざるなり、而してレッシングが

Der Zweck der Kunst könne nŭr die Schönheit sein.

の言を首肯し得るなるべし、尙彼は藝術獨立論を唱へて曰く「藝術たるものは、宗教道德政路の方便たるべきものならんには、藝術の藝術たる特性を褫奪せられたるものなり、藝術の平等と不朽を守らん爲には、其絕對的獨立を守らざるべからず、唯美あるのみ、觀美の際に感ずる唯特種の美快感を與ふれば足る、故に美は藝術家にとりて、最始の覺悟たると共に又最終の目的なり」と

旣に吾人は美と藝術が如何に密接なる關係を有するやを知れり、次に義太夫美の眞價を評定せんとするに先ち、具象階級の何れに屬するやを見んと欲す。

二、　義太夫美の具象的階級

吾人が今義太夫と稱するものは、大阪に於て淨瑠璃と謂う所の者にして、東京に於て如斯稱する

時は、單に義太夫のみに非ずして、其他一中、富本、清本等を含有すと謂うを以て、特に玆には義太夫と呼べり、即ち狹義の淨瑠璃の謂なることを斷り置くべし。

而して今吾人は義太夫に屬すべき美の階級を見んとするに及んで、ハルトマンが具象美論を概見するの必要あるべし。

彼は先づ官能的快感即無意識形式美 Das unbewustformalschöne od. das siunlich Angenehme を取れり、キルヒマンはこの官能的快感を重視したる傾向あるも、全ての官能的快感を以て直に美と謂うべからず、唯高等官能たる眼と耳に於て受け得べき色及び音のみ、美の範圍內に入るを得べきなり、次には單に量的理想のみに關する量美 Das mathematische Gefällige を取れり、こは形式美中最低級なるものにして、未だ內容美と稱するを得ず、次に取れるは力美 Das dynamische Gefällige にして實に第二次形式美たり、之れに至つて質と量とを兼具へたる力的理想に進みたるも、尙形式美たることを免れず、尙進んで、第三次形式美即合的美 Das Zweckmässige に至り、その中に於ても目的を自己以外に有する所動合的美より、目的を自己の內に有する生物美に進み、玆に前低級美に比して內容美たるに至り稍具象と成りしと雖、未だ抽象美の範圍を脫せず、漸く進んでより細き種屬美 Das Gattüngsmässige と成り、屬想に至り尙進んで遂には具象美即小天地的個体美 Das Konkret Schöne od. das mikrosmisch Individuelle と成つて、玆に個想表はる、是れ美の最高級なり、然れども吾人は何等の個体をも指して、最高の理想的發現なりと謂ふを得ず、何となれば各個体の實現

し得べき個想の內容は、是の個体が經由せる凡ての現實(アクチユアリテート)の總合よりも遙に〳〵豐富なるものなればなり、個体に關する一切の可能性(メーグリツヒメイド)の遺漏なく發展せられたるもの卽ち絕對の個想に比すれば個体美は尙ほ不完不了なるものなり、於茲哉全理想(トータルイデー)＝絕對の個想＝を以て具象階級の最高段に置く可きなり。

今茲にはハルトマンが具象階級論を借り來りたりと雖、種屬美以下の形式美は、其內容に於て未だ豐富の域に到達せず、隨つて長く美的關心(エセチツセインテレツセ)を支持する能はず、眞正なる美は個体美に於てのみ求めらるゝ事は、觀美意識を有する人の明かに知得すべきものなり、而して吾義太夫はこの具象階級の何れに屬すべきか。

吾人は之れに答ふるに、個体美を以てすべく躕躇せざるべし。

傳說區々、其信を置くべきもの何れなりや決せざれ共、織田信長の侍女小野氏通女、源牛若が某長者の娘淨瑠璃に忍び逢ふ事を十二段に述作し、淨瑠璃物語と稱して以來、種々なる變遷を經、その間には一流新派を出し、一時は其種類非常なる數に上りしも、現今に於ては、大薩摩、義太夫、一中、河東、新內、常盤津、富本、淸本、其他二三に過ぎず、而してこの大薩摩以下のものは、凡て單に歌曲たるに、義太夫のみ、單に歌曲たるに止らず、半ば演劇的分子を包有し來つたるなり、爲めに淨瑠璃より變轉一派を爲し來つたるもの、中には唱謳するの外に、舞卽振り事を用ゆるものあれども、尙その歌そのものゝ如く、抒情的なり、敍事的なり、然るに義太夫に至つては、元祖竹

本義太夫（後に筑後掾藤原博敎）と我國有數の大文豪、巣林子近松門左衛門とを得て、操人形と三味線と共に相待つて、茲に唄と劇との中間の一藝術を發生せるなり、その淨瑠璃と謂う義太夫の作物に至つては、全然演劇的にして劇曲と稱するを得るものなり、故に他の淨瑠璃節と異り、こは一個の性格を描寫せんと務むるものなり、故に義太夫より感受し得る美感は、正に小天地的個体美たるなり、具象美たるなり、これ實に前論せし如く、藝術の求むべき最高の美なり、具象階級上最高の美なり。

かくの如く、義太夫の吾人に表現する小天地的個体美が最高具象美と斷言するときは、上述ハルトマンが全理想を具象階級の最高級とする說と、矛盾するが如きも、かの全理想なるものは、完全なる族想と等しく、論理上の假說に過ぎず、實際上到底かゝるものを求むべからざるを以て、觀照の上に立てる藝術の對境となり得べからざるなり、故に全理想は假令論理上具象階級の最高級を占むると雖も、感覺の緣を離れて立つが爲に、美的たるを得ざるなり。

於茲吾人は、義太夫美が藝術の求むべき最高なるものなることを知れり、然れども藝術の多くが、この個体美の表現を旨とするものたるを以て、次にはその藝術中に於ける義太夫美の位置如何を研究せんと欲す、

三、藝術に於ける義太夫の位置

敢て古きを殘さんが爲か、現時に至るも尙上下（かみしも）に衣紋を正し、見臺を前に元祿その儘の所謂淨瑠

璃本を開き、扇子を取り、東洋に於ては勿論、遠く西に之れを求めんとするも得易からざる、變轉無限至妙盡くるなき三味線と相待つて、語り出でんもの之れを義太夫となす。

遠き小野お通が昔は知らず、竹本筑後が義太夫と稱して貞享二年現今の大阪浪花座に於て、淨瑠璃興行の蓄を開き、下つて元祿十五年に至り、作者紀海音を得て、若太夫と稱して豐竹座に旗を擧げたる豐竹越前小掾あり、而してこの竹本、豐竹二派は、殆んど全てのものが經るべき、榮枯盛衰の歷史を殘して現今に及べり、その間に於て、竹本座には近松門左衛門より傳えられて、竹田出雲、文耕堂、近松半二、小出雲等の淨瑠璃作者を出し、義太夫には、陸奥茂太夫、竹本政、賴母、播磨掾、島、太隅掾、春、大和掾を出せり、豐竹座に於ては、紀ノ海音に續いて西澤一鳳、並木宗輔、若竹笛躬等は相繼いで其作物を場に上せり、そが太夫には、豐竹上野小掾、越前小掾、鐘、時、此等を出せり、かくの如くして此等の作者及び太夫が、吾藝術界に如何に大なる貢獻を爲したりしや、作物としては、唯敍事詩及び抒情詩に滿足したる日本文學をして、實に戲曲の域に到達せしめたるものなり、當時の演戲に用ひし脚本も、近松等が淨瑠璃より出でたるものならざるは無し、義太夫そのものに於ても、西歐に於ける希臘戲に對する、吉備樂、能狂言の如き古代戲より多大なる進步をなしたる、又唯に抒情をのみ旨とせる吾歌曲より數步を進めて、小天地的個体美を表顯せんと務むるに至れり、換言せば、演戲的、戲曲的、對話的分子を含有す、於茲吾人は他藝術との關係を求めんとするに當り、便宜の爲へーゲルが藝術の分類法に見んと欲す。

先づ主觀的分類法を取らば、藝術は第一眼に關するもの、第二耳に關するもの、第三耳と目に關するもの之なり、建築彫刻繪畫の如きは眼に關するものなり、悋情詩と音樂は第二に屬す、第三耳と眼に關するものは演劇なり、次に客觀的分類法に隨へば、第一形体より成るもの建築繪畫彫刻の如き然り、第二音響よりなるもの音樂の如き之れなり、第三言語より成るもの詩歌然り、演劇の如きは前三者を合す、次は歷史的分類法なり、その第一は、埃及、アッシリャ、印度に表はれたる古代藝術を含む Symbolicismus なり、こは實に、藝術史上最幼稚なる時代にして自然は精神を壓抑せるなり、卽ち量美に於て勝る、然し人文進み精神發達するに及んで、第二 Klassicismus に進み漸く精神と自然の均衡を保てり、卽ち形式美に於て勝る、尙益々精神は發達して自然を司配するに至つて、第三 Romanticismus と成り、精神の力は自然を超駕し、玆に藝術美は精神美を主とするに至るなり、これヘーグルが西歐の藝術史より立てたるものなれども、何れの國の藝術も全てこの行程を取れるは明瞭なる事實なり、これを我國に適用するも敢て不可なきは言を待たす。

如斯して、義太夫は、主觀的分類法に依れば、第二耳に關するの藝術なり、客觀法に隨へば、同じく第二音響に關するものなり、而して歷史的に之れを見れば、實に最近發達進步せるの精神美なり。

玆に吾人は、眼に關するの藝術として、形体に依るの藝術として、その大部分は形式美に存する藝術として、建築彫刻繪畫を、耳に關する、音響に依る、精神美を主とせる義太夫と、比較して其

間の藝術上の位置を爭はざるべし、而して同じ種屬に屬すべき、狹義の音樂卽ち長唄、常盤津等と義太夫及び劇、古代舞樂、能狂言、滑稽劇等に就てその關係位置を見んとす。

今吾人が何れの國たるを問はず、既に文明の域に達せる所の文學史を披見せんか、吾人は明かにその發達の順序は次の如きを見る可し、卽ち第一には、敍事的敍事詩より抒情的となり次には敍事的抒情詩より抒情的抒情詩に進み、尙進んでは抒情詩を脱して戯曲に入り、その內にも敍事的より抒情的となり、遂には詩の最高純正戯曲に及ぶ、實に吾人が前に取りたる藝術卽第一耳に關し、第二音響により、第三精神美の發揮にある藝術の全ては、この吟體詩と非常なる密接なる關係を有す、實に吟體詩の進步は、この種の藝術が進步なる、この點に於ては實に文學史と藝術史は同一調の發達を來すものなり、然し演劇に於て神を解せるの俳優なく、義太夫に於て妙域に達せるの語手なくば、假令完全なる、戯曲あるも何かせんと言う勿れ、藝、神に入るの俳優なく義太夫語なくしては、成立せざるべきも、吾人が比較研究に於ては、演者(アクトル)を待たず、劇は劇たり、義太夫は義太夫たり、共に至妙なる演者を得たりと考へて然るに非ずや、然り玆に吾人は、演劇に於ける團、菊の如き、義太夫に於ける攝津、大隅の如き、長唄に於ける杵屋、常盤津に於ける林中の如き、舞に於ける九女八、三田八の如き、稍絶妙の域に達せんとする、此等の藝術を合せ見んか、その藝術美は何れに於て最大なりや、精神美を最多く與ふるものは何ぞや。

文學發達の歴史に見るも、精神美の發揮せらるゝ程度より徵するも、敍事詩は最低級なる吟体詩

なり、忬情詩之れに勝り、純正戲曲は其最高位にゐるが如く、敍事的なる古代劇は藝術の低級なるものなり、忬情詩を唄ふ德川時代の廣義の淨瑠璃は彼に比し非常なる進歩なり、戲曲を演ずるの演劇に至つて藝術は全きなり、如斯吟体詩の歴史は、之を演ずるの藝術史と平行するものなり、而して謠曲の如きは、敍事詩の稍忬情的分子を加味せるに過ぎず、隨つて能狂言の如きも、其形体は稍演劇に似たりと雖、未だ古代劇たり、足利時代の劇たり、精神美を主とする今世劇には非ず、滑稽劇に至つては演劇の内に入るべきものなるも、未だ我國に於ては、眞の滑稽の意義に適へる、吾人に滑稽の美を與ふるもの無きなり、悲哉未だ我國は滑稽劇の一つをも有せざるなり、滑稽曲と、我演劇を成せる和解曲及び悲壯曲との優劣は後章現今の戲曲の所に於て述ぶべし、

而して本文の主題たる義太夫は如何、巢林子以下の淨瑠璃本が、忬情詩よりも個体美の發現に務めたりと雖、純正戲曲の然るには及ばず、未だ淨瑠璃は戲曲的たると共に忬情的なり、爲にそれを語るの義太夫も、個体美表現の程度は演戲に一歩を輸せざるべからず、演戲は對觀者をして耳と目に依つて、個体精神美を味はしめんとす、義太夫美は唯耳に依つて受くるなり、演劇に於ては俳優が白と科に依つて、個体精神美を發揚せんとす、義太夫語は唯白に於てす、しかもその白たるや、純粹なる言語卽詞のみに非ずして唄的たる所あり、卽その形式に於ても、その實質に於ても忬情的分子を含めるは確實なり、又忬情的なる淨瑠璃より轉化し來つたるの歴史を考ふるも、その然るを知るに難からざるべし、實に義太夫は忬情的藝術(かく謂ひ得べくんば)より劇に移るの階梯たり、

然れども淨瑠璃より變化したる諸藝術中に於ては、最高級なるものなり、總稱たるべき淨瑠璃の名を、この義太夫に奪はれたるも宜なり、然れども玆に論じたるは、各藝術が齎らす美を基礎とせることを忘るべからざるなり。

四、女義太夫美論

現今女義太夫なるものが、可なりの勢力を以て、社會に遇せられつゝある所以に就て、論者は久しく怪しみたるなり、否今も尚疑問に屬するなり、抑も義太夫を語るに就て、女性の聲の適せざるは、既に一般の知る所たり、且女義太夫は其多くが否全然、義太夫を語るに非ずして唄うと稱する方適當なるなり、吾言を怪しむの人は、先づ女義太夫を聞け、而して後男性の語る義太夫に行け、必ずや其人は前者に於て、何事なるか判然せざりし所も、後者に至るに及んで直に氷解する所あるべし、稍義太夫に熟せる耳をもつも、初めて聞く語物ならんには、女義太夫に於ては徹頭徹尾了解するを得ざるなり、實に女義太夫は純粹なる義太夫に非ずして、常盤津淨瑠璃たり、より多くの抒情的分子を有す、寧ろ義太夫と稱せんよりは、淨瑠璃の他の分岐に近きなり、且女義太夫は彈語(ひきがたり)なるを以て、語り方のみに全力を注ぐべからず、如斯全ての點に於て劣れり、爲に義太夫としては、多大の價値を有せざるなり。

附言

未だ論ずべきもの多く、此章の如きも盡きたるに非ざるも、義太夫美論は之れにて殆んど盡きたると、稍長びきたると、期

日切迫せるが爲に、一旦筆をおいて更に改めて「現今の義太夫」の名の元に、尙殘れる所の、在來の戲曲と、葛藤の包有的解決たる和解曲と、超絕的解決たる悲壯曲と、論理的自滅たる滑稽曲と、綜合的解決たる有情滑稽曲との關係を論じ、次で將來日本戲曲の取るべき方向を示し、餘論の項に於ては、現今の義太夫語の名手が、語風を許し、遂に吾義太夫は現今の狀態に於て、長き生命を有せるや否や、將來或發展を爲し得べきや否やに論及せんと欲す、



學術

池田光政

内藤馬藏

此一編は予が文科大學在學中の舊作にかゝる、池田光政の治所は現に諸子が講學の地たる岡山なりき、されば光政の生涯を紹介するは諸子にとりて多少の興味なきにあらざるべし、是予が敢て數年前の舊稿を改訂して玆に揭ぐるに至りし所以なり、

學術

德川氏十五世三百年の間、賢諸侯の名を得しもの前後甚多しと雖、其尤も多く輩出せしは、實に三四代將軍の世にありき、紀伊の德川賴宣、會津の保科正之、備前の池田光政、水戸の德川光圀の如き則是なり、此他松平信綱、土井利勝、阿部忠秋等の如きありと雖、寧ろ德川氏の忠臣、敏腕なる政治家として顯はれたるものにして、其領內の賢君としては未た多く傳ふべきものあるを聞かず、蓋し其領土狹小なりしかば其施政も亦天下の耳目を惹くこと能はざりしならんか、要するに大藩の主にして其治蹟善良なりしものを擧くれば、先つ指を前記數侯に屈せざるを得ず、就中其施政は治國の模範として、永く後世に尊崇せられしは、實に池田光政其人なりき、かの尊

王を首唱し國學を鼓吹せしにより、尤もよく人口に膾炙せる水戸光圀の如きも、光政の治蹟に激せられて奮發せしものにして、從て其施設も亦多く範を光政にとりしが如し、正之賴宣等も亦寧ろ德行を以て鳴りしものにして、治國の手腕に至りては遙に光政に及ばず、光政が當時第一流の賢諸侯中にありて、一頭地を抜きしこと已に斯の如し、されば彼を以て上下三百年を通じて、稀有の名君なりと稱するも、敢て過言にあらざるべし、

左に節を分ちて彼か生涯及び其治蹟の概略を記載すべし、

第一節、家系及青年時代

池田氏は其先攝津に出つ、源賴光の末葉なりといふ、光政の曾祖父信輝初めて織田信長に仕へ、戰功を以て攝津の地を食む、天正十三年秀吉の信雄家康と隙あるや、信輝秀吉の招に應し、長久手に戰死し、長子勝九郎之助も亦戰死す、事平きて後、二子輝政岐阜に封せられ後吉田に移る、文祿三年家康の女督姫を娶る、先是輝政中川清秀の女を娶り長子利隆を生む、關原の役家康に屬して功あり、播磨五十二万石に封せらる、慶長八年二子忠繼(督姫所生)に備前三十万五千石を賜ひ、十五年三子忠雄に淡路六万石を賜ふ、先是輝政の弟長吉因幡鳥取六万石に封せらる、是に於て父子兄弟の食邑併て殆んと百万石、山陰山陽南海に跨り關西の重鎭たり、加之家康の女婿な

りしかば、勢威並ぶ者なく、諸侯皆其下風に立ちしといふ、慶長十八年輝政卒し、長子利隆封を襲ぐ、初め備前國主忠繼尚幼なりしを以て、利隆代はりて岡山に治し、國政を執り、慶長十四年四月四日嫡男新太郎光政を岡山に生みぬ、母は榊原康政の女にして將軍秀忠の養女なり、光政が其母躰より離れて始めて呱々の聲を擧げし地は、偶然にも後年其經綸を行ひし領國なりしこと又一奇ならずや、彼は斯國を經營し、斯民を濟ふの運命を齎して、生れ來りしものと謂ふべし、

慶長十八年光政甫めて五歳前將軍家康に謁す、家康光政の頭を撫して曰く、これ三左衞門(輝政)が孫なり、早く成人せよと、依て新藤五の脇差を授く、光政受けて之を拔く、家康制して之を鞘に納めしめ、人に謂て曰く、彼の目ざしのすさまじさ、たゞ人にあらずと、以て光政が幼時已に凡童に異なり、英邁の氣象自ら其眉目に溢れたりしを想ふべし、

元和二年六月利隆卒し、光政九歳にして國を繼ぎ播磨を領す、翌三年三月幕命により封を移し、因幡鳥取に治し因伯二州三十二万石を受く、蓋し播磨の地たる山陽道の咽喉を扼し、西國隨一の要衝なるを以て、幼主鎭守の地にあらざるによる、舊鳥取侯池田長吉移りて備中松山を領す、

元和九年家光征夷大將軍に任し京師に入朝す、光政侍從に任し、將軍の乘輿に扈從

す、此際家光の一字を許され、初名幸隆を改めて光政と稱す、寛永三年秀忠家光父子共に入朝し、九月車駕二條城に幸す、光政少將に陞任して盛儀に列す、同五年幕命により本多忠刻の女を娶る、「天樹院樣(秀忠の女)の御腹の御息なれば幕下の御孫女にて天下の至重耀く計り」なりき、

元和三年の轉封より、寛永九年更に備前に移りしまで(光政十歲より二十五歲まで)十五年間、因伯二州の太守としての光政の事蹟は、唯前記數條の外、又傳ふべきものなし、想ふに此時期に於ては、光政尙年少なりしを以て、國政は老臣の輩專ら之を司り、彼は唯自己の修養に餘念なかりしものならん、光政が此時期に於て孜々修養に力めたりし事實は、左記數條の傳說之を證して餘りあり、

公(光政)未だ幼かりし頃、寢入らせ給ひても眠らせ給はす、曉になりて僅に眠らせ給ふ、近臣怪て故を問ふ、しかゝゝ答へ給はす、然るに或夜より殊によく眠らせ給ひしにぞ、人々其故を問ひ奉りしに、公答へて、父祖の蔭によりて、かく大國を賜はること分に越えたり、然れば此國民を如何にして治め養ふべきと、樣々に心を盡して思慮せるによりて久しく寢さりき、昨日論語を讀ませて聞きしに、君子儒となりて安んずべきといふことを知りぬ、これに決斷熟しゝ上は、萬の思慮もなく、よく寢ねぬるなりと、仰せられしとぞ、又十四五歲の頃、板倉勝重に治民の心得を問ひしに、勝重答へ

て、角なる箱に味噌を入れて、圓き杓子にて取るべき様に計り給はんこと然るべからん、公が明敏の心、國中を隅々まで罫を盛りたる様にと、思召すならん。大國は左はあらぬものと申傳へて、唯今の如く申しつれ、國事は寛ならざれは、人心を得がたきことにて候といひしとぞ、又嘗て春秋傳を讀みて、魯の君十九にして童心あり、といへる所にて申されしは、我身に甚恥敷事あり、唐鳥様の類翫び計りにして無用のものなり、丈夫の心を養ふべきものにあらず、是亦童心を免れざるなりとて、悉く鳥を放ち、翫物を捨てられしとぞ、(以上烈公遺事、仰止錄白石紳書等)

又光政初め王學を好み、中江藤樹の學風を慕ひ、參勤交代の節數々大津の旅舍に藤樹を招きて其說を聞き、或は書を以て質疑することありしといふ、以上の數事を以て、光政が夙に學を講し身を修め、治國の工夫に餘念なかりしを想像すべし、

寛永九年四月備前太守松平忠雄卒し子光仲(時に三歲)嗣く、先是元和元年忠繼早世し、弟忠雄其封を襲きしが、是歲痘瘡を患ひて歿す、其六月幕府命して光仲を因伯二州に、光政を備前に轉せしむ、此轉封に就きては、世上の評說區々、甚しきは忠雄の死を以て毒死となすに至る、然れども忠雄の痘瘡にて死せしことは、確證ありて動かすべからず、唯當時有名なる川合又五郎の一件あり、忠雄は又五郎を庇護せる麾下の士と爭ひ、江戶城下の大騷擾を惹起せしが、忠雄は家康の外孫にして勢威赫々た

りしを以て、要路に逼り、強て又五郎を獲んとし、麾下の士も亦固く執りて下らず、幕府は其處置に困難を極めたりしに、俄然忠雄の歿せしを以て、かゝる葢語も行はれたりけん、轉封の原因は「備前は先手の國なれば、幼主にては叶ふべからず」といふにありて、曩に光政が播磨より因伯に移りしと同一趣意なりしが如し、但し因伯の地固より備前の豐饒なるに如かざれば、多少貶黜の意を含みしことも亦事實なるべし、

第二節、政治、

光政が因伯二州の太守たりし間に蓄積せし、滿腔の經綸は、備前轉封後煥然迸發し、前後無比の隆治を致し、永く後世に治國の模範を與へたりき、

備前轉封の後幾もなく、光政は其股肱の名臣熊澤蕃山を得たり、蕃山は王學の大儒なると同時に絕倫の經世家なり、光政深く之を信任し、擢てゝ番頭となし、藩政に參與せしむ、蕃山亦心を傾けて之を翼賛し、君臣の意氣投合し、相得て水魚の如く、言聞かれざるはなく、謀用ゐられざるはなかりき、太宰春臺曰く、「夫烈公不世出之英主、得熊澤氏、而任國政、明良之遇、實千歲之一時也」と、

蕃山に次きて光政を輔翼せしは津田永忠なりき、永忠は池田家の世臣なり、承應二年兒小姓となり、寛文二年累進して大目付となり、評定席に列す、時に年二十五、實に

異數の拔擢なり、永忠も亦非凡の人傑にして、殊に財政に通し、墾田の法に精はしく、數大功を奏せり、

此二人は實に光政の左右手とも稱すべく、共に光政を翼けて、其隆治を致さしめしが、二人の採りし政策が、殆んと正反對なりしは、頗る奇觀なりとす、蕃山は易簡を主とし、永忠は稍苛察に傾き、蕃山は古地の改善を謀り、永忠は墾田の利を主張し、蕃山は政費を省きて國に餘財あらしめんとし、永忠は社倉を起して府庫の充實を圖りぬ、要するに蕃山の政策は消極的にして、永忠の方針は積極的なりき、幸にして永忠の任用せられしは、蕃山致仕の後なりしかば、二人共に各其驥足を伸はすことを得たり、唯蕃山の遺法を守りし有司等、多少永忠と相軋轢する所ありしが、光政巧に二派を操縱し、破綻を生することなからしめたり、

光政が治國の大本は儒敎にあり、其理想は所謂仁政を施くにあり、而して其施政の大方針は、夙に青年時代に於て、工夫し決定せし所にして、確乎動かす可からす、されば其治蹟は、蕃山永忠二人の翼賛になれるもの多しと雖、其大躰は固より光政自身の規劃する所なりき、故に其施設は永忠の積極的に流れす、蕃山の消極的に偏せす、巧に二者を調和し、以て其理想なる仁政を殆んと完全に實現し得たり、光政一代に施設せし所極めて夥しきを以て、便宜上之を民政、治水並に墾田、軍備、敎育、宗敎の五

項に分ちて記述すべし、

第一項、　民政、

元和偃武以後、太平の日を重ぬるに隨ひ、東山時代、桃山時代の美術的工藝は、廣く日用品に應用せられ、且つ當時は支那朝鮮南蠻天竺等との貿易尙盛なりしかば、珍奇なる器物の輸入夥しく、上下を擧けて奢侈の風をなすに至りぬ、家康儉約を以て一統の業を成就せしかば、深く子孫を戒むる所あり、秀忠家光亦其旨を躰し、頻りに令を發して之を諭せしが、多年の積習は容易に之を改むること能はす、世は益奢侈に向へり、光政の領國備前も亦此風潮を避くること能はざりしこと明かなり、

光政は夙に此弊風を防ぎ、洶瀾を既倒に還さんと志しぬ、されば自ら奉すること極めて儉にして、終生峻宇彫樓の樂を知らす、衣服飲食も亦力めて質素を守りぬ、轉封の後直に前國主忠雄の營みし花畝の樓臺を毀ち、其遊山といへば唯夏日近臣を從へて、城北旭川の中洲に至り、幕を張りて避暑せしに過ぎず、又一切の冗費贅物を省き、當時諸侯の行列には欠くべからざるものと見做されし、挾箱を無用なりとて之を廢し、偃月刀は婦人の兵器なればとて又之を省きたりと云ふ、かゝれば其人に求むることも亦甚嚴にして、毫も假借することなかりき、嘗て從者某其乘掛に絹布を敷きしを咎め、二子信濃守が天鵞絨の笠嚢を携へしを見て嘲り叱したることすら

ありき、又數、令を發して儉約を諭したり、一部の備藩典型(光政時代の制令を集めし書)を繙けば、始より終に至るまで、殆んど皆儉約の訓戒的法令ならざるはなきが如き觀あるべし、其法令に規定する所、極めて微細の點に達し、必需品の外一切贅澤品の使用を禁し、甚しきは吳服商の絹布を賣るを禁するに至る、又冠婚葬祭等の禮に用ゐる服食器具、皆一々之を規定し、諸勸進興行の類亦之を禁止せり、此等の禁令は一見餘りに極端なるが如しと雖、光政は躬行實踐して以て下を率ゐしかば、一藩靡然として其風に化し、極端なる禁令も亦容易に之を厲行し得たりといふ、

光政はしかく儉約を奬勵せりと雖、決して吝嗇を敎へしにあらず、唯衣服飲食の費を節し、其餘財を以て公役軍役を完備せしめんが爲めなりき、嘗て國老伊木長門に向ひ、「其方儉約といふことを心得違被申候、哉家中への當り、殊の外吝(シワ)き由聞及候、儉約とは無慾を專らとし、自分の事をつゝまやかにして、其財を下に施す事にて候」と諭し、又「儉約と申は、內所の奢り費えをやめて、公儀を專一に務め、軍役公役の嗜み仕るこそ、眞の士にて可有之に、內所は奢り、表向にては人馬をもしか〳〵嗜ます、儉約などゝ申者有之由聞傳候、今より後士の禮儀を存し、內所を詰め、軍役公役の心掛專一に可仕事」と令したるを見て、光政の所謂儉約なるものゝ內容如何を了解すべきなり、

光政亦民力休養に力を盡し賦税雜徭を輕減し、郡奉行、代官、庄屋等の私曲を嚴禁し、「代官給人百姓に對し貸取可爲停止事、代官諸奉行私用に百姓一切遣ツカフ間敷事」等の令を續發せり、嘗て近郊を巡視し、其地の代官威を振ひ、百姓迷惑すと聞き、直に其代官の邸に至り、親から　一、年貢取立の事、　一、宗門改の事、　此外何にても搆申間敷事、と書して與へたりと云ふ、而して地方官(卽郡奉行代官等)の姦曲を拒がんが爲め、郡奉行代官等の農民の公事クジ訴訟に與るを禁じ、別に郡目付百姓目付の官を置きて、之を司らしめ、兼て地方官の行政を監督せしめたり、行政官と司法官とを分立せしが如き、德川氏の初期にありては、殆んど絶無の制度たり、光政の卓見眞に驚くに堪へたり、又郡奉行の門外に訴狀を投入す可き箱を設け、代官庄屋等の私曲を直訴するの便を與へたりき、城中に於ても亦之と同一筆法により、諫箱なるものを設け、一般藩士をして政治の得失を言はしめ、其言用うべきものあれば、直ちに之を實行したりといふ、

官吏の私曲を防き民の負担を輕くすると同時に頻りに窮乏を救ひ利殖を奬め、津田永忠の策を容れ社倉、畝麥等の法を行ふ、初光政の長女にして本多氏に適ける人の爲に、特に藩庫に銀千貫を貯へ、毎年其利子として五十貫宛を送り、其化粧料となせしが、永忠建議して之を借り米に換へ、朱子社倉の法に倣ひ、毎年初薄利を以て之

學術

を民に貸し、年末其元利を收め、增殖して以て凶荒に備ふ、數歲の後母子相倍するに至り、其元を返へし、利を以て再ひ之を貸し、民の窮乏を救ひ、兼て之を增殖せり、後年墾田の費用は多く此社倉米によれりといふ、又畝麥の法を設け、民をして每戶每畝に麥二升を出さしめ、之を藩庫に貯へ、窮民あれば之を貸し、麥熟するに及ひて之を返さしめ、貯蓄して救恤に備へたりき、然れとも救恤度に過きて却て其弊を生し、小民一時の濟を貪りて業を勤めず、或は官吏に媚ひて利を希ふものあり、弊害少からざりしかば、救米の制を止め、其費を以て治水にあて、或は銀米を貸すも、必す耕牛を買ひ肥料を購ふこと等に限りて之を使用せしめたりき、其結果大に游民の數を減し、收穫益增し、賦亦減せすして、眞に一擧兩得の策なりき、

光政の民政上其尤も力を注きしは治水及墾田なり、從て又記すべき事甚多し、故に更に項を改めて之を述ぶるを便とす、

第二項、治水並に墾田、

山陽道の諸川は其水源地より河口に至るの距離甚短く、而も其傾斜の度急なるを以て、勢ひ中流及下流に於ける土砂の堆積を速かならしめ、一旦霖雨に遇へは河水忽ち漲溢し、沿岸の家屋田畝に多大の損害を與ふるを常とす、光政の備前に移るや直に意を是に注き、治水の大本は山林の保護にあるを悟り、寛永十九年山林濫伐を

禁し、吏を派し地を相して植林せしめ、又薪炭を他領に輸出するを禁する等、頗る意を用ゐしが、尚ほ慶安三年、承應二年の水災を免れす、卽ち承應三年二月「給人用にて竹遣候時は郡奉行に相斷はり可申候、薪は其主人伐り可用、但賣拂は仕間敷候事」と令し、嚴に竹木を保護せしも亦其甲斐なく、同年七月に至り未曾有の大洪水あり、非常の慘害を極め、收穫殆んと皆無、翌年に至り饑莩路に載つるの慘狀を呈しぬ、卽ち府庫を空ふして之を救ひ、尚足らざるを以て、金四萬兩を幕府に借り、悉く之を散し、辛ふして一時の急を救ふことを得たりき、是より以後愈力を治水に注き、熊澤蕃山の策を用ゐ、明曆元年城北の東堤長さ百間を卑くし、其左右に堤防を築き、東南に向ひて海に至らしめ、河水漲溢の際其水勢を殺ぐの用に供す、今の百間川則是なり、此より後岡山城下は永く浸水の患を免れたりといふ、蕃山尤も水利に長し、常に國中を巡行して、地理を考へ溝を通し池を鑿ち、排水、貯水の用に供し、以て旱澇に備へしむ、半田龍之口諸山の植林も亦蕃山の建議になれりといふ、

蕃山致仕の後、津田永忠出てゝ事を執り、蕃山が遙に之に反對せしに拘はらす、遂に一大新田を築成せり、墾田の大成せしは光政の死後にありと雖、永忠が墾田の計畫を立てしは光政の晩年にして、墾田の一部は光政の生前既に成りし程なれば、之を光政の政治中に入るゝも亦決して不當にあらず、延寶六年永忠が墾田の設計を認

可し、翌七年春を以て起工し、上道郡湊圓山の沿海を開墾す、半歲餘にして成り、新田三百町許を得、之を三村に分ちぬ、貞享元年(光政死後)邑久郡幸島の地を開墾し、堤を築くこと三千三百餘間、以て海水の浸入を拒き、田五百餘町を得、尋て元祿元年大に上道郡の南方を拓き、築堤六千五百間、田千五百餘町を得たりき、墾田の利あるはもとより言ふを要せず、蕃山の之に反對せしは、河口の開墾は排水を妨け、土砂の流出を塞き、從て洪水の害を加ふること、埋立の爲め必す古地を損するを以て、其古地に住せしものは開墾の犧牲となるべし、是れ仁者の爲し能はざる所なりと、の二理由に依る、然れとも兒島灣の埋沒は其地形上到底免るべからざる所なれば、其治水に害を爲すの一事に至りては、人爲の開墾と、自然の埋沒と、時日の長短こそあれ、遂に同揆に出つるを疑はず、されば時宜により之が開墾を行ふは、寧ろ自然に放任するの智惠なきに優ること萬々なり、光政が開墾を認可せしは其時機既に充分に熟せしの故なるべし、第二の反對理由に至りては、予は寧ろ之が理解に苦むものなり、墾田して收支償ふの見込あらば、多少古地を損するも亦不可なきなり、古地の住民の損害を賠償するの方法は多かるべし安ぞ之を犧牲に供するの怖あらんや、されば光政が蕃山の意見を採らすして斷然墾田を行ひしはもとより至當の事のみ、

光政の民政は以上二項の記事を以て略ぼ之を盡したりと信す、而して玆に一の注

學術

意す可き事あり、卽ち光政の民政は專ら農政に偏し、全く商工業に及ばざりしこと是なり、假令多少の保護奬勵は之を行ひしにせよ、かの米澤藩の養蠶絹織に對する奬勵の如き、尾張藩の瀨戸陶業を保護せしが如き、偉大なる奏功は遂に之を見ざりき、然れとも此を以て光政を批難するは頗る酷評たるを免れず、何となれば光政の時代は戰國時代を去ること未た遠からず、商工業を輕視せしは各藩共に然り、獨り光政を咎むべきにあらず、各藩が盛に其殖產工業を保護するに至りしは、皆實に德川氏の中葉以降の事なりき、前記二藩の例亦然り、但美術的工藝は夙に各藩に保護せられしが、光政も亦伊部の陶業を奬勵し、閑谷燒の逸品を出せり、されば此點に於ては彼は決して人後に落つるものにあらざりき、之を要するに光政の民政は其時代にありては實に完全無缺の良政たりしなり、

（未　完）

旭川の流れに映ずる科學的感想

松　井　元　興

水の流れと云ふものが色々の便利、利益を吾々に與ふるの外地球表面の裝飾となり山と相俟つて美觀を添ふるものであると云ふ事は此處に物珍しく申す迄もな

い假に旭川の取り去れたる岡山を考へて見れば分る數万の市民は日々の飲料水を失ふの恐慌を來たし船歌面白く輕る〳〵と運び出されつゝある薪炭もソー易く我々の手にはいらなくなる學生諸君が汲々勉學の餘暇に喜びつゝある端艇上の浩然の氣も之を養ふに由なきに到るべくヨシ一方に渡錢五厘の出費をはぶき得るの得ありとするも到底其失ふ所と差引勘定の合つた話ではないのである扨て此利益、便利、美観と云ふものが河の持ち來す全てであるであらうか若し吾々がクヨクヨと眺め去る河邊柳に一歩を進めてイヤ只其滾々として絶ゑざるを感嘆する孔子に一歩を進めて少しく科學的観察を加へたならば單に水が移動流下して居ると云ふ事實以上に意外の掘出者、有益なる敎訓が其底深く潜んで居はすまいかと云ふ疑問が糸口となつて此一編の話は成り立つのである

遠く其源を深山幽谷に發し或は巖に滴り松が根をくゞり苔に辷べり小石に戯れ潺湲として流れ去り流れ來る處イジラシキ程の苦心があり〳〵と見らるゝのである而も此處の一滴彼處の一滴を集め集めて糸となり帶となり一個の細流を形る樣になると其透明なる心情を小石原に披瀝しつゝサモ愉快ソーに得意の小琴を奏きつゝ岸の菫や百合に別を告げ既に人里に出づる頃には一廉の流となつて里人の爲めに米搗く車を廻し果ては舟をやり筏を流し其勢の激する處堤を破り

石垣を壞し終に鷹揚なる体度を以て大海に注ぎ天心の明月を宿する万頃の波と變じ此處に始めて靜けき眠るが如き寂滅の平安を樂むに到る迄其經過の忙はしき殆と他に其類例がない程に思はるゝ彼は何をすき好んで長程万里此多忙なる旅をなすのであるだらうか私の合點する所に依れば彼は自然の方則に從ふべく此經過をなすのである宗教的口吻を假つて之を言へば夫れは神の命令に從ふ爲めなのである

凡そ自然的に行はるゝ變化と云ふものは其物理的であると化學的であるとに論なく皆一個不安定の平衡よりヨリ安定なる夫れに移り行かんとする道行きに過ない物質の腐敗燃燒、火藥や綿火藥等の破裂、或は時計の進行、物体の落下、皆此理に適合すべく成さるゝものである、安定不安定の意義は細かに之を言ふと稍々面倒であるが先づ物質或は物体系の含む遊離エネルギーの多少を云ふものであると承知して宜しい卽ち物質の甲狀態が乙狀態より安定てあると云ふのは乙は甲より多量の遊離エネルギーを含んで居るものであると云ふ樣に解釋して差問ないのである、今或る高さに在る物体を考ふるに其エネルギーは高さに比例するものであるから其居る處高ければ高き程其エネルギーは多量であつて之れが安定なる狀況に移るには漸次其高さを減ずるの必要があるのである水が海面に向つて

絶えず流れ行く所以のものは海面上よりの高さを小にし其有するエネルギーを少量にし斯くして不安定の位置より安定の位置に就んとするものであるに外ならない流水の岩を穿ち車を廻し舟をやり堤を破る等の仕事をなすのは其が時々刻々に失ひつゝあるエネルギーの外に表はるゝものであつて先に岸の菫や百合を傾聽せしめたる妙なる音樂は畢竟するに逃亡しつゝあるエネルギーの足音であつたと知らば諸君は稍々殺風景の感を起すてあらう

ソコで私は今少しく立入つて所謂社會が文明に趣くと云ふ事も矢張社會が一個の平衡よりヨリ平定なる平衡に推移する狀況を云ふものであつて而して社會の活動なるものは此推移に伴ふエネルギーの發現であると申したいのであるかの亂暴壓制なる酋長時代より稍々組織ある封建に移り次で立憲の政体に迄進んで來た其道筋を考へて見るのに人間の階級差別と云ふものが段々に撤去せられ嘗ては器械同様に取扱はれたる人民も高位高官にある人同様政に參る様になり恰も水が時々海面に對する高さを減ずる如く人と人との間に存在する階段は年々其高さを減するのてある

同一の經過は近來に到つて經濟界にも進行し初めんとする徵候が現はれ來つた則ち人と人との間に存在せる金錢上、財産上の高さと云ふものも時代を追ふて減

少し行く傾を取らんければならない

斯くの如くして社會万般の事が時と共にヨリ安定なる位置に移りエネルギーのヨリ少き形を取る樣になつてこそ社會は初めて意義ある、自然的の、神の意に適合する文明進步の道に就いたと云ふべきであつて何にも富士山と高を爭ふ如きカラーを付けたからといつて開化した譯ではあるまい

寸度此處で誤解を避くる爲めに說明して置くが所謂遊離エネルギーなるものは物質或は物体系の含む全エネルギーを云ふものでない其一部分であつて別に煩勞なく仕事に變じ得べき者なのである普通一氣壓の空氣の如き勿論エネルギーを含んで居るに違ひはないが別に米搗く事も車を廻す事も出來ない之れは其エネルギーが前云ふ遊離狀に於てないからで此種のエネルギーを假に潛性と名付けやう、ソーするとつまりコー云ふ事になる物体系又は物質の含むエネルギーは遊離、潛性兩種エネルギーの和であつて其中他の煩勞なく仕事に變じ得べきは遊離性の方である私が此處で陳ぶるエネルギーは此方を云ふものと御承知下さい」今社會の進步するに從つて失はるべきエネルギーも此遊離性のものであれば別に社會の全エネルギー量には關係ない。のみならず此全エネルギーと云ふものは遊離性の者の減ずるに拘らず增加する事も出來るのである

ソコで若し愈々文明と申す者が私の云ふ如き者であるとすると其終局や恰も眠れる如き不活潑の社會であつて甚だ有り難からぬものではないかとの疑を抱き恐怖を感ずる人があるかも知れない然り物の終局と云ふものは其何であるに論なく決して面白くもありがたくもあるものではない現に人間の終局即死亡はドーです其悲しむべく面白くないに拘らず吾々は一刻も之れに向つて接近の歩調をゆるむる事能はざる樣に社會も其終局を追はねばならない之れは自然の約束であつて愛憎の念の如何ともなし得べき事でない而し恐れを抱く人よ安心せよ社會が其最安定のユートピアに達するのは五時に岡山を發したる滊車が十時に神戸に着すると云ふ樣にしかく簡單なるものではない實はハイパボラとアッシンプトートとの關係の如く近づく事は無限に近づき得るも終に相遇ふ事を得ざるものではあるまいか、之れを物理的の現象に付て見るに安定に達せんとする一つの事實其物が原因となつて他の安定に達せんとする働きを妨害し或は既に安定の平衡に達せるものを攪亂して元の不安定なる位置に復せしめ之れをして再び安定の位置を求むべく初めと同一の經過を繰返すの止むを得ざるに至らしめ斯くして些の妨害もなき眞に安定なる日の來る事を非常に非常に遲くすると云ふ場合が多い例令太陽が其の安定なる狀を取らんとして頻りに光熱を輻射すれば

此光熱はヤツト安定の位置に達したる地球の海水を蒸散して再び水源の方に運び行くのであるかくて旭川の水は久へに其平安を樂む能はずして絶えず其忙はしき生涯を續けて居る私は此處迄書き來つて眞に敬畏の心を以て自然の配劑が其巧妙を極め居る事は感嘆せずには居られないドーです只之れあるが爲めに我々は絶えず旭川に於て其流水を望み其恩惠に浴する事が出來るではないか思ふに吾人が社會より受くべき恩惠も之れと同樣に其前途遼遠なる最安定の理想鄕に達せんともがく道筋に於て發動するエネルギーであつて若し一旦理想鄕其者に達したならば夫れこそ水の流れ去つた旭川同樣其乾燥寂寞不便不利到底肉体を提げて居る吾人々類の堪ゆべき所ではあるまい若し然りとせば理想鄕が遠い遠い未來に在つて中々達着し得られぬと云ふ事は寧ろ祝すべく喜ぶべきでこそあれ決して悲むべく亦咀ふべき事でないではないか

況んや一個の平衡狀態が或る外部の刺戟に遇ふて移動し第二の平衡狀態を取る場合には第一より第二に移る爲めに外部の刺戟を打消す如き作用を生じ狀態の變移を緩和ならしむる事は物理化學上の通則であるから社會の形る平衡が安定なれば安定なる程ヨリ安定なる平衡に遷らしむる事がむつかしくなる語を換へて之を言へば文明が進めば進む丈け更に之を進歩せしむるに多大の艱難を加へ

來るのは之れ亦自然の命令であるから其進歩の遲々として理想郷實現の期の甚だ遠きも別に奇とするに足らず亦憤慨するに當らない

要するに私は旭川の流に於て自身の流るべき方向と速度とを學び得たと思ふ

學　術



詞藻

苦悶の友

こはやしちかを、

一

この世に苦熱の鞭をあてし魔王が力も夕暮るゝ程いつしかに折れて、軒には忍草つゆを含みて蘇へり風鈴の音すゞやかになりき。懈怠に追はれたるわれは棕櫚うめく窓によりて、水のあと猶うせやらぬ庭の面を、無心無念にただ茫然と眺め入りぬ。忽ち古槐の門の戸開く音して人の來るよとおぼえたり。今頃音つるゝはたれぞ。隣家の少女歌よみにか、さては横町の詩人なるべし。

突如けたたましくわが室に入り來りしは、思ひきや一年音信さかざりしわが友ならむとは。沈めるやうなりし夏の夕は倨傲にさける朝の花のごとく、あやなす色彩を加へ來りぬ。二人相會うて微笑むことしばしかたみに詞もあらざりけり。

友はその身一年の變化をときつ。わが緑陰に座して詩を誦するほどは、友は日夕市塵の高きをあびて席片時もあたゝまらず、追懷のいとまなく空想のあいだなく、富士の川舟たゞ棹をやるにすぎずときくに、俤いとどやせてみえぬ。なほ友の顏みまもれば、言ひ難き不安のきざしその眉のあたりに漂ふさま、牢獄の苛責にたへで今しも鉄鎖を切らむ刹那の囚人のやう、心のもだえ詞のとぎれと

ぎれにほのみえそめぬ。遣悶なきおもひは簇々としてしどろもどろに友が胸かき亂しけむ友は言ひ出でたりや。我には世にも苦しき人鬼のせまるにあひて、止むなき願を君に賴むべう、けふ君を訪へるなり、竹馬の交遊久しくとぎれて再會のこの夕に、かゝる淺ましき事實を君に告ぐるわが切なさはづかしさよ。まこと我は借錢の返濟を逼られて、わが方寸策已に出づべきなく、大蛇うしろに迫りて一歩前は深淵に臨めるわが身を、救ひ給ふはただ君………。言ひて友深き溜息にくれぬ。

彼はもと暖かき褥に抱かれたる天の寵兒なりしを、父が商業の失敗は、はしなく幼弱の彼をかりて、富貴より奪ひ敎育より奪ひはてはやがてその日のかてより奪へるなりき。彼は多くの姉妹を有して、あるものは病院にあるものは官廳に、わづかに筆たしかに持たむ頃より既に各々みづからを養ふの境遇にあるなり。父は老いぬ。今は人世に希望なくかよはきわが兒の力によりて、からくも日夜酒をあふるのみ。母も老いぬ。されども休息はこゝに惠まれずして、深夜おぼつかなくも人の衣袂を縫ひて若干の米鹽をうるのみ。あゝ老いたる母、よはき老眼を眼鏡にたよりて細き針をはこぶごとに、人の美袖を手にしていかばかりわが子にもがなと身の薄命を思ひわびけむ。幼兒すでに運命の絆を解して慈母に麗衣を求むることなくも、冷風むせびて夢を覺す夜半、天を仰ぎてひやゝかなる襤褸の袖を涕泣にあかしたりしいくそたびかや。

嵐すさぶ友が身はしかく慘憺の境地にあり。されどもわれはこれまで幾度か人を救ひて幾度かその恩惠の矢の還らざるをみたり。なほ露骨にいはば少なからぬ黃金はわれをかりて、わが父母の懷よ

り友の懐にうつり、更に何處ともなく消えしをみたり。われはいま頸垂れたる無言の友をいかにせばやと惑へり。

風やいでたる、風鈴たえまなく鳴りてわれを向ひ促すに似たり。世は暗黒の幕にかくれぬ。

戀は盲目なりとかや。まどへるわが兒を溟海の怒濤に放ちてかへりみざる父は盲目ならずや。躓けるものを倒し罪なきものを縛しめて平和！とゝなふる社會は盲目なるかな。かのうるはしき照る星の光をのぞかばあはれいづこに淸き光明の眸ありや。暗なり暗なり暗の世やとうたゝ今思ひわびぬ。われは刃を擬する世の迫害と無情とにからくもいま逃れたる身は幸なりとしりつ。されば暗を照すべき探燈は碧潭にまろび落つる友をさゝへて、そこばくの安慰を與ふべく、そは神の託宣にてありき。われは決してこれを行ひぬ。

二

數分時ののちは友は昔の微笑をうかべて殘りなく語りいづ。わかき無邪氣なる面影はやゝうせたりとも、友がすずやかなる眉、笛のごとき聲音は、あさ霞をかしき言の葉の後にほの白うあらはれて、それよ春か、夏ながら熱を忘れてただ興ず。雲間を出でし望の夜の月その月は同じこの世わぶる星の子と語りて天外聲をきくにさながらなり。窻の外は黒きとばりと思ひしにこゝもまことの月夜となりぬ。あゝ白晝をあざむくこの夜の月よ。かくばかりまどかに御身が姿を仰ぎしことはあらざるなり、天の少女よ、かばかり麗美の形容をなべての人間に示現はしたまはずや。この夜この月光を

仰ぎて、御身に泣く子のいかばかり多きことよ。あはれ隈なき月だに平等の光を與へざりけるか。」

一瓶の葡萄酒はそこばくの血を盃ふくむ兩人が頰に浮べて昔思ひ出の物語り。

三年前の春、君が敎鞭を房州の海邊にとりしころなり。共にかの九十九里が濱べをゆきかひ、曉小濱の嶮崖に立ちて浮立つ雲の無窮を追ひ折れかへる浪の怒號をきゝ、鷗の白帆見えがくれする太平洋の渺茫をうかがひし時はいかに人世を忘れたりしよ。あくる夜、夷隅川に舟をやりし月下の遊に歌かきし君が敎へ子、かの天才の少女いまも健在なりや否。その時道學先生のまへに今の學校敎育が天才の殺戮を敢てするを痛論せしも面白かりしよ。然るに塵の世の夢路は一轉舞臺をめぐらして、君は忽然去つて行くところを知らざりしを、今宵相會うて共に語らむとは、君よ盃をうけたまへ。

友は醉ひたるおもわを月に照して語りいでぬ。

さなり、かの夜の感興は思ふもつきじ、その後幾度かかの少女を都に出して藝術の海に眞珠をさぐらしめむとは思ひしかど、世の洪湧のたかきをみてはそぞろ舟出の危くも感じて、淋しき村里は或は幸福のすみかならずやと今にうち過ぎぬ。こはわが行路の難さよりあやまれる偏見なるべくや。さても相遇ふのたのしさは別るゝの悲しさには如かざるものか。かの時君が出でてゆく姿ばかり身に沁みて覺えたるはあらじ。西の國の詩人が悲しさの極みと云はむ悲しさは樂しき昔忍ぶことなりと歌ひしは實にもと思はれぬ。

話頭は轉々をやみなくうつりぬ。友の今はと辭し去りしは世の安らけき睡眠漸く深く、夏の夜の月

漸く高く、はや唧々秋をよぶ虫の音妙へなる歌を唱和するころなりけり。

三

友は梧葉ちりそむる秋の初めにわが山房を尋ぬべく約したるに、はやも小さき栗の實戸を叩きて秋來ぬと告ぐればわれは友をまつにえたへでありき。程なく暴風雨は來りて去れり。愛玩の柊根より倒れて落ちたる柿の實地に狼籍、かくて空しく秋は暮れぬ。雁はゆふべ／＼に空を行きて友はその音信もあらざりけり。蟋蟀の忍び音竈に細りて落寞の冬は訪れ來りしが、友は一葉の文をも送らず、われより促すこと三たびなほも返詞は手に落ちさりき。かくて年はこゝに新たに、やがても三春の行樂現なくすぎて又炎熱威を振ひぬ。

われは今漸く友を疑ひそめぬ。わが友に送りし紙片の一束はさまでのものにあらず。されど我が心を以て友が苦悶にさゝげしを、返すべき涙一滴友にあらずとは心なの友かな。約をはたさむ餘財はなくも一片の玉章認めえざる道理はなし。彼もまた俗流なりけるかと疑心はやがて暗鬼をうみ、友が性行も折ふしに怪しまれて、墮落の淵は惆悵の形骸を導かずやとも、想像の翼はすざまじく張り來れり。夏の初めわれ遠き國より歸りて再び都門に入りぬ。今は忍ぶべくもあらず卽夜友が門に立てり。友はあらずして老いたる母灯を手にして出で來りぬ。去年よりはいたく年老いて見ゆるに、わが兒は圖書館にとて出で行けり又來ませとのみありて、わが友を思ふをしるや知らずや、一言も疎遠わぶるにしもあらず。我はあまりのことに淺ましく興さめて、且ついぶかりかつあやしみ、暗

路さびしく我家にたどりぬ。

こえて一日一葉の書信わが机上にあり。みれば正しくその友のなるに、あわただしく開く。

謹啓。一昨夜はいかなる夜にて候ふべき。とく私より參堂致すべきを怠りて、わざ〳〵玉駕をまげられ候ことありがたく謝する辭に窮し候ことに候、今更いはむも愚かながら、この過去一年のわが行跡を思ひいでゝは眞に君に會はすべきおもてなく、我力足らず我慮淺きばかりに二つなき親しき君が心緒を亂し、ひきては君が御尊父に對しての御迷惑自ら縊らむも及ばず、生涯の遺恨これにすぐるもの無之候、もと愚父が失敗の創痍は、ひきて一切の責を甘じて私に引受け候こと故、母にも年餘全く事の次第を物語らず一昨夕御光來の折にも、母は定めし失禮にうち過ぎ候ことゝ私より幾重にも御わび申上候、二夜いためるわが胸はさま〳〵取り止めなき現つの夢におそはれ一瞬の睡眠をもえられず、昨日は暮るゝまで幾度か直ちに君を御尋ね申さむと存候が、わが身はいかに膽太くも君が門を潜るの勇氣これなく、幾度か顧み幾度も佇立していかにせばやと存候ばかり、實にたゞ寛大なる君が御諒察を伏して仰ぐばかりに候。今更に一つの御願には明朝忍が岡の○○に御出で下されたきことにて、いかにしても君が家に行かれず候故、その折過去の罪過を殘りなく御話し致し度目下の私の處存もその折に申上たく、我心亂れ我筆とがめてこゝに明らかに陳ふるをえず、一向御憐察を仰ぐのみ。

われはよみ終りて思はず泣けり。友が境遇の悲慘は更に幾倍を加へけむ、それをも母に告げす身一

つに治めむ殊勝の心、あはれ彼の胸の貴きことよとわが心友がこゝろとなりぬ。顧みて友を疑ひしを慚つること切なりき。

四

綠滴る忍が岡の夏は都人の顧みるところにあらざりき、彼らは醉歩蹣跚艶美の花にゆけども、この青葉の寡婦を勞らむともせず、花の折はよかりしこともたゞ過ぎ行くめり。されども人なき淋しさは我らにこよなき慰安をたれ、坐して黒門の硝煙昔を忍ばしむる一旗亭に絶えて久しき友と相遇ふ。

友は巧言令色の輩(ともがら)にあらざりき、我に義務を欠きて始めて膝を交ふる朝(あした)、かの口は多く言ひえざりき。無窮の詞を千々に碎きて會はゞ斯くと胸に秘めし思は、今とぎれ〳〵に口ごもりぬ、日頃口角泡を飛ばして議論を戰はす夕にくらべて、この曉の色褪(あ)せたる私語(さゝやき)、よはきわれには聞くに堪ふべくもあらざりけり。われは友の述へたる詞をつぶさに描寫すべき筆を有せず。かつは友の眼に涙ありて、友の聲をのゝけるを見、われは友に多くを言はしめざりしなり。まことわが心これをきくべき厚き皮を有せざりければ。

友をかりてこの冥き懊惱にゆかしめしは誰ぞや、われはこの時明らかに社會の一面をみぬ。そこには百鬼跳梁し生靈告ぐるなきところ、永劫の暗深く閉ぢて號泣叫喚の聲をきく、吐息の風哀泣の波と共に和してものすさまじき世を現じぬ。われは行て救はざるべからじ。

友よ安せよ。神は御身を棄つべしとも。われはわが呼吸（いき）の終るまで友たらむ。われは幸にも權謀の友たらむにその才を欠けり。われは幸にも虚僞の友たらむにその勇を持たず。同情はわが心なり。愛はわが命なり。われは平和の宮殿をたてゝなやめるものを入れむ。われは美の神坐を作りて憂ふるものを導かむ。

友よ安せよ、運命は日に夜にその車をすゝめて、御身を西伯利亞におきわれを伊太利に追はむとも、はた又御身を空の上におきわれを地の下に眠らさむとも、永遠の纜（ともつな）かたみに結んで解くることあるべしやは。ゴルディウムの結びときえて王とならむとも、われまた歴山の愚を學ばむや。

藻　　詞

貴きは聯結なるよ。天と地とは大氣によりて結ばれぬ。人と人とは愛によりて合着しつ。天と地と相戰はゞ平和はやぶれて世は混沌にかへるべし。人と人と相ひしがば世は破滅に終らむのみ。この世の平和（やはらぎ）をかき亂さむものは誰ぞや、この世を平和に導かむものあはれそも誰れぞ。夏の朝（あした）の忍か岡はいかばかり情感をみたせし、かの青葉のやぞよ、下に不忍の水はあれども、いつかおもひでの去りゆかむや。……………………《をはり》

ふみの終りに。

わが第二の故里となりし備前の天地よ。今やなつかしき御身にわかれむとす。われ御身が柔かき懷に抱かれてより三春秋、すぎては一夜の夢とも覺ゆ。こは一篇の舊稿まことの物語なり。もとより旭河の流に投じて兒島の海にながしやるべきたぐひ乍ら、ことさらこゝに補正してうかべたるは、はづかしくもわが片影をこのうるはしき天地にさゝげて、三とせの母におくり永き追想のいとにたどらむばかりぞ。

小畫譜

珊々子

エンゼル

木犀の香えならず室に滿ちて、折々梢を拂ふ風にあへなく散る木の葉の雨戸をうつこと切なり、餘程御注意に………と、あとを濁して歸る醫師を送りて、燈火暗き良人の枕元に座はれば、ふくよかなりし頬も今は落窪み、紅なりし其色も褪せて、良人の變り果てたる姿を見るにつけても、今更ながら妻はたゞ涙のみ、

寢入りたる我子をゆり起して、せめて息ある間に一目なりともと、袂を嚙みしめて押しやれば、病人もそれと思ひてや、おゝ坊か、と悲しき聲にて呼びよせ、父樣はもう今日からそれ、その額にをる樣な人になつて、遠い〳〵處へ行く程に、御母樣に御世話をおかけ申すな、と父なる人は苦しげに楣間の額を指しぬ、遠き友より送り來たりし、伊太利のなにがし畫伯のものせる花野に游ぶ天使の畫は、さながら生けるが如く楣間にかゝれるなりき、それなら坊も一所に、あの小ちやい佛樣(ののさま)のゐる所へ連れて行つて下され、父樣、そこは面白い所か、

これを聞きて母はむせかへる許り、父なる人と眼を見合せ次の間に辷り入り、しばしは闇に涙をのみぬ。

或人より或人の許へ

……………《前畧》、早や小生も二人の子供の親父(おやぢ)と相成申候、親父と申せば昔より、ぢゞむさく、非ハイカラ的のものと相場のきまりし如く、小生も年々とぢゞむさく相成り、よく昔小生の口に致しし男子立志の詩も、此頃では一向に有難からず、と申せば、御口惡の貴君は、何の樂で、この世へ生て出たか、との橫槍は充分承知の上にて候、《河豚喰はぬ人に語るな河豚の味》とか古人はうまいことを申し居候、所謂ホームの樂なるものは、兄等門外漢の窺ひ知るべからざる趣味を有するものにて、殊に小兒のある場合に於て、いよ／＼深きを增し申候、小兒は天國なり、とか、むつかしき事を御引合に出さなくとも、まのあたり、一日の俗務に腦は亂れ、身は萎へたる小生に一服の淸涼劑ともなるべきものは、我子の無邪氣なる笑顏にて御座候、その間は苦惱もなく、功名心もなく、殆んど神の如き心持にて候、女房に惚れられて家內安全とは下世話によく申すことながら、子供生れて國家安全とはあながち誤りたる事にても候ふまじと存居候、

序に我子供の評判記を申し上げ以て、いつぞやの《瓜の蔓には茄子がならぬ》と云ふ貴論に少しばかり御酬致したく候、普通の子自慢と同一視せられまじく希望仕候、

姉は本年十歲、いつぞやの誕生日の祝に、加藤の叔父さんより、《鳶が鷹を生んだ》との、批評を得たるものにて候、小生が鳶に譬へられしか或は愚妻か、その所は曖昧に候へ共、兎に角こは本論外にて、この子の神聖？を汚さゞるものと存居候、眼は涼しく、鼻は羅馬の女神の如しと一々人相書

は致さず、たゞ子供嫌ひの隣の老人も、この子には目もなしとやら、とのごとを申し述べおくべく候、兒童心理の所謂、多血質の性にて、古來より日本婦女子に特有なる神經質の方では無さそうにて候、只今、近くの小學校の四年生、日々海老茶袴をつけ、紫包を手にして登校致し居候、親父の口より賞むるも少しは異なものに候へ共、學校の成績もあまり惡き方にてはなく、この三月の卒業式にも答辭とやらを讀みて親父をにこつかせ候、兎に角雞群の一鶴とは申し兼ね候へ共白鷺位は大丈夫かと心得居候、

次は男子、本年四月に第四の誕生の祝を仕候、中々の器量よしにて、親の慾目からは、《小公子》のセドリック位には見へ申し候、姉の性と比較する爲め申せば、やゝ澹汁性の方かと愚考致し居候、少々試し見るに、記憶も中々惡き方にてはなく、將來を樂み居候、且つ中々氣の利く方にて咳をすれば唉壷を持來る智惠はなきも、横になれば枕をさげて來る位は有之候、左樣なることどもは小生等の生ひ立ちにはなかりしと記憶致し居候、

されば、このお孃樣、坊ちやまを保育する御二方の苦心も一方ならず、子供等の浴衣縫給ふ、母君の針箱の邊り、父なる人の折鞄には絶えず新刊の家庭雜誌の一二册は見出され候、

宴會の戻り、わざと子供の好きそうなる、金とん、玉子燒を折詰にさせ、あるは獨逸とんびの袖の下に、わざ〳〵迂り道して、風月堂のワッフルの紙袋を下げる故を以て、あながち甘き親と御あなどり下さるまじく候、《子故に迷ふ親心》とは昔よりの眞理、義太夫にて先刻御承知のことかと存

じ候、
常に清き泉の湧き出で、綠草滴らんが如き沙漠中のオアーシス、とか、淋しく冷かなるホームを、暖かくなす神聖なるミッションを擔ひたる天使とかは西洋の詩人が小兒を歌ひたるものにて、これらはまさに小兒等の頭を飾る花冠かと存候（後畧）

詞藻

雛の記

古き新らしきを取り交せて、日當りよき四疊半には、所せきまでに雛のかず／＼を取ならべぬ、

青葉茂れる櫻井の　里のあたりの夕まぐれ
木下蔭に駒とめて　世の行末をつく／＼と

筒袖の少年、稚兒髷の少女は、かたみに手を取りかはし、花園より歌ひ連れて、來れるなり、《あらお母樣》、母の影を見たる、少女は、こつぽりの鈴の音輕く走りよりて、母なる人の袂を引きぬ、
《……何處へいらつしやるの》母は我子の髮の亂れを直しやり乍ら、《一寸御買物に行くんですから、溫和しく待つておいで、ね》《だつて……連れて行つて頂戴よう》少女は早や鼻を鳴らせり、母は前髮の亂れたるを梳りつゝ、《直ぐ歸りますからね、繁樣と一緒に遊んでおいで、御土産を買つてきて上げるから》
言はれて、少女は振りむけば筒袖の子は、淋しげに白桃の花を弄り居れり、

《ぢや、待てゝよ、……その代り御土産に鬼灯と、肉桂と、それから金花糖とそれから………》《まあ澤山だことね》母なる人は、可き加減にして、少女の《屹度よ》と云ふ言葉を背にうけて母屋へ急ぎぬ、

あとには、小さき雛の主客は互に、先生の優しきこと、唱歌は好きだが算術は嫌ひなこと、隣の猫が家の屋根裏で、可愛らしい四匹の子を生んだこと、など談は愈佳境に入りて、今しも少女はその姉なる人の嫁入の有様を手振をかしく說き聞かせるなりき、

《ね、姉さんは常だつて美しいでしよう、それに其日は白粉も口紅もどつさりつけたもんだから、ほんとに奇麗だつたわ、この人が私の姉さんかしらと思つた位なの、…………、家には大勢よその人が來て、庫から御道具を運んだり、御座敷を掃除したりして大變なの、…………、私も何か手傳はせて頂戴と云つたら、御母樣は邪魔になるから離屋へ行つておいでつて言ふの…………、皆構つてくれないんだから私、離屋へ行くと、姉さんが一人ぽつちなの、私が行くと、姉さんは私を膝の上にのせてね、明日から他家の人となつてしまうんだから、文ちやんは淋しいだろうと言ふの、…………だつて、矢張私の姉さんだわ、と言ふと姉さんは可愛と云ふ程私を抱き〆てね、文ちやんの唱歌を、最う一邊聞かして頂戴つて言ふから、私、あのほら今先きの《青葉茂れる》ね、あれを唱つたのすると姉さんは泣くんだもの、私も何だか悲しい樣になつて中途で泣いたの…………》

首をかしげ涼しき眼もて竊かに聞手はと見れば耳を傾けてほゝ笑み乍ら聞けるに、少女は尙も言葉

を續けぬ、

《…………嬉しかつたのは其晩よ、奥の御座敷でね、ほらあなたのお父樣も來ていらつしてよ、ずつと大勢並んでね、御盃をするの、何だか私極りか惡かつたわ、私も御盃を戴くんだつて、嫌ひだけどグット飮んで了まつたわ、だつて苦いんだもの、白酒だと私好なんだが……》少女は其夜の有樣を思ひ浮べて、やをら小さき銚子より白酒を小さき盃に盛りて、美しき眉を顰めて飮みほせり、

《……ほんとに面白くてよ、私お嫁入大好き》、

《……おや文ちやんは誰の御嫁樣になるの》、二人は互に顔を見合せて微笑を洩らせり、

《あら……あたし御雛樣の御嫁になつてよ、だつてあたし、御節句が好きなんだもの》、少女は口疾に言ひながら椽に辷り出でぬ、はやたそがるゝ四疊半はやゝ小暗くなりて、折からの風に桃の花、ひー、ふー、內裏雛の冠の上に散りかゝりぬ、

《あら繁樣來て御覽、石燈籠の上に、お星樣が出てよ》

白　薔　薇

浪の音を聞き、松ふく風に耳を傾けて寢つかんものと枕を易へ、右に、左に、あせりたれども下座敷の宵よりの騷ぎにいつかな眠らるべうもあらず、下座敷には髭生し給ふ紳士とやらんが燈つくる頃よりの馬鹿騷、さては賤妓などの立交らひて卑猥聞くに絶えざる俗歌、ようよう、と嘶し立つる聲、踊りまわる音、走り叫ぶ響、しばしの止む暇もなし、

夜具打被りて、渠等の趣味の低きを慨き、公徳の欠けたるを歎じ、考はそれよりそれと移る間に遂うと〳〵となりぬ、

ふと眼を覺ませば屋内薄暗くて、早や夜明に近きけはひなり、下座敷の騒ぎは止みたれど尚ぱちり〳〵と花札切る音、さゝやく聲に忌々しくなりて海邊を逍遙せばやと一人旅館を立ち出でぬ、

海水浴と、淺黄地に白く染めたる旗は朝風にはた〳〵と竿にからみ、葭掛の小屋は人氣なく停車場の赤き光は小さく〳〵見えぬ、

朝の海は平和なり、寄せては返へす雄浪雌浪の白砂に囁きて朝の祝福を唱ふが如く、遙かに淡路島はただ一はけの墨繪の如く、松原續きの砂道はやゝ露を含みて下駄の齒を嚙みぬ、

不圖行手を見れば、根株をゝしき松に凭りて、年の頃七つ八つ許りなる西洋の少女の白フランネルの洋服の膝ぎりなるを纏ひて桃色の靴下うつりよく、小さき編上げの靴叉の字になし、手には草花を縫ひせる眞紅の手巾を弄びながら尙明けやらぬ空を見詰むるなりき、

細く柔かき金色の髮を、白のリボンにて結へたるを肩のほとりに漂はせて鬢のほとり少しく縮れたるが朝風に一ずじ二筋白き頰に亂れかゝりて、長き睫毛の下の茶勝の眼は鴿の如く可愛げなり、無心にして愛情濃やかなるそのまなざし、楚々たるその擧止、後影には松あり砂あり、あゝ一幅の好畫圖なる哉、ゲーテのウェルテルは、青葉若葉生茂れるワルハイムの一古寺の傍にて、無心なる子守の小女を畫き、少しも、自家の意匠を用ひずして完全なる好畫圖を作り出しぬ、と、それに劣

らぬこの好畵圖を得て、そを寫し取るべき畵才もなきわれは、せめては言葉にても、交はさんと思ひて、やをら少女の方へ近きぬ、

《お早う》少しく肩に手を載せて、怪しき英語もて問初めぬ、

無心の少女はやゝ驚ける樣にて振りむき、首をかしげ、チットお眼にて見、直ぐ可愛らしく笑ひかけて、《お早う》と巧みに日本語をもて答へぬ、吾は何事をか續けて言はんとせし時、少女は不圖何者をか見認めし如く、

《オヽ、お母様(ママ)!》と叫びながら脫兎の如く彼方に走せさりぬ、

しばし呆然と吾が眼は少女の行方を求むる時、松の木影越に、若かき柔和なる西洋婦人のその夫なるべし、品よき紳士と手を連らねて來るを見認めぬ、少女は母の腕にすがり、父の手にまつはりて何事をか頻りに口を動かせり、

夫なる人は、襟にはさみたる白薔薇の美しきを、娘の頭に戴かせて、夫人と顏見合はせほゝゑみ乍ら、やがて三人は樂しげに打興じつゝ砂路をあなたに急ぎ行きぬ、

あゝ昨宵不遠慮なる日本紳士の爲め眠りをなさざりし吾は、この樂しき有樣に初めて心地すがすがしくなりぬ、幼子の戯れの聲せぬ、ホームの空氣は殊に冷かなりなど云ふ事なども思ひ出でゝ吾は樂しき朝よと獨感謝しつゝ砂路に印せる小さき靴の跡を慕ひて歸りぬ、

靈魂不滅の歌

妹尾清月譯

こは自然崇拜の高僧、英國の詩伯ウイリヤム、ウォーヅオースが、幼時を回想して性命の不朽を知りし、神秘幽玄なる哲學的の歌なり、譯者が妄りに、巴調の筆を弄し、あたら、原文の風韻を傷けたる罪は、深く謝するところなり。

空をながめて虹霓見れば、
　われの心は飛び行かむ、
　　稚けき時はかくありき、
　　　老ひてもかくぞあらまほし、
　　　　さらずば生きて何かせむ。

實にや幼兒は成人の父、
　造化の妙を敬愛ふる、
　　赤き天眞のこゝろもて、
　　　世にある日をば結びてん。

× × × × × × × ×

藻　詞

幼時嘗て、牧場も森林も溪流も、この地上の万象盡く天光に粧はれたる如く見えて、自然の新鮮なる光榮を現さゞるは無かりき。今や然らず。晝に夜に、往くところとして、吾が曩に見たるもの今復た見る能はず。

虹は出でゝ又た去る、薔薇は愛らしゝ。月は天晴るゝとき欣然として四方を眺む。星辰燦爛として河海に映ずる夜、何ぞ美にして麗はしき。太陽の輝やき出づるはこれ光榮なる誕生なり。然かも到る處、吾れは世界に榮光の消え失せたるを見る。

今や鳥は嬉々として歌ひ、羊仔は宛ながら皷聲につれて踊るが如く飛ぶ、而かも吾れ獨り悲しき念ひす。されどこの念時に迫んで之れを發洩せば胸中豁如として開け、かくて吾が心また強し。瀑は懸崖より落ちて其聲鞺鞳たり、吾れまた吾が哀みをもてこの光景を傷はんや。われは山中に群がる返響を聞く、風は睡れる野より來りて吾れを吹く、而して天地は爽然として快活なり。陸も海も笑ひさゞめき、万物みな春心もて休日を樂しむ。爾喜びの兒よ、吾が周圍に叫べ、あはれ爾悅ばしき牧童の兒よ、願はくは吾れなが叫びを聞かなん。

爾等幸ひなる萬物よ、われは爾等が互ひに相呼び應ふる聞けり、われは天空も亦た爾等とゝもに笑ひさゞめくを見る、わが情は爾等の祝節に在り、わが頭は其冕を着く、吾れはよく爾等が滿福を感ず――われは充分に之れを感ず。あゝ地はこの快よき五月の朝を飾りつゝあり、小兒は四方の野原に新しき花を摘みつゝあるに、日は溫かく照りて、嬰兒は母の腕に雀躍するに、若し吾れにして

獨り澁面めば、不吉なるかな。聞きぬ、聞きぬ、吾れは喜んで聞きぬ。さはれ、こゝに多きが中に一樹あり、吾が目につきたる一の野あり、共に過ぎにしことを語るなり、吾が足下なる菫も同じく之れを語るなり。幻の如き天光は何づくに去りしぞ、夢の光榮は今は何づくにか在る。

吾人の生まるゝは睡眠のみ、忘却のみ。吾人と共に昇る靈魂――吾人が生命の星は他所に沒して、玆に遠く天より來るなり。未だ天光を忘れ了らず、未だ靈火を失ひ了らず、光榮の雲を追跡つゝ、吾等は神より來るなり、――神は吾等が家なれば。吾等の幼稚なるとき、天は吾等が周圍に在り。長じて童兒と成るや、獄屋の蔭は之れを蔽ひはじむ、しかも童兒は光と光の出づる處とを見る、之れを見て喜びとはすなり。靑年は日に東方より進み行くも、尙ほ惟れ自然の僧にして、行く〳〵赫赫たる幻象のこれに伴ふあり。而して終に大人に至れば、この幻象消えて復た痕なし、たゞそれ平日の光となるを觀るのみ。

世界は其の膝に彼れ自身の快樂を滿たし抱へり。彼れにはまた自から其類の願慾渴望あり。剩さへ慈母の如き心もて、賤しからぬ志もて、この素樸なる乳母は有らん限り力を盡して、彼女の養兒――彼女の內に住める人をして、其の知りそめたる光榮、其の出で來りたる金殿を忘れしめんとはするなり。

新生の祥福に包まるゝ小兒――六歲ばかりなる小さき愛兒を視よ。見よ、阿母の來つて接吻するを厭ひ、父が慈愛の眼光に照されながら、己が手づからする遊戲に餘念なきを。見よ、身の傍らに

少き玩具をもて戯むるゝを、己がおぼへたる技(わざ)にて、人生之夢の一端を眞似遊べるを。婚姻や、葬儀や、祝や、吊や、これに心を取られ、これに歌を和して遊び樂しむ、かくて後來浮世の事務、戀、爭にその口舌を使ふことを習ふなり。されど、この遊びもまだ久しからずして斥けられ、更らに新たなる喜と誇とをもて、この小俳優はまた他の役割を學ぶ、かくて人生の少より老に至るまで、あらゆる役を常に舞臺にあらはすなり。宛ながら、彼れの事業總べて涯りなき摸擬の如し。

爾、見かけによらず無限の靈性を有するものよ。爾、尙ほ其遺產を保持する最上の哲學者よ、爾、群盲中の具眼者よ、爾は聞かず語らずして、永遠の心意が絕えず往來する永遠の深みを讀み解するなり。偉大なる豫言者よ、幸福なる識者よ、墓の如き暗さの中に沒して、吾人が畢生これを發見するに苦心しつゝある眞理は、實に爾に存するなり。爾が無窮の靈性は、日光の如く爾を覆ふなり、これ主人が奴隸を支配するが如し、其の靈性の現存は、遏めんとするも遏むべからざる現存なり。爾、猶ほ天賦の不羈自由の力によりて、爾の存在の存在の頂上に赫々として輝やける小兒よ、爾は何の故に、しかく自ら努めて、歲月をして已むなき桎梏を齎らしめ、以て妄りに爾の天福を殺がんとする乎。やがて、爾の靈魂は、浮世の積荷を受けて、習俗恰かも霜の如く重く、生命の如く深く、爾を壓し來るべし。

嗚呼喜ばしきかな、吾人の餘燼中に猶ほ活くるものあるとは、吾人の性は、猶ほしかく飄々飛び去り易きものを記憶するなり。過去を追懷して吾れは長なへに恩惠を感ずるや、彼の最も祝福なる

悦ぶべきもの、卽ち遊戯に忙はしき時と息める時とを問はず、幼稚の時の單純なる信條たる歡樂と自由と、兼ねて常に其胸中に湧き出づる、新しき希望とのために非らざるなり。吾は獨り此等のために感謝、讃美の歌を唱ふるものにあらず、實に彼の五官及び外物を執念く疑ふ念に對して、有形の物躰も實躰なるを覺えて、一切の萬物空なるを感ずる夢幻の想に對して、實在ならざる宇宙に飄泊する被造物に疑惑を懷く心に對して、吾人々間をして罪あるものゝ如くに愕きて戰慄せしむる高尙なる本性に對して、感謝するなり。吾人は此等幼年の感情、此等の朧ろげなる回想をば感喜して止まざるなり、蓋し、此等の感情、此等の回想は、それをして如何なるものたらしむるも、猶ほ是れ人生の光源なり、猶ほこれ吾人が精神の大光なり。吾人を支へよ、擁護せよ、且や騷忙たる歲月は、靜かなる永遠の存在中に於て、唯だ瞬間のみなることを見る力を有せよ、醒むる眞理は決して死せず、猶ほ且如何に之れを無頓着に放擲し去るも、如何に死力を盡すとも、小兒も、大人も、有らゆる憂愁悲哀も、全く之れを廢し、之れを滅する能はざるを視よ。かくて、天氣晴朗の節には、吾人假令ひ遙か內地に居るも、吾人の靈魂は、よく吾人を斯世に齎らしたる彼の不朽の海を見るを得るなり、秒時にして彼處に到るを得るなり、而して小兒等のその海岸に遊ぶを見、偉大なる潮流の永久に鞺鞳たるを聞くべきなり。

さらば歌へ、爾等鳥よ、歌へ、歌へ、喜ばしき歌をうたへ、羊仔も鼓聲につれて踊るがごと飛びね。爾等囀づる者よ、戯むるゝものよ、今日滿心に陽春の樂みを感ずる者よ、吾人は心の中にて爾等の群

に交るべし。嘗つて爾かく明らかなりし光輝は、今長なへに我眼界より隱くれたりとも何かあらん、――草に天光を見、花に光榮を見る時去つて復た回らずとも何かあらん、吾人は之れを悲しまざるべし、吾人は寧ろ後に遺るところのものに於て――幼少の時に之れ有りて、又た永久にこれあるべき人間同情の念に於て、人類の苦痛を觀て自ら慰むる思想に於て、死後をも通觀する信仰に於て、哲理の意想を齎らす歲月に於て、賴もしく感ずるなり。

嗚呼爾等、溪泉よ、牧場よ、小丘よ、森林よ、吾れと爾等との愛は決して離るまじきぞ。吾れは猶ほ衷心爾等の支配を蒙むるぞかし。吾れは唯だ尙ほ幾層爾等に親炙せんとて、一の歡びを棄てたるのみ。吾れは渠を沿うて流るゝ小川を、吾が幼時そが邊を快歩したる時よりも深く愛するなり。新生の日の無邪氣なる光明は吾れに於て今尙ほ愛らしゝ。夕陽を圍む雲は、浮世に老ひ來りたる人の眼よりして淡醒なる色を點じ來るなり。此に復た征路ありて、此に他の勝利ぞ得られける。吾人が生命の本たる人情に感謝す、其の愛の情、喜びの情、畏れの情こそ有難けれ。名の知れぬ野末の花もうち見れば、淚あまりて思ひ切なり。

（をはり）

藻詞

蛇籠日記

浦瀨白雨

朝靄に罩められたる萬歲山の老松打ち仰げは、晨星は靑澄める大空にきらめきて、松の葉にかゝれる弦月夢より淡く、同行三人さなきだに脚絆の紐のみ心にかゝりて、打ちかへし〳〵、握飯一つ

持たぬ氣樂さは、洋服のポケットに剝落せる手帳と、汗じみたる半ケチ一つ、草臥れて宿かる軒や藤の花、まだ彌生も霞うすければ、山櫻の下に外套一枚の修業も覺束なけれど、高梁の津まで安かれと願ひて立つ。

兩側の家々扃鐍とざしてまだ曉の夢こまやかなるらしきに、さりとは軒端に怒ります赤天狗、青天狗、乃至は錦帳に粧を凝らす姬御前の、夜もすがら看板に立ちますとは、世は樣々の浮世ぞかし、停車場の踏み切りに査公のお目玉したゝかに頂戴したるも旅に心の急げばなるを、其處はいたむ程緊めつけし若者の草鞋の手前、穴かしこと尻込めば、また行き扳けんとあせるお婆さん捕へて聲高く叱り給ふにぞ、大事の瘠脛(やせはぎ)火輪に攫かれては、初孫の顏も見られまじきに、胴慾の婆さんかなやとこぼして行けば、流石は拈華坊なり、逝け！逝いて文明の火の車に佛果を得よと、人は戯言(いたづら)を云はぬものよ。

貧乏町の瘠犬に吠えつかれてスタ／＼と急げば早や三笠なり、後は岡山市の烟突、沸々と吹き揚ぐる黑烟の隙より朝日をすかして、峠一つ越ゆれば村社の鳥居道の左側に白きは御影石にや、竹の籬に薄紅梅の、しこ草繁る垣根にしとゞ白露に潤ひつゝも、桔槹の長柄ぎいつこひと擧げて、今日を限りの命とも知らぬ辨の情を含みて顏背けたる、「水殿風來珠翠香、却恨含情掩秋扇」、と連想はあらぬ方にそれし。

老松鬱葱たる隙吉備津社の甍朝靄にうすれたるを左に見やりて、こゝ備中の平野北へ／＼と往來

詞藻

に目も呉れず、石呉呂ステッキにたゝき付け、叩き付け北備の連巒うち渡せば、瞻乎たる長空の彼方瓚玩として東より西に蜿蜒起伏したる、果ては霞にうすれ〳〵て鎮守の社蔭に消えぬ。橋の袂の掛茶屋に腰をおろせば、夕べ村の若衆が飲みさしにや、銚子、杯缺げ膳の上に轉がりて、蚊帳の片らしきを張り廻したる棚の中に竹輪一つ、これも春なればこそ。雉子塗の菓子盆にいかゞはしき生菓子を盛りて、話慊らしきこゝの刀自と思しきがヌッと差し出したるを一ッ二ッ抓めば、小豆餡のところ〴〵黴菌(かび)吹きて、どうやら心進まねど葛根湯の如き温湯に目をつぶりて嚥み下しつ。

折から黑の山高帽の茶に褪せたるを猪頸に着なし、上衣は何れ嘉永慶應の作なるべし、泥靴に蹴返したる縞羅紗のズボンの只だ形ばかりなるを穿ちて、今日も村校に急ぎ給ふならん、埃にまみれし頬髯を春風になぶらせつゝ、わが掛茶屋を横に入り玉ひし。我は思ふ卿が黴れたる褞袍を着て校門を入り玉ふ時、また手慣れたる教鞭を取りて無心の兒童に對し玉ふ時、卿は慥かに人の世の浮華と榮達とを顧みずして、たゞ日々卿の義務に殉じ給ひしと、而して風朝雨夜只だ同一の單調を繰り返し給ひしと。然れども卿は慥かに一簞の食、一瓢の飲、尚ほその中に知足と慰安とを見とめ、また希望と自負と光明とを闡明しぬ。先哲宣はく、肱を曲げていぬ樂その中にあり、英才を得て敎ふ樂これより大なるはなしと、あわれ現世(うつしよ)の樂は擧げて卿の壺中にあり、我は重ねて云はん、あゝ小學教師なる哉と！。

がたひしと軋り行く荷車に我に返りて、脚絆の紐を直して立ち、橋を渡りて左折すれば坦々たる

田舍街道、兩側の萱葺き左右より傾き合ふて、瀦地さへ街道より見え透きたれば惡臭中々に恐入たれど、椽先に荷鞍踏む親雀のちう〳〵と呼び交して、痔猫叩きつけつゝ遊ぶ七ッ八ッの小供、拇指啣へて拈華の後姿見とれたるなど。

春風一路變化なき街道をいゆきかく行き、茶屋やある、饂飩屋やあると、道傍の庇覗き込みつゝ急げども、煤疊にころがりたる火吹竹の外には、鼈甲の眼鏡越しに、じろ〳〵と針の手を止めて睨む婆さんのみ、漸く總社まで半里に足らずと道行く小僧に教はりて、山懷を廻り、土橋を跨ぎて家並繁き田舍町の入口、とある割烹店に雪崩れ込みぬ。顔も蔽はんばかりなる缺げ鉢に、したゝか盛り呉れし饂飩の筆の軸ほどなるを、囓み込み嚥み下して、兎に角腹は作りたれど、主婦の掌に赤く紫につぶ〳〵と膨れたるものゝ飽く迄も氣にかゝりし。龜裂のある塗壁に目醒時計のもう一時を過ぎたるに、さらばと今度より手帳に小使錢扣へ取りて一金拾錢饂飩五盃内三盃拈華坊と是れは一水が註したりし。

かくて湛井に着きたりしは二時過なりしか、道は嶒峻たる峻崖の半腹、高梁川に臨みて蛇行するなりき。河を後に右に折れて豪溪道に入る、左右の列嶂層々列をなして或者は傾き、或者は俯し、そを洗ふ谷川の渦卷きては水底の眞砂玉の如く透りて溶々流れ淀む、あわれ藐姑射の山人とは云はじ、この水を掬び、この翠微にかくれ、かの霞を喰ふて野鶴閑雲獨りこの仙寰に世の煩と絶ちたらば、さるを腹さへ透けば糟糠だも飽かぬ凡骨と生れたりし物狂ほしさよ、あわれそれも甲斐なしや。」

掬ばゝ玉や滴らん眞清水に洋巾を潤しつゝ、奔騰せる瀧川左に見て進み居れば、兀爾たる巨巖相擁して蒼蘚之を封じたる奥に、白梅の花傾ける草廬の棟に咲き飜れて、茅萱の庇に落葩玉釵を亂したる、柴門の側に筧の水のそれも花瓣を流しつゝ、是處彼處の柴門竹籬、潦さへ倒に白梅の梢を蘸したる、ひと里は皆な花守の子孫とぞ見えし。

石吻相嚙む瀧川の雪を吹き玉を綴りて激したるあたり、鄙珍らしき瓦屋根に形ばかりの衡木門、駄菓子營業の看板にやと打ち見やれば槇谷駐在所と讀まれたりき。言問はん里人さへ稀なるに、只だ道と覺しき所は岨と云はず畷と云はず玉なす汗を拭ひつゝ行けば、麥の芽そよ〳〵と風に動きて搖蕩する春風の絶え間〳〵、えならぬ香のそれも理りよ、柴胡の糸の絡まりたる草葺きの屋根を蔽うて此處も白梅の花盛り、花笠縫ひ添へて鶯の聲々、「春山一路鳥空啼、芳樹無人花自落」つる閑けさに、神秘自然にかくるゝとぞ覺えし。

攢峰峭壁、谿いよ〳〵幽にして、渦まく水の湓音高く、行手の怪巒左に廻れば突兀穹窿に嘯ける奇嶂巘𡾊道を挾みて東西に聳立す、名たる豪溪の天中山とは是處にや、奔騰汾湧せる白水互に相嚙んでは銀鱗甃し、石嘴相角しては顆々白玉を吹きつゝ、淵渟し、遡洄し、峭壁の下結びなせる山庵の中、咆哮する水の絶間讀經の聲幽かに聞えて、白梅一葩風なきにひら〳〵と石燈籠の傍に散りぬ。

言問はん何地に無情を觀ぜしおん身なれば、この水に嗽ぎこの山に對して、野鶴閑雲白妙の衣には脱ぎ更へ賜ひし。

精舍の庇ごしに嶙峋たる頂東に仰げば劈裂せる屏嶂東に傾き、巖頭の枯枝手を延べて夭矯たる雲の峰を捉へんとし、徐ろに頭を回せば西の方神斧一夜九霄より一下し來りてや削りなしけん、懸崖兀として翠園を挺んで、蒼苔そが半面を掩ひ、松柏楂牙そが頂に簇生す。

峭壁の頂に赤松の幹のはや夕陽に榮えまさりたるに、まだ三里の山路行き暮れては便なからんと踵を廻して高梁路にかゝる。まだ百歩二百歩が程は流石は天中山の翠園、仰げば璀燦の霞、俯せば淨澡の水、三つ二つ山懐を廻りて道の邊の石に踞し後れたる拈華、一水を待ち、何時頃にやと時計を探れど不思儀や胴衣、上衣、袴まで隈なく探せど見當らず、後れ馳せに登りつきし拈華等に遺失しては居らざりしやと云へば、知らずと云ふ、かく／＼と云へば引返せといらつに、來し道をまたすた／＼と引き返したれど詮なかりき。昔は三保の松原に獵夫をたばかりて天女その羽衣を取り返し給ひしとこそ聞け、あわれ天中山にはさる意穢き天人もおはすまじきに。

日は漸く夕ならんとして道傍の梢に野雀の羽搔き世話しく、夕日あか／＼と禿山の赭石に射返りて旅の心いよゝ騷がれぬ、山田の畔にさゝやかなる水車小屋人やゐると差し覗けば四十男の糠にまみれたる、峠まで幾程と聞けば二里と氣の乘らぬ挨拶、路に茶屋やあると重ねて問へば、あらう筈なしと何處までもすげなし、さりとは言葉に金錢（ぜにかね）はかゝるまじきを今少し優しくは云へぬものにや。それも朴訥仁に近しと云へば理（わり）なしや。

渴きては谷川の眞清水にて事足れども、犬さへ吠えぬ山里に夕日を顧みて、飢ゑ切りたる腹撫で

さすりつゝ旅のあわれつく〴〵と身に泌みて、幾度か拈華等に行き越され行き越され、漸く峠らしき所まで登りつけば、未だこのあたり石槌の音、物騒な地雷火まで聞えて街道普請の折柄なりき。

夕陽は已に西に彩りて消え、夜の帷帳は遠山の嶺よりおほひかゝりて、六日ばかりの月しめやかに、山嵐習として冷かに外套の襟より泌み來る心細さ、鳥どもは皆な寢て居るかと夕べ余吾の海に旅衫絞り敢へざりし古人さへ偲ばれて。最早道の邊に立往生とあきらめつゝ兩の手もて。膝頭確とおさへては一歩喘ぎ二歩喘ぎつ、榛の木立を右に廻ればうれしや炊烟輕く揚りて、椽先に駄菓子箱不行儀に並べたる掛茶屋あり、こゝに小豆餡のはみ出でたる田舍餅にありつきてほつと一息吹き返したれど、踵の肉刺の潰れたりと覺えて疼痛云ふばかりなし。

まだ高梁まで一里と聞き、大地に夢の如き草庇の影を踏みて出れば、路は曲折迂回、淡き月光は巨蟒の如き松影にさへられ、蒼茫たる深壑杳々うすくれて、谿川の囁語千仭の澗底に幽かなる所ここ北備の巘巒にかゝると覺えし。八雲むかふす劍峰の彼方靄の中に瞬ける灯の迢かなるはかしこ高梁の人里にや。登々たる山路歩めども盡さず、泱々たる谿川到る處に聞えて、一家の松火彩雲に隔たり、朧ろげなる夜の帷帳瞳々山を罩め谿に迷ふて、犬の吠聲迢乎たる白雲の彼方に聞ゆ。磊々たる石呉呂に幾度か躓きつゝ漸く人里に辿りつき、柴門を叩きて高梁はと音なへば、其處を左りに眞直に下り給へ直ぐ下に見ゆる町家はそれなりと應へぬ。

感興餘韻

あさひ生

夕暮そむる雲のまに、
みそらの星は匂ふなり。
野末の花を洗ひきて、
朝にさわぐいさゝ川。

希望の空に生れいでゝ、
星の子汝に榮あれ。
闇の此の世を輝しゆきて、
光は世々につきせじな。

塵しく土地に流れとめて、
玉なす滴めぐみあれ。
清きすがたの露となり、
とこしよとはにあせやせじ。

世界の花恒久のものならず。
はらり〳〵と夢のまに、
あはれ風雨あれやせん、
されども星は耀けり。

永劫つきぬひとの恨、
「盲人は見るを忘れんや。」
希望はとはに消えもせで、
いさゝ小川に啓示あり。

塒にいそぐさゝや鳥、
一日の平安汝にあり。
人の子あはれ幸なきか、
眞理は朽ちじされどなほ。

藻詞

花とも薫れ、いまさらに、
雲とも散れよ、さればまた。
詩人よ汝に心情あらば、
たかき眞理を歌へかし。

ミューズの神に力あれ、
サバオス汝に効驗あれ、
希望の空に光あれ、
平和の世界に恩澤あれ。

花萬山にかすむとき、
月萬水に澄むときに、
人よ友よ仰ぎ見よ、
自然の默示いかにあゝ深し。

俯して思へよ、我が友よ、
詩人は汝に教へずや。
「卑き物も、高き物も、
つたなき物も、清き物も、
渾てが墓に終るとならば、
人の世にある、はたいかに。」※

この筆あれや、吾れゆかん。
この槌あれや、吾れうたん。
めつせる光れり、この心。
小さしと人よ笑ひなそ。
ソロモンの榮みつるとも、
野邊の百合花にも及ばんや。

あゝ、さゝやかな始りよ、
至誠によりて建てよかし。

不撓不屈のたけきこゝろ、
汝や强かれ久しかれ。

弓張り、絃に矢ををきて、
サタンよ汝に力あるも、
浮世の嵐吹かば吹け、
眞理は遂に朽せじを。

義務の大道を探ねてぞ、
急がず休まず吾れも人も、
闘終えて後の日に、
※※代々に永續ふ其の榮譽。

※ テニソン
※※ ゲーテ

新古草

おほのき、かつこよ

かずならぬ庭のしこ艸これをだにおほしたてゝば花もさかまし、

いつかまた「もとの身」ならで花は見ん「春やむかしの春」にはありとも、(伊勢物語による)

いとせめてうしとつらしさ世をすてし人にも花はほだしなりけり、

人もこぬみ寺さびしく春ふけて花ちるゆふべ僧陀羅尼よむ、

山吹の花の一むらやり水にちりてながれて春くれんとす、

つまごと

小林愛雄

山寺に春あけがたの梅の花繪をかく僧の右手にゝほへる。
春の香に院の奥の間(ま)興もつきず金の襖(ふすま)のゑだくみの梅。
かゞり火にうたおもしろし白雲の花の祇園の春のおぼろ夜。
松ばらをぬひゆく君が袖とめてかをりにつゝめ野百合山百合。
尼君の經よむみこゑみだすらむしづかにうてよ山寺のかね。
法隆寺塔の扉(こびら)の樂の音にひめたる意味を僧ときかねつ。
山門に御僧ははきの手をやめて何おもふらむ紀の海の春。

博覽會のうたの中に、

小瓶より女神のうつすとはの水を童子は盃にほゝゑみうくる。(揚柳觀音)
岩の上にいつまであらむ命でも舟はくだけぬ世はあらしなり。(一縷の命)
うつゝなき天のみこゑをあやしとも木のまに少女耳そばだつる。(こだま)

ひなうた

たてみ

○相知れる人の初兒(うひご)得たるよろこびに

これやこの春(はる)知(し)る神の愛子(まなこ)ぞとまづよろこびのうたゝてまつる

○新春のうたのうち

みやこをほく君春かぜにゑひぬらんその野にもるゝうたなつかしき（都いでて野に春を迎へし友に）

みがほしき君がゑまひもやどるべし春たつ朝の加茂河のみづ

ほの〳〵と野はあけにけり春知らす帝(みかど)の鳳輦(くるま)今か來(く)るらし

○久しく見ざりし友のわびしき境遇にあるに寄せて

友よたれわすれか果むきみがため良き夢あれといのる子もあり

○わかれ

見かへれば夢ぞこもれる夕川(ゆふかは)のおぼろがなかを君が舟ゆく

とゞめあへぬわかれの岸のさみしさやつきぬなごりぞ水にまよはむ

ながれゆくこのみづしばしとゞめてよ君ゆくふねの早もかくるゝ

○

おほけなきこれや默示(さとし)とひざまつく美(うつ)くし子らをうらやみもすれ

をろがむにいづこか聖の宮居(みやゐ)ぞと盲目(めしひ)をわぶる二十二の春

○いでたち

雄々し兒(こ)が今し雄々しき朝戸出(あさとで)や吉備(きび)津國(つくに)原(はら)千雲(ちぐも)湧(わ)きわく

楡の葉かげ

一溪

手をくみて楡の葉かげに祈りする人きよからずわれ聖からず。
四十五里波ゆく人の送して見かへる船やなくほとゝぎす。
音にきく此や南大門とふり仰く空に一聲なくほとゝぎす。
蜆宮の曉の雨はそうして軒闇ちかくなくほとゝぎす。
をとめ子の神のまうでの下向道白き小蛇の前をよこきる。
雨すきし小田ところ〳〵水かゝみ姿うつして入る夕日かな。
風のまゝに牡丹白花かつ散りて牝猫おとろく行く春の庭。
川ありて橋ありて追分の石ありて右も左も菜の花さかり。
面かげの眉にのこれど若き色のさえたる色のうせし君かな。
鳩の胸毛いたくゆらぎぬ鳥かれも君の姿をうれしと見るか。

詞藻

三々會詠草

新聞にぽたりと落ちし毛虫かな　一溪
麥の穗の一畝あまりを忘霜

詞藻

厄病や一村いまだ麥刈らず
京城を空に殘して時鳥
歴山奈翁對して陣す雲の峰
瀧殿は更衣の日より青簾　半狂
青葉して對陣こゝに一ヶ年
匂ひけり青葉若葉の阪五町
衣更へて書伯の筆の輕げなる
子規なくや七堂伽藍奈良の町
小謠の室町衆や夏羽織　牛溲
藥玉やきさいの宮の歌合せ
禪寺の書院をかりし夏書かな
巧者ぶる姉のさしづや更衣
桶に沈む小錢わびしや心太
五月雨汨羅の水の濁りかな　菱芸
寛濶の伊達の素足や初袷
水亭やビールうれしき青簾

藻　詞

南椽に新茶干したり詩仙堂　　菱芸
薫風やいもが持て來し沖膾
殘壘に蛇首を出す日和かな　　寒村
龜鳴くや和尚小僧と問答す
青梅に手をすぼめけり毛虫かな
横臥せば頬はらひけり壷すみれ
壬生狂言山河七十里若葉かな（夢に京に遊ぶ）





雜錄

沅湘の愛國詩人

吉田拈華

然り、彼も亦時代の子なりとは、いしくも喝破したりけるよ、試みに今代史の一頁をひもとき見んか、革命の潮流は澎湃として浪を擧ぐるの所、一度手をあぐれば佛國革命となり、二度足をあぐれば獨逸の勃興はなりぬ、もとこれかくの如きは單に歷史上の事實に過ぎず、而かも再び思想上の轉連に顧みるに、かの時運の大勢は滔々として流れてやまず、一度呼べば自由主義、二度叫べば哲學思想、かくの如くにしてバーンスは出でたり、クーパーは生れたり、獨逸にゲーテ　ミルレルの大法螺を皷吹するあれば、英國亦ウオルヅウオルズ　シエレー　バイロンの大獅子吼を擧げぬ、よしいたづらに疎矯の言をなすをやめて少しく當時の時代と詩人について靜察する所あらしめよ、かのローマン派たるスコット一輩に附てはわれ必ずしもいはず、一脉こゝに理想派の起原を劃したるウオルヅウオルズとシエレーとバイロンと實にや彼等は時代の子なりき、ウオルヅウオルズが大陸漫遊は彼に如何なる感想を醒覺せしめしか、必ずや渠はこの行に於て一新生命と無限の感慨とをもたらして歸りたるなり、而して又シエレーは奈何、渠こそは眞個英國に於ける革命運動の眞髓を發

揮したる詩人なりき、われ曾てドーデンのシエレーを論ずるに聞く。

シエレーは神興の白熱を以て、其の詩を作爲す、光焔萬丈、生氣辭句に溢る、眞個天馬の大空を奔るが如し、彼は神興を尊びて反省を卑しとし嘗て其の詩句を推敲せしことなし、又其の少時の作を保存せしことなし、然るに其の少年期の我れを知り、過去の殘れるを繼紹し、若しくは思想、境遇の歷史を尋れ求めんとする念なければなり、されば渠の如きは假令長命したらんとも、其の眼は常に前にのみ向へるか故に、過去の作の如きはすべて、忘却し終りしならん。

と、若しそれバイロンに至りては、主觀的抒情詩人の典型のみ、熱烈なる革新的血潮の迸湧せる青春の權化而已、シエレーのそれを建設的革命思想といひ得べくんば、バイロンのこれは慥かに破壞的革命思潮とも云ひ得べきか、さて又下つてかのテンソンを見ずや、十九世紀後半の詩壇は決して鏡花風月に思ひをよせて、漫然詩を呼ぶものにはあらず、必ずや其處には一個人間生存に對する大問題の横はるあり、當時の思潮はすでに坦々たる人生の平道を無意識に渡らんには、その思索餘りに反省的に、其の理想餘りに向上的なりき、慝れば彼等は競ふて人生の機微をうかがひ、やがては安心立命の域を憧憬せりき、而して這般の特質を有せる詩壇を負ふて代表せるもの、これわがアルフレッド、テニソンその人にあらずや。然りかくの如くにして彼等時代の子は、又よく時代の精神を歌ひ、時代は詩人を造り、詩人又よく時代を作りしなり。飜つて思ふ、請ふ所にして容れられず、願ふ所にして心にかなはず、茫々として一生悲憤の夢を驀然沅湘河畔に滅したる、あはれ鬱結の愛國詩人屈原は奈何、乞ふ少しくわれをして當時の時勢を語らしめよ。

舞臺はすでに回轉せり。文華煥發の周の盛時は過去の夢にして、春秋の五霸又すでに落莫たり。世は擧げて西戎秦の勃興に對して、或は合縱となり、連衡となり、混然不規さながら一落の修羅場を演しぬ。この内に介して楚國は實にわが屈平を生みぬ、偲れば渠が時勢や、かの淵明を生みし時代思潮のそれにも似て、社會はすでに混亂の極に達し、人は各奇智を弄し、巧計を競ひ、戰亂はた踵を接して至り、天下未だ一日の安きを得ず。之れに加ふるに、懷王は暗愚よく人を用ゆるの明なく、廟堂の諸太夫はその氣宇頗ぶる狹少、いたづらに猜疑讒諂、邪曲の公を害し、方正の容れられざる蓋し一再にして止まらざるなり、而して廟外又張儀が縱橫の辯舌は常に楚國をたぶらかして、地を掠め軍をつからし、丹淅に斬首八萬の大敗をまねけば、藍田に於て一敗再び地にまみれにき。而してかくの如きもの、皆これ屈平が意に違ふが故なり。渠が衷情を求めて豈憤懣せざらんと欲するも得んや、これを要するに渠が心懷は愛國の靈火を以て燃ゆるなるを、這般の憤懣と、これに伴なふ鬱結たる心裡の不平と、迸りてこゝに一篇の詩なからんや吁一篇敍情の詩賦なからざるを得んや。

鄭玄曰く、詩者志之所之也、在心爲志、發言爲詩とこれ蓋し支那に於ける詩の本領也、われまた風雅比興頌のそれは今必ずしもいはずといへども、一度かの詩賦に至りては、驀然主觀的情緒の表現に急なるものなり、彼や或は理想を劃して作られしならん、而して是れや決して然らず、萬有の景象は遂に其の歩を詩域に進め、人間が自覺的情緒と共に融然として調和し、以て宇宙の全般は渠が詩想中のものとなり、詩想はた宇宙にむかひて絶對的直觀を致すに至る。かるが故にわれはこゝに

一個愛國の敍情詩人を羅し來りて、これに庖刀を加へんとするに當り、事々しく其の詩の本質に就いて學者の言をなさんと欲するものには非ず、然りといへども苟くも渠に名づくるに愛國詩人の名を以てしたる以上は、こゝに少しく其の詩の本質に就いて一言を加ふるも敢て無用の閑文字にあらざるを思ふなり。

詩は人生の批判なりといふマシユー、アーノールドの言は兎も角、われは常に思へらく、詩！嗚呼詩は遂に理想を剖して作せらるゝにあらずんば、未だ以て詩の眞價値はこれを認むるを得ず、少なくとも詩は天來の妙想を驅つて、世界の預言者となり、社會の指導者となり、さてはさかまき來らんとする思潮の大勢を感得し、燦一燦億萬の人の子の爲、そが心眼に一大光明を與ふる燈臺となりて、その前程を照らさんと、これ眞個詩人の盡すべき本務にして又理想詩のよつて起るべき因由なり。

こゝろみに見よ、チヨーサーの「カンターベリー物語」や、スペンサーの「神女王」や、ミルトンの「失樂園」や、さては哲學派一流の諸作や、これ等はすなはち眞個理想詩の好模型にあらずや、而して今翻つてこれをわが愛國詩人屈平に見る果して奈何。屈平のそれは遂に理想詩にあらずとなすか、渠が詩や誠に胸中の憤幽遣るに其の所なく、語るに其の人なく、鬱結不平の餘情はほとばしりてついにかの詩賦となりしとする時、勿論そこには一つの理想の片影もなく、一個定見の面影もなからん、然り、たゞ輕々にこれを觀過せん時に於ては然らん、按ふに屈原の詩賦は慥かに直觀直覺の一刹那、渠が愛國の衷情が一瞬時と一彈指とを交へずして沸々湧出したるものなり、さなり詩は直觀

によるゝ而して直觀によるを以ての故に理想なしと斷言し得るか、われは只一言次の如くいはん、渠亦すでに理想を劃す、而かも直觀なき詩は其の詩想の美に於て何するものぞ、否詩想の美は求めてこれを何處に得るやと、すなはち去つて一度渠が人生觀を窺はん。

先づ斷言す、屈原の人生觀は疑もなく愛國の悲觀なりと、吾人が屈原の辭賦を讀みて、その最もよく自己が感想を披瀝したる所、點々として皆これ愛國の熱情にあらずや、渠が衷心の悲劇と、家國に對する憤懣の情は所詮愛國の化身にあらずんば其の發現のみ。かくて幾星霜の彼れが生涯は美はしき愛國の小歷史に非るはなし。見よや孟夏草木莽々たるを見ては「懷を傷みて永く哀ふ、汨としして南土に徂く、眴として窈窕たり、孔だ靜ににして幽黑、寃結紆軫にして愍に離りて長だ鞠あり、情に撫ひて志を効へ、俛詘以て自から抑ふ」と呼びて惆悵の思ひを遣り、浩々たる沅湘河畔にたゝずみては「浩々たる沅湘、分れて汨に流る、修路幽蔽、道遠くして忽たり、質を懷き情を抱き、獨り匹なし、伯樂既に歿す、驥馬焉んぞ程らん、民生命を稟く、各錯く所あり、心を定め志を廣む、余何んぞ畏懼せん、曾て傷み爰に哀み、永く歎喟す、世溷濁して吾を知る莫し、人心謂ふ可らず、死の讓る可らざるを知る、願はくは愛するなからん、明に君子に告げん、吾將に以て歎と爲んとすと」嘆じ、遂に渠は石を懷ひて自から汨羅に投じぬ、而かも其の動機を見、其の言說を味はゞ、言言句々皆愛國の衷情死に至る迄披瀝せられざるはなし、誠に渠が一生は愛國によつて活動し、愛國によつて終始し、はた愛國によつて生存す、わが屈原に冠せしむるに愛國詩人の名を以てしたる或

はそれ不當にあらざるべきか、すでに然り、われをして次に渠が愛國の悲觀のよつて來りし其の原由を探求せしめよ。

按ふに人生悲慘のこと指かゞのふる限りに非ず、而かも靜かに觀念のまなこを閉ぢて、深く其の由つて來る眞相を尋ぬれば、何れか現實と理想との衝突支捂にあらざるべき、然り、誠に理想は人生の靈火なり、而して又自己投影の如し、捕へんと欲して煩悶すと雖ども、追ふに隨ふて捕ふ能はず、人は爾く理想を搆へて、又爾く實現の難きを感ず、其の衷心に於て苦悶なからんと欲するも得んや、人生常に悲慘の事多く、詩人又多く痛恨の聲を發す、皆これが爲而已。而して今これを包が愛國詩人に見る果していかにぞや、渠も亦理想と現實の衝突に苦煩し、以て人生に對し、轉々反測、遂に悲觀のをのことなりぬ、而かも焉んぞ知らん、渠が悲觀は其の愛國の悲觀なるを、乞ふわれをして少しく彼が愛國の一斑を窺はしめよ、而してわれは只一斑といふ、蓋し渠が身世は悉くこれ愛國の權化に外ならざりしなれば。

楚辭一卷！　これ悉く渠が愛國の熱情の迸湧を忍ばしむるものなり、すなはち左に其の數節を抽して共に渠が身世に泣かん。

朝に木蘭の墜露を飮み、夕に秋菊の落英を餐ひ、苟くも余が情それ信に姱以て練要す、長く顑頷するも亦何んぞ傷まん、……

謇として われ前脩に法るは、世俗の服する所に非ず、今の人に周はずと雖ども、願はくは彭咸の遺則に依らん、長太息して以て涕を掩ひ、民生の多艱を哀む、余好く脩姱以て鞿羈すといへども、謇として朝に誶めて夕に替せらる、すでに余を替するに

蕙纕を以てし、又之れを申するに攬茝を以てす、亦余が心の善くする所、九死すと雖ども其れ猶未だ悔ひず、（離騷）

……邅つて吾がの崑崙に道すれば、路は修遠以て周流す、志を雲霓の晻藹たるに揚げ、玉鸞の啾々たるを鳴らす、朝に軔を天津に發して、夕に西われ西極に至る、鳳凰翼してそれ旂に承り、高く翺翔たると翼々たり、忽ちわれこの流沙に行き、赤水に遵つて客與す、……志を抑へて節を弭し、神は高く邈々たるに馳る、九歌を奏して韶を舞ひ、聊か假て日に以て媮樂す、……忽ち臨んでかの舊鄕を睨れば、僕夫悲しみ余が馬懷かしみ、蜷局顧みて行かず。（仝上）

高く飛んで安く翔り、淸氣に乘り陰陽を御す、吾君とともに齊速帝を導て九坑に之く、靈衣被々たり、玉佩陸離たり、壹陰壹陽、衆余が爲す所を知る莫し、（大司命）

木蘭を擣いて以て蕙を矯め、申椒を鑿げて以て糧と爲し、江離と滋菊とを播いて、願はくは春日以て粻芳と爲さん、恐らくは情質之れ信ぜられざらん、（惜誦）

初め吾が陳る所の耿著、豈今に至つて其れ庸んぞ亡びん、何んぞ獨り斯の謇々を樂まん、蓀美の完す可きを願ひ、三五を望み以て像と爲す、彭咸を指し、以て儀と爲す、夫れ何んぞ極まつて至らざらん。（抽思）

吾が生の樂なきを哀み、幽として獨り山中に處る、吾か心を變じ以て俗に從ふ能はず、固に將に愁苦して終り窮せんとす、接輿髡首し、桑扈臝行す、忠必ずしも用ゐられず、賢必ずしも以ひられず。伍子殃に逢ひ、比干菹醢せらる、前世と而して皆然り、吾又何をか怨まん、（涉江）

湯禹久遠、邈として慕ふ可からざる也、違を懲りて忿を改め、心を抑へて自から彊む、滑しきに離ふて遷らず、願はくは志の象ある有らんことを、路に進み北に次す、日昧々として其れ將に暮れなんとす、憂を含み哀を虞んで、限るに大故を以てす。（懷沙）

渠が愛國の至情や誠に右の如し、而かもこの至情はついに渠を導いて人生悲觀の暗路に彷徨せしめたりき。われは今其の因となりしものを求めて二を得たり。曰く楚國の淆亂、曰く行路の錯誤。乃

ちこれなり。

楚國混亂の狂態はすでに前にのべたり。すなはちこゝには深くその悲觀を導きし動機に遡りて硏めんに、凡そ暗黑なる社會に於ける個人程あはれむべくはた悲むべきはなけん、試みに請ひ問はん、一世の亂調は其の極に達し、濁騷たる風塵乾坤を飮むが如き家國と、一個淸麗朝露の如き愛國の詩人と、嗚呼何等悲むべき對比ぞや、腦裡滿幅の經綸はあれども、これをほどこすに其の地なきをいかにすべき。胸中愛國の靈火は燃ゆること火輪の如しといへども、當路塞がれて其の抱懷を開かんに由なきをいかにすべき、吁かくの如き家國とかくの如き熱情と、この心を容るゝを知らざる家國と、この心をあらはさんに術なき個人と、吁何等悲慘なる對比ぞや、家國は實にかく迄亂れたるか、當路は實にかくまで擁塞せられたるか、國君は實にかく迄われを知るの明なきか、われ最早天地の大に介して而かもよく天地の大なきに等し、吁斯の如き境地に陷りて、時に仰いで旻天の蒼々たるに對し、俯して山河の荒廢を見れば、人生唯一の死ある而已にはあらざるべきか、よしや「漠虛靜以恬愉兮。澹無爲而自得。聞赤松之淸塵兮。願承風乎遺則。貴眞人之休德兮。美往世之登仙。與化去而不見兮。聲名著而日延。奇傅說之託辰星兮。羨韓衆之得一。形穆々以寢遠兮。離人群而遁逸」と稱して頗ぶる老莊の淸談に傾きたる、さては「朝に髮を湯谷に濯ひ、夕に余が身を九陽に晞し、飛泉之微液を吸ひ、琬琰の華英を懷く」と稱して身を行雲流水に托し遠く無何有の境に彷徨せんと擬すといへども、忽ち夫の舊鄕を臨睨しては「僕夫余が心の悲を懷ひ、邊馬顧みて行かず、舊故を思

ひ以て想像し、長太息して涕を掩ふ」といふもの、却つてこれ渠が衷情の眞を語るものにあらざるなきを得んや。若しそれ「思美人」篇に「開春發歲兮。白日出之悠々。吾將蕩志而愉樂兮。遵江夏以娛憂。擥大薄之芳茝。搴長洲之宿莽。惜吾不及古之人兮。吾惟與玩此芳草。解篇薄與雜菜兮。備以爲交佩。佩繽紛以繚轉兮。遂萎絕而離異。吾且儃佪以娛憂。」と稱するに至るも、皆これ渠が愛國の餘憤は、そのやるせなの心を風烟の輿、自然の賚に遣りて、いかゞかその鬱結の餘情を洩らせし而已。原すでに江南の野に放たれてより作れる所の諸作、すべて皆君を思ひ、國を憂ふるの情、惻惻として人を動かす、行途水陸の歷る所、步々哀を生じては涉江の篇となり、すでに江南に至る、觸目皆悲哀を感ぜざるはなし、高秋搖落の景象に對して、思ひを一片時事を概するの言葉によせ、遂に去つて淵に赴かんとするものこれ悲回風の一篇にあらずや、而かも尙貞讒分たず、害國にあり、只それ胸中の正氣、一察之後なれば死するも尙且つ怨なきの情を泣くものは惜往日篇にあり、所詮は現世に存在するの間、愛國の理想は渠が身邊を圍繞せるものを、吁々、斯の如きの境地にありて、仰いでは昊天の蒼々たるに對し、俯しては山河の荒廢を觀ん時、人生求めて唯一の死する而已にはあらざるべきか、沅湘の愛國詩人屈平字は原。渠は遂に石を懷いて汨羅に投じぬるなり。雒陽の文秀賈生後に湘水を涉り賦を爲りて屈原を弔して曰く、

……訊げて曰く、已んぬるかな、國それわれを知るをなし。獨り堙鬱としてそれ誰にか語らん、鳳漂々としてそれ高く逝く、それ固に自ら縮つて遠く去る、九淵を襲れたるの神龍あり、沕として深く潛みて目もて自ら珍とす、融爚を彌うして以て

隱處せり、それ豈螘と蛭螾とに從はんや、貴ぶ所は聖人の神性、濁世を遠けて自から藏る、騏驥をして係ぎ羈すを得可からしめて、豈夫の犬羊に異れりといはんや、般として紛々として、それ此の尤に離へり、亦夫子の辜なり、九州を瞝みて君を相けん、何んぞ必ずしも此の都を懷はん、鳳凰千仭の上に翔る、德輝を覽て乃ち下る、細德の險徵を見ては、翮を搖增して逝て去る、彼の尋常の汙瀆、豈能く呑舟の魚を容れんや、江湖の鱣鱏を横ふ、固に將に螻蟻に制せられんとす、

と、誠や彼の尋常の汙瀆は、よく呑舟の魚を容るゝものにあらず、渠は高絶無情なる天を仰いで、遂にあらゆる愛國の化身を水に葬りしなりき。

吁詩人由來悲觀の言をなす何の故ぞ、渠の理想は渠の現實と衝突しぬ。渠の身世は惚茫として夢幻の如かりき、渠が捧ぐる渾身の愛は破れたり、渠の前途には希望なく光明なく皆ことごとくに暗黑と錯誤となりき、而かも尙社會の狀態四圍の境遇は渠一人の悲に對しては殆んど無關心にして轉々滔滔として進みぬ、顧みてかくの如き境地にありて煩悶し懊惱する渠等詩人の風懷よ渠社會を仆すにあらずんば、渠社會に仆さるゝか、或は遠く稀依のさかひにその安心立命の地歩を固めざる可らず、それには宗教あり、神福音を垂るべく、はた自然ありて靜かにその感懷をやることを許す。茲に於てか我が愛國詩人の如きを生む一方には、バーンスとクーパーとあり、將又淵明と湖上詩人とある所以にして、わが屈平の如きは眞に憤幽又憤幽、不平に重ぬるに又不平、遺憤の餘沫は時に迸りて淸淡となり、絕望となり、怨君となるも、必ずやこの餘沫の下には沸々岩に激する愛國の急潭の直流せるを認めん。かの淵明が楚調以て歌ひし怨詩「天道幽且遠、鬼神茫昧然、結髮念善事、僶勉六

九年、弱冠逢世阻、始室喪其偏、炎火屢焚如、螟蜮姿中由、風雨縱横至、牧斂不盈廛、夏日長抱饑、寒夜無被眠、造夕思鷄鳴、及晨願烏遷、在巳何怨天、離憂悽目前、吁嗟身後名、於我若浮湮、慷慨獨悲歌、鍾期信爲賢、」に見るも尙われは充分に其の胸裡の鬱怨を窺ふを得ざりしもの、一度渠が辭賦となる、言々句々遂に涙を以てせずしてはこれを讀過するを得ざりしなり、吁滿腔の慷慨鑄つて一鍊の鉄火の如きはあれども、國を思ふの衷情流れて泉の如きはあれども、當途暗冥、茫々として放浪九年の原が生涯に泣きしわれは、最早いかにその文字と形体とを異にして渠が一世の閲歷を論ずるとせんも、これを要するに渠は遂に愛國の權化に外ならざるを、みだりに奇矯の言をなして渠を評隲するが如きは、もとこれ吾人の境地にあらず、われは只楚辭一卷を讀みて、偶渠が身世に泣き、こゝに一篇幽涙の文字を遣らん而已。

僕の藻鹽草

あ　き

いつでも休みには是非歸つて父母を省し、みんなの顏を(僕には祖母と兩親とそれから妹が二人に弟が一人ある)見るのが僕の習慣の樣になつて居るので此休みにも例に違はず歸省して、みんなで或日は山登りに半日の淸遊を試みたり、又或日は鹽風に吹かれながら濱邊に貝拾ひをしたりして樂むだ。山にも行かぬし、海にも行かぬ折に、思ひ出た節々を其儘筆にして見たのが此一篇なのである。

雜録

○その一、

„Das Pergament ist das der heilge Bronnen,
Woraus ein Trunk den Durst auf ewig stillt?
Erquickung hast du nicht gewonnen,
Wenn sie dir nicht aus eigner Seele quillt."

高い圓天井の狹いゴシック風の一室、うづ高い本の間に卓に對して、いかにも不安らしい面持ちをしなから、椅子に凭れた老博士は悵然としてかう叫むだ。苦慮悶々、疑惑の底に沈みなから、早や心氣沮喪し盡して、彼は只茫然たらぬを得なかつた。それも其筈なので、自分の研究に必要と思ふ種々の學を悉く修めてしまひ、其上神學の蘊奥迄もたづねて見た所で、彼は中々目指す境に到着することが出來なかつた。彼は大きな秘密を解かうとしてあせつたが、其甲斐もなく、何處に解く可き鍵があるだらふかとそれを見付けるのに早や心身を疲らして、種々苦心した揚句、幾多の辛酸に活動力を消費し盡すのに終つたのである。彼は遂に懊惱に懊惱を重ね、不安の思ひ遣る方ない心地して、自ら毒杯を取り、靜かに之を口にしていざ一飲みにと思ふ刹那、忽ち起る天使の面白い合奏の響さに滅入りつた氣を僅かに奪はれたのである。久しい歳月目を萬卷の書籍に曝し、思ひを人生の疑ひと闘はしたところで、安心を得る程の大々的闡明は到底難事たるを免れない。それは丁度獨り笹舟にでも乘つて太洋の眞中に浮み出た樣なもの、波は徒に高い計りで、舵を操るのも思ふ通りに行かないから從て羅針も其効がない。只狂瀾怒濤の翻弄に任せてあちらこちらに漂つて居る。するとあたりを鎖す濃霧を通して何だか光がさす樣なのに、氣を取り直すと見る間に又も倐忽霧が暗

くあたりを包むで仕舞ふ。それにこんなことが啻に一再でない。かう云ふ樣な時に、莞爾として自失しないのは無論尋常でない、嗟嘆大息こそ寧ろ當然の事なので。

しかし此處だ！　此失望の嘆息が潮の樣に一寸二寸と濱邊を引き下つて行く時に續いて其跡を充さんとするものは果して何であらふか。毒杯を手にするまでに悲むべしで、惡魔を友とするに至つては誠に憐むべしである。自棄、最も忌む可く避く可きは之である。若し一度之に支配される樣になればもう駄目だ。惡魔は喜むで一瞥を惠むであらふ。否大に味方となつて吳れるであらふが併し僕等はそれでどうして目指す光明の惠みに浴することが出來樣ぞ。勇進！　之れだ〳〵。僕等はどうしても進まなければならぬ。向上しなければならぬ。蝸牛の步も之を運ばぬに勝ること決して霄壤の差のみでない。左なり〳〵（僕はしかく絕叫する）、僕等は苦戰し、健鬪し、風と戰ひ、波と爭つても、目指す方に勇猛精進せねばならぬ。

それなら其太洋と云ふのは果してどんな所であらふ。邁進した結果何時か一度は彼岸に着くことが出來るであらふか。僕は斷じて言ふ、こゝは決してそんな際涯ある狹い洋ではないと。若し靑々した陸に着いたと思つて喜ぶ時があつたら、次の瞬間にそれは此海洋中にいくつもある（併し隨分遭遇し難い）孤島の一つであることを自覺して、やがて又次の遠征の用意をしなければならぬ。ユリセスの冒險談は之の善い比喩であらふ。併し此方のそれは舞臺の廣さが一層廣大である、それといふのも僕等にはあの話にある樣なイサカがないからである。

すでに道は遠いし、波風はひどひ。途中で大陸は愚か眇たる小島にも漂ひ付くことが出來ないかも知れぬ。又見事船を難破させる樣な目に遇ふかも知れぬ。そんな危險な航海を何故僕等は敢てしようと思ふのか。現狀維持は何故僕等の欲しない所であらふ。

僕等は決してロビンソン、クルーソーでない。一片の好奇心で此冒險を試みやうとするものではない。それなら一個の名譽心か。斷じて違ふ。野心か。それとも違ふ。それなら果して何が此遠航の原因であるのであらふ。只僕等は此遠航をせずには居られないのである

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

僕には十九世紀の初めに遡つて、轉た追慕の情に堪えない一人の科學者がある。遊獵遠足などに費された其少年時代の多分と或は病床に或は海邊に病を養つた老後の幾年かとを除けば其生涯は研究の歴史であつた。彼はあらゆる障礙は排して荊棘を開かうとした。其意氣の壯なと實に敬愛の外はない。居を閑地に移し客を謝して病痾を養つた晩年の彼を見る時に誰か同情の感なからふや。そも此科學者は誰であらふ。

彼が遺した群著中種源論が過去一世紀間の最大著述として擧げられるのも無理はない。其一度書を公にするといふ時には推敲に推敲を重ねて、一々闡明し盡さなければ止まないので、現にこの種源論なども其源は親しく南米を訪ふた昔、ビーグル號上彼が腦中に閃いた靈感（インスピレーション）に歸するのは當然であらふが、併し其事業は決して一朝一夕の經營になつたものではない。彼が其家系を調べるよりは

寧ろ人類の系統を糺さふと云ふ決心で進むだ勇進は驥馬の樣ではなかつたであらふが、其一歩一歩は確かに永き記憶を永遠に殘したではあるまいか。

彼は其自傳の中に言ふて居る

"I have no great quickness of apprehension or wit which is so remarkable in some clever men, for instance, Huxley."

と、是れは果して謙讓の言であらふか。否反て僕には是れが何だか大家の面影を傳へるものゝ樣に感ぜられる。

彼が研究の態度が其特質に負ふ所多かつたのは無論であらふが、其原を推し、理を究めて、少しも判定を急がなかつたあたりは決して一片の好奇心名譽心などのよくすべき所でない。彼は只研究其者を樂むだのである。それは彼が自白して居る次の言に徵しても判る。

"＊＊＊I think that I can say with truth that in after years, though I cared in the highest degree for the approbation of such men as Lyell and Hooker, who were my friends, I did not care much about the general public."

實に眞理の祭壇に額いた彼はまた餘念なかつたのであらふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「農夫をして小麥を耕せしめ麵包屋をしてパンを燒かしめ音樂師をして歌はしめ科學者をして

研究せしめよ、而して既に音樂師とならば飢へて且つ樂を研究するの覺悟あらしめよ、科學者とならば饑寒に迫られて尙眞理を研究するの覺悟あらしめよ、こは實に智的向上心なり」

僕は竊に此句を誦するを禁じ得ないのである。ハックスレーも言つて居る樣に、初めは小供がよく尋ねる「御月樣は何？ 何故光るの？」「此水はなに？ 何處に流れて行くの？」「風は何海の波はどうして起るの？」「此獸は何處に住むでるの？ あの木は何になるの？」等の問ひとなつて顯はれる智的向上心は、もし導き方が宜くつていためずに順直に育て上げたら、それこそつきぬ流れは滔々として其めぐる所は

„…………Philosophie,
Turisterei und Medizin,
Und leider! auch Theologie
……………………"

も啻ならぬのである。實にかの只研究を樂むと云ふ念も、遠航をせずには居られぬと云ふ傾きも、此向上心の純潔なものに外ならぬのであらふ。

併し此流れも源が涸れ易いと、日に照されて渇き切つて居る砂にいつか吸はれてしまつて、思ふ程見事に老ひた木立の根を養ふこともならず、美しい草花を咲かすことも出來ずに終ることがある。で、一度發達しかけた後も、よくいたはつてやらねば、小供計りでなく、五尺豐かなものも、成程

人からこそ發達を沮まれる樣なことがなくつても、反て自分自身で、此向上を害することか屢々ある。（玆に思ひ到ると、僕も竊かに慚愧に堪えぬことがいくらもある）。此點は大に注意して、自ら開發的な方向に精進しなければならぬと思ふ。氣をつけなければならぬのは「希望の幻燈」ではないか。由來サイレンの歌に耳は傾き易いものである。

○その二、

"The human heart concerns us more than the poring into the microscopes, and is larger than can be measured by the pompous figures of the astronomer."

Emerson.

「寒い獨逸の冬にも、毎朝五時になると、氷の張つて居るのも搆はずに、是非水浴を試み、それから愉快にはき〱毎日の勉學をしたのは全くカーライルの御蔭である。もしカーライル　ヱマーソンの二人がなかつたら予は遂に解拆幾何と微積分とはやり通すことが出來なかつたらふ」といつた大科學者もある。で今僕も殊更ヱマーソンのこの言に和しようと云ふのでないが併し所謂「人はパンのみにて活くるものにあらず」なので、僕は端なく他の重要な問題を手にして居るのを自覺するのである。

實に智的向上心は美的鑑賞力と如何云ふ風に干渉して居るであらふか。或る學者は超越的眞理と美との近接を說いて居るそうな。併し自然科學の研究は果して美の鑑賞と如何云ふ風に關係して居る

であらふか。もし兩つが相扶け合はなくつても、其儘にしておいてよいであらふか。

現在有つて居る樣な心身を有つて居て、之を完全に發達させるのに第一必要なのは調和である。調和を缺いて居る進歩もなければ發達もない。

氷河の動き樣が少し早いとか遲いとか、又動くとか全く動かないとか、そんなことを研究する程つまらぬことはないと思つて居たといふカーライルの流儀の偏屈なのには物の言ひ樣もないが、併し其カーライル（それから又エマーソン）に負ふところ多いと自白したかの科學者は又此ことについても甚だ公平に穩當な意見を述べて居るが、實際其言つて居る通り「野邊の百合の花は植物學上以外の或る價値を僕等に呈じて居る――之を見て忽ち閃く心の電はやがて

"Solomon in all his glory was not arrayed like one of the lilies."

と叫ばしめる」ではないか。「谷の底から響き渡つて來る村の鐘の音は小山を越えて行く旅人には音の學以外の價値が感ぜられる」ではないか。「薔薇の樣な奇麗な色で皚々たる雪を包む入り日の光は光學上以外の價値がある」ではないか。「あまた星のきらめく大空は星學上以外の價値がある」ではないか。左なり〳〵（僕は再びしかく叫ぶ）。心身の完全な發達のためには、どうしても美育の必要をも感ぜずには居られぬ。

尚又眞理の研究が美の鑑賞と如何に干渉するかはダーウキンの自傳に其說明を求めやう。專ら遊獵遠足採集を樂みとしたあの大生物學者の少壯時代は又一方に於てミルトン グレー バイロン ウヲ

ーズウヲース コルリッヂ シェレーに親み、沙翁の史劇に隨喜したのみか、繪畫、音樂、並に風景をも樂むだ時代であつたそふな。中にも自然の風物を愛する念は中々切であつたらしい。が併し晩年の彼が訴へて居る自傳の一節はあはれ實に次の如く讀まれるのである。

「わが心は事實(ファクツ)のあまた蒐集せられし中より一般定律を挽き出す器械の一種となりしが如し。されど何故此事が腦の各部中高き趣味(テースト)の依て以て生ずべき部分のみを畏縮せしめしやを知る能はず。思ふにわが心に比してより高く率ゐられ又はより善く組成せられし心を有する人は恐く予の如き嘆を發するを要せざるならむ。もし予にしてわが生路を再び繰り返すことを得るならば予は每週少くとも一度は詩を讀み樂を聽くを定めとしたりしならむ。蓋しかくの如くせば腦の現今衰微せる部分をも働かしむることを得て常に之を活動せしむるを得しならむか。」

と、而して彼は之を結ぶに次の句を以てして居る。

"The loss of these tastes is a loss of happiness, and may possibly be injuriaus to the intellect, and more probably to the moral character, by enfeebling the emotional part of our nature."

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

科學者の口から發せられた此嘆辭は僕等の箴とすべきものではあるまいか。

僕は必しも月といひ、花といふまい。綠がゝつた青い丘、丘を圍むで居る野、野に流れる清水、水

に浮む木の葉、さては此あたりを包む一抹の淡靄何が美でなからふか。自然！　科學者の開拓すべき荒れた野も此處に連つて居れば、詩人の謳ふ可く、畵家の畵く可き好材料も此處に充ち〳〵て居る、而して科學者も亦此自然を謳ひかつ畵くに何が妨げ樣ぞ。否どうしてもしかせなければならぬのである。

そして之を謳ふにも、少くとも僕は露に此世の無常を寄せたり、花に人生の果敢なさをかこつたりする流れをくむまい、僕の自然の美に打たれて浮む感想はしかく枯淡なものでないから。それかと言つて僕は「今日は此處の花、明日は彼處の花」と飛び歩く（飛び歩くのは可いが人生の半影しか見ない樣な）風をも學ぶまい。ハマートンも言つて居る。

"Life is a most precious boon, because it offers all the joys that the poet sing; life is not worth living, because it exposes us to all the evils that philosophers deplore."

天は長に、地は久しく、日は今日暮れて、また明日あける。

僕の了解する意味に於て靈魂は不滅かも知れぬ。併し所謂永生なるものを信ずることは出來ぬ。

人生は無限に永き時に比べて、朝顏の露の果敢ないのにもまして、あはれなものであらふ。

併し僕は遂に人生五十年を嘆じまい、又道の遠きをも悲むまい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

僕は眞と美との間に圓滿な調和が出來たら嘸ゆかしいだらふと思ふ、風に吹かれて散る白露を見て

僕は單にサーフェーステンションの理を考ふるのに止むることは出來ぬので………。

今僕は只智的向上心と美的鑑賞力とが相携へて、進むことの必要なことを認め、其美しいことを信ずる外まだ人生及び宇宙に於ける美の位置を研究したのでもなければ自然科學の眞理が人類の美的感覺といかに關係して居るかをたづねたのでもない。

併し自然科學に造詣深かつた一學者を、他の人ならぬ詩聖ゲーテに見出し得た僕は暫し筆を擱いて、莞爾たらぬを得ないのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

僕にはダーウヰンを想ふ毎に之を想ひ、之を想ふ毎に又彼を想ふ自然を謳つた詩人がある。どちらも略時が同じで、其上彼も八歳あまりで慈母に別れるし、之も同じ年頃に同じ悲みを嘗めた、共に愛に富むだ姉の慈みを受けて人となり、慰藉も、鼓舞も之れから得た。只一方は眞を研究し、一方は美を謳つたのである。それはそも誰であらふ。

僕はダーウヰンを稱へた同じ筆で、竊かに僕が座右の銘とする、此好みある詩人の一小詩を擧げて此篇を結ばふ。

"Small service is true service while it lasts,
Of Friends, however humble, scorn not one:
The Daisy, by the shadow that it casts,
Protects the lingering dew-drop from the sun."

吾人の自然觀

あさひ生

蒼々たる穹窿に、白雲一片西の山の端より泳ぎいでゝ、ふわり／＼と搖ぎ出す時、Ruskin の心は如何ばかり動いたであらうか。しかも此の宇宙の大觀に依つて、無限の感慨にうたれた者、唯、一人のラスキンのみではあるまい。世の詩人、世の美術家、あゝ、いかに此の陸離たる光彩に想を潜めたであらうか。夕榮、み空に燃えて青く、赤く、紫に、横雲が一朶、忽として躍り出たとき、綿の如く、土の如く、巨人の如く、處女の如く、山かと見れば、また河のやうで、青いのは渺茫たる大海の如く、白いのは蕞爾たる孤島のやうだ。この奇觀を仰いで驚歎に堪えなかつた者はラスキンや、詩人や、美術家のみではない。筒井筒の振分髪の小童がいと小さき胸を躍らしたのも、この自然の力ではなかつたか。やがて、黄昏は山も河も罩め盡して、夜の黑幕の降るをり、一つ、二つ、三つ、遂には滿天花を散らしたらんが如く、暗い／＼この闇の裡に、罪惡に充ちた人の世にもなほ希望の花は咲いて居ると、詩人は叫ぶ、星の子に啓示があると歌ふてをる。が然し、樂天だとか、厭世だとかいふ面倒な考のない、極固い意思とか、深い觀察とかいふものもない、恐らくは虛心であつたらう、我も無けねば人もない、幼かりし吾、はたまた多分、人も、たゞ心なく大空を打ち仰いで、一つ、二つ、と現はれ來るのを數へたこと、幾度だつたらう。美術の上に自然の色彩がなす功果は少々ではあるまい、而して又詩歌に於てもさうである。實に詩歌は觀念の對象で人の觀念は自然

により、左右され、支配されて、決して典故とか模型とか云ふやうな物の中に入れて、之れを律することはできぬ。「生とし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」とは紀貫之が萬古不朽の斷案ではあるまいか。天才の發纏は繩墨の範圍を脱して吾人を美妙の聲裡に、慷慨の絶叫の裡に、感憤の涙に、また讃美の樂の裡に誘ひ去るものである。勤勉にあらざる天才はなしと、而して天才なる者が彼の生れながらにして偉大なる巨人なりとすれば兎に角に、天才は修養と勤勉とを要せぬと云はばいざ知らず。然らざる以上は自然の力は確に天才を作るに於て十分なる動力を蓄へしむるものだ、と余は信ずるので、今更ならず、宇宙萬有の如何に意味深きかを思ふのである。

人の觀念は自然の力に左右され、支配さるゝものである、が決して放逸とか無責任とかいふやうに勝手に動くべきものではあるまいと思ふ。自然の力が自覺の上に立てる如く、吾人の觀念は又自然の力に倣つて各ゝ自覺の上に發現せしむべきものではあるまいか。春色駘蕩たる三春の行樂、いつしか去つて、紅花白花風に飛び來るとき、地に遺したる一輪の櫻、自然の力は如何に巧妙に、しかも緻密に、嚴正に、組織的にこれを造れるだらうか。花より頭を出す數多の雄蕋、花心に謙遜に居する雌蕋、花は紅にして甘露を宿し、香は梅のやうではないが然し花香隱約として衣に薫ずるの淸は確かにある。是等は皆意味あつて、彼等は自覺によつて活動してをるのだ。啻に櫻のみではない。一片の蕚、一本の花軸、ありとある、器官、構造、尙は詳細に觀じ來れば、一樹、一花の種類を異にするに從ひて、種々な特點や、義務や、自覺の上に生活してをるのである。花粉粒の構造、形狀、

種子の種類、其の撒布の狀態は、唯、一つの小さい草花の類と雖も、其の他種々の點に於ても、決して等閑に造られたものではない。夫れ〳〵意味がある、本分がある、職務がある。而して彼等は各自覺の花で、莖である、自覺の草である、樹であるので、啻に一河の流、一樹の蔭に生ひ肥ちて露の命を長ふる一小草一小花のみではない。自然は偉大なる頭と、細微なる注意とによつて、萬物の生命を支配してをるので、彼等萬物は自然によつて己が本分を知り、己が自覺の上に活動してをるのであるまいか。狂風一陣、殘春の香を捲いて去るのも、秋風、颯と桐の一葉を樹梢に拂ふのも無意味のものではあるまい。

魯國の詩人は歌ふてをる。「人類の最後の一人が此地球上より消滅する時、木の葉の一片も其の爲めに戰がざるべし、」と、あゝ自然はしかく寥々たるものであらうか。しかく慘怛たるものであらうか。しかく冷やかなものであらうか。否、否、吾は自然を愛す、汝は冷やかなるものでは決して無い、熱い〳〵淚は世にあるではないか。溫かな愛は汝にあるではないか。汝は寂寞たるものでも慘怛たるものでもなからう。美はしい音樂は汝が奏する所の者ではなかつたか、淸き天地は汝の裝飾(よそをひ)ではなかつたか。吾はこの樂しき汝を愛するものである。

テニソンは歌ふてをる。

Spring and Summer and Autumn and Winter, and all these revolutions of earth;
All new-old revolutions of Empire—change of tide—What is all of it worth?

What the philosophies, all the Sciences, poesy, Varying voices of prayer?
All that is noblest, all that is basest, all that is filthy, with all that is fair?
What is it all, if we all of us end but in being our own corpse-coffins at last;
Swallow'd in Vastness, lost in Silence, drown'd in the deeps of a meaningless past?
What but a murmur of gnats in the gloom, or a moment's anger of bees in their hive?

* * * * * * * * *

Peace, let it be! for I loved him, and love him forever: the dead are not dead but alive.

(ALFRED TENNYSON)

あゝ、卑しき者も、貴き者も、汚れたるも、清きも、名譽も、恥辱も、世の總てが墓と終るならば、吾人が生を此の世に享けたるは、はた、何の爲めであらうか。食へよ、飮めよ、明日（あす）は死ぬべければなり。との理想を實現せんが爲めであつたらうか。否、自然は何と汝等に敎へたであらうか。余はもとより永遠限りなき靈と、唯一の神とを信ずる者であるが。然し此の詩は無限大を歌ふたもので、神の觀念によつて歌はれたものであるが、今は、玆に、余が信仰は兎に角に於いて、神なるものも考へずして、而して自然に對して公平なる判斷を下すに於ても、亦、テニソンのこの詩が眞理であるといつても誣言ではあるまいと思ふ。余が信仰以外に神の存在以外に於て、自然は愛すべきものである、而して自然は吾人、否、萬物を支配し感化しつゝあるものだ、といふことが眞理で

ないだらうか。

「吾は人を愛する少なきにあらず、天然を愛するの多きなり」とバイロンはいつた。余は彼れに同意するものである。

「月影さやかに照りそふ此の湖畔に、銀光の瞬く影は靜かなる波に遊べり。されどこの靜かなる、安らけき光の裡に、猶、激するは人の心の卑しきものよ」　（スコット）

さなり。自然は靜かである。が然し生命がある。

チンテルン精舍數哩の上流(みなかみ)ワイ河畔に自然詩人ウォヅヲースが歌つてをる

「今や自然を觀る事を學びたり、今や人情の幽音悲調に耳を傾けたり、今や落日大洋青空蒼天人心を一貫して流動する處のものを感得したり。かるが故に我は今尚ほ牧場森林山岳を愛す。綠野の上、窮天の間、耳目の觸るゝ處の者を愛す。されば是等は皆我が最純なる思想の錨、我心、わが靈、及び凡てわが德性の乳母、導者、衛士であつた。」

この詩人が幼少より山河に抱いた其の詩趣は、折にふれ、時によつて、異なつたであらう。が然し乳母にして導者、導者にして而も衛士であつた山河は、彼が德性の上に必要なものでは無かつたらうか。又吾人が愛すべき親むべきものではないだらうか。

「我は慈母たる此自然が無害の情慾として賦與したる者をば何をも肯て排斥せない」

Ich tadle nicht gern, Das immer dem Menschen

Für unschŭldiche Triebe die gute Mutter Natur gab.

(Göthe)

萬生に活動せる自然よ。あゝ、彼の山は翠に、此の水は清し。鬱勃たる山は人の生命にして、清き流はやがて幾千萬の生靈が、朝に嗽ぎ、夕に足を濯ふ處ではないか。花上に飛ぶ蜂蝱、花下に戯る燕雀、あはれ自然の生命をうけて人の大平と世界の平和との爲めに、自個の義務に安じて、一語の不平なく、一言の歎聲なく、宛轉なる玉音、粉々たる音樂を奏して、一樹を去つて一草に來り、花より花と、滿山を翔り、萬谷を渡つて、いくのは其の自覺の上にある者ではあるまいか。洛陽の紅、移つて、江南に生じ、年々歳々、歳々年々、世界の面目は改まつてをるのだ。春去り、秋到り、燕來雁去、花や紅葉と、自然は瞬間も猶豫するなく、遲怠することなく、忠實に衣を更めてをる。蠢蠢たる地中の一蚯蚓、しかも、復、彼等は暗い冥途の下に、安らかに其偉大なる事業に務めつゝあるではないか。

莊生は「萬昌土より出でゝ土に還る」、といつてをる。卒爾として自然より生れ、又忽然として北邙一堆の土に歸すと、然り、然れども人の一生が土より出でゝ又土に入る、と煙雲過眼視さるべきだらうか。自然より生れ、自然の裡に死する、いな、歸(かへ)る、吾人が、果して夢の如く、幻の如く、醉生夢死すべきものだらうか。吾等は正に自然から出た、而して、又永遠に自然に歸る者である。然らば、自然に適歸して、自然に對して吾人が自覺の觀念を一層深くして行くべきではなからうか。

雜報

一言を遺す。

會誌が初めて呱々の聲を擧げてより、卷を新にする僅に三、すでにこゝに納筆の辭を認むるに至りぬ、予輩はその初め筆を本誌々上に取るや、尙多少の豫望を屬して、菲才尙よく會誌の編纂に從はんと盟ひぬ、さるを何事ぞ、歲月は徒に流れて、事常に志と違ひ、未だ以て成功の一分をも得ること能はざりしは深く顧みて忸怩たらざるを得ざる所なり、吁今にして思ふ、魯鈍予輩が如きを以てして會誌編纂の任に就きしもの、既に〳〵其の當初に於て誤れり、予輩は尙未だ世故に慣れざる一個學窗の白面兒而已、何を期する所ありてかよくこの任に當りしか、只それ岡野主任のより〳〵予輩を督勵し給ひて、原稿の取捨添削より其他萬般の事務に涉りて、常に予輩に訓へ給ふ所あり、かくの如くにして予輩は尙よく甚だしき失態を招くに至らずして、今日に至りしなり、予輩はこゝに謹んで先生に謝せざる可らず。

會誌の三號を通じて筆を取りしもの、多くその人を同じくし、操觚三百の靑衿中尙兩指を屈するに及ばざりき、かくて投稿の少なき遂に予輩をして敢てその餘白をうづめ、いたづらに不文を諸君の面前に曝らすの失態を招きぬ、吁諸君よ、諸君は何故に敢て自重してわれ等をしてその卓拔なる抱懷に耳を傾くるの榮を得せしめざりしぞ、予輩頗ぶるこれを怨とす、聞く大鵬の飛ばんとするや、先づ其の翼を收む、而かも一度飛翔せんか、扶搖に搏ち羊角して上る者正に九萬里なりと、思ふに卿等實に生れて大鵬の志あり、其の言を苟くもせず其の辭を輕々しくせず、正に大翔の蓄ねあるものなるなからんや、吁されども予輩は頗ぶるこのとあるを怨とす、よしや斥鷃となりて蓬蒿の間に翺翔するは、諸君の以て潔しとせざる所とするも、靑春の胸中必ずや一片の主張精神の燃ゆるあり、發して諤々風發の文となり、錦心流露の詩歌となる、そも何の妨ぐる所ぞ、予輩は毎號投稿の寂寞を

覺えて少なからずこれあるを怨としぬ、若しそれ吾人が翹望して幾度かその主張を聽かんとせまりしもの、某兄あり某君あり、而かも遂にこれを聞くを得ざりしもの、怨何者かこれに過ぎん、かくの如くにして予輩は遂にこの卷を終らざる可らざるに至りしなり。

予輩は此の期に及んで最早多くを言はず、只それ靜かに未來を翹望して、幾分の成功を會誌々上に收めんこと、偏へに予輩の願ひ而已、乃ち來ん人に一言を遺す。

雜報

校歌披露に就て

校歌募集の結果、應募歌中の秀調佳什數篇を、拔き、尙其の內より彼を取り之を補ひてかたみに精と粹とを集め、これに大野木、原兩敎授の添削彫琢を加へられたるもの、乃ち卷頭に揭ぐるものなり、吾人は當初校歌募集の主張に對し、こゝに適好なる名篇を得て、衷心頗ぶる欣喜の情に堪えず、すなはち募集中の佳什一篇をとり、下に揭げて靜かに其の風懷を忍ばんとす。

○　　　　小林生

(一)仰げば操山月さえて、
平野はとほきしづけさに、
兒島の海は夕がすみ、
玉をうかぶる旭河。

(二)身は青春の血に燃えて、
鄕關の山はるばると、
希望の海に舟出せし、
健兒のむれをこゝにみる。

(三)あした庭球空に飛び、
夕竹刀の音たかし。
書籍のちりをはらふまに、
春秋三たび夢なるよ。

(四)智惠のとばりをかゝげては、
宇宙の秘密あらはして、
眞理の光くまもなく、
てらさでたれか止むべきや。

（五）德の寶石みがきては、
恩惠の門をうちひらき、
貴き平和のよろこびに、
社會を光明にみちびかむ。

（六）丈夫の意氣は天を衝く、
苦難の山はたかくとも、
眞摯の精神かたくとり、
ただしきみちを昇りなむ。

（七）世の戰はしげくとも、
雄雄しき不拔の力もて、
堅固の城にかちどきを、
あげずて誰れか止むべきぞ、

（八）翼やすめて大鵬の、
いま勤勞にいそしむは、
やがて圖南の志、
飛ぶとき天をつかむため。

（九）あゝ美はみつる花園や、

うちには美妙の樂の聲、
無限の幸を身にうけて、
高き理想の影追はむ。

（十）昔時偉人のあと多き、
こゝよ備前の名も重き、
烏城の城はとこしへに、
わが追懷にのこるらむ。

○　　た　て　み

帝都は遠き吉備津野の
山紫に水青く
見る目さやけき山河や
今し翳せる六稜の
高き光りも照り映えて
美はしいかな此天地、
前に流るゝ旭川
背後に仰ぐ操山
水にはやどる永遠の

高き理想も忍ぶべく
松にはうつる千歲の
遠き榮も想ふべし、

春さり來れば潮湧く
船路はいづこ南の
秋は月澄む兒島灣
浪穗蹴立てゝますらをが
こゝろ錬ゆる荒海や
水島灘も遠からず、

あゝ形勝の山と水
こゝに集へるますらをは
朝晨理想の影を呼び
夕べ希望の夢を追ひ
この六稜を仰ぎつゝ
今こそ起てり勇ましく

あゝ世は茲に更まる
二十世紀の朝ぼらけ
吉備三州の天高く
この六稜の照る處
雄々しき聲に唱ひつゝ
今こそ起てりますら男は

梹面棒。

○不安と懊惱と懷疑とのわれなる哉、悲憤と冥想と煩悶とのこの頃なる哉、又しても人生の眞を尋ねんとして深く迷妄の壺中に入りぬ、幾とせ昔の友の小影に接して思はずわれの老ひたるを知りぬ、獨り熟々記憶の古へをたどり見れば、あはれやわれは今茲に十幾年の學窗の身なり、而かもその間遂に吾人が本然の自我、人生の眞意氣に到着するに及ばずして、只徒らに空中に蜃氣樓をゑがく、そもや斯の如くにして多年の研鑚は何んする者ぞ、幾年の學究はた何する者ぞ、されど又翻つて思ひ見る、眞個這般の消息を闡明せんこと、これやがて吾人が畢生の探究を償するものにはあらざるか、よし、さらば徒らに幽涙の文字をなすをやめて、されども、おゝ歲月は轉々滔々として流れてやまず、青春の期

もあはれや去りてみす〳〵すでに暮れなんとするか、顧みて頗ぶる痛心に堪えず。

○試みにわれをして預言者の如く語らしめよ、われは叫ばん噫爾等は禍なる哉、靈性の活動なくして徒らに神を議し天を語らんと擬する者よと、爾いかんぞ神を知り天に近づくを得ん、おお清く大なる蒼穹よ、われ爾に接する時、わが身内打をのゝぎ、わが心打震ふ、爾とわれと語るに口なく叫ぶに聲の通ずるにあらず、われと爾と只相對すればやむ、而してよく爾はわれを救へり、われは爾の心を讀むことを得たればなり、噫靈性の活動なくして徒らに天を語る者は禍なる哉。

○吁今にしていかんぞわれにこの慨なからざるを得んや、眞にわれは幾度か繰り返しけん、自我を顧みて自我の哀れむべきを知りぬと、實にや自己を顧みて自己の哀れむべきを知らざるものあらざるべき、只それわれに許せよ一片追興の好尙を、われは只これに隨ふて適かん而已、さなりわれは幾度か嘆じぬ、其所に萬有の秘奥を闡かん大詩人を得ず、そこに人生の光明を劃せん大哲學者を得ず、さては必ず出て必ず來らんことを告ぐる預言者の一人をも得ざるわが文壇は、遂に吾人が永住の境地に非ずと、然り、誠に然るなり、只顧みてわれに一片の意氣を存す、山越ゆべく水渉るべし、おゝその意氣よ、一度呼べば正に雲釀の慨あらん、あゝ靜かにかかる空想に耽るの時、人事眞に快い哉。

○才情燃ゆるが如き一個熱烈の詩人を當代に求めんことは難し、されど學究闡微以て一生の能事とするかの瑣々者流は遂に僂指の繁に堪えず、われは必ずしもニーチエの超んを說かんと擬せず、よしさらずとも胸裏一片の精神を把持して、自己が理想に向上する底の人を要するや切なり、思ふ半百の人生なり、汝は只汝が一生を擧げて外界の轉運に投ず、以て心安しとなすか、自己を如何する、自我を如何する、自己を叫ぶの聲は常にわが胸底に沸々たり、然りわれはいかにするも自己本然の偉大を伸張せざる可らず、宇宙萬有の總てを擧げて自己に隷屬せしむるを要す、自我を沒して爾はよく自我生存の意義を認むるか、いふ勿れ自我の偉大を放吼す

るそも〳〵他を奈何すると、われ自我を說かん、とす、自我直然の偉大なる伸展を叫ぶ、我と他と何のかゝわる所ぞ、自我既に萬物の上にあり、而して自我を離れて萬物はなし、吁我はすでに爾く偉大なり、我なる一大人格の前には總ての物皆屈服す、偉大！　眞に偉大なる自我!!

○春光とくるが如きもの、求めてこれをこの頃に見るかな、風烟の情烟霞の心塗湧さながら泉の如し、任他人生の歡會盡くるなきの時を何時とかなす、青春の血潮は燃えて其處に歌あり、戀あらん、身はこれ春光のそれにも似たる人生の春、試みに讀書感興の心を轉じ、あらゆる浮世の桎梏を脫し、自然の偉大なる景象に滿腔の理想を語る、快何者かこれに如かん、かくては驀然筆を呵して感想を直寫し、快を呼んで落筆想を遣る、おゝ人生の歡會こゝに極まれるを思ふ哉。

○人の世に宗教なるものあり、はかなき人生の迷路に立ち、安息を希ひ、慰藉を思ふ、然かも只これ無意義なる而已、人生の蹉跎身世の不如意に泣き、煩悶、懊惱、嘆嗟、困憊、仰いで訴へ俯して憂ふ、乃ち一個超越の神を思ひ、大慈大悲の神の御影に渠等や安息と慰藉を得んとす、人の世の宗教は尙且つ斯の如かるべきか、われ乃ち首を左右にして曰く、あらずあらず、そもや億萬の人の子の世路に就く、水や空なる船路のはては只これ黑雲のとざせる所、一基の燈臺一道の光明、これなき時に舟人いかに心騷がん、思ふ、宗教は遂に人生不斷の燈明臺に外ならず、靈性の熱焰一度胸に燃えて、美はしき神の榮光と融合し、茲に始めて燦爛たる道德の神秘を握る、彼れの意志や百錬の鉄よりも堅く、渠の信念や純なること玲瓏朝露の如し、美！

○われは何故に存在するかを尋ねざらん、われは存在して勇猛精進することのみを知らん、われは顧みて自己存在の意志を構ふ事能はざればなり、否自己存在の意志ある可き筈なければなり、吾人が生活は生存の生活にあらず、吾人が食料は生存の食料に非ず、吾人が生活は向上精進の勢力なり、吾人が食料は勇猛奮進の原動力に外ならず、吁自己の存在は只これ猛烈なる一大勢力而已、爆發万丈の大紅焰は乃ち吾人が勢

力を示す。氣宇や浩然、思はずもわれ天を仰いで長嘯これを久ふす。

○行手に横はれる運命の障礙、これと健闘する偉大なる勇士、！　惡魔の利劒をも微笑を以てむかへんとする偉大なる勇士、！　眞にわれ等をして想像せしめよ、這般の英雄を、這般の氣魄を、爾の意志は鉄なりき、爾の渾身は力なりき、實にや一管の彩筆に百歳の美觀をとゞめんそれの木だくみは、よしや斷草の内に悲愀ののゝ音を傳へんとも、澎湃たる激浪に萬古の巖壁は一粒の砂となるとも、おゝこの心よ、この意志よ、爾の氣魄と爾の精神と、そは永なへに勇ましき濶歩を以て吾人に見ゆ、快哉、總身に力を覺ゆ。

○詩美の飄韻を掬し、眞美の奥龕に宿れる微妙なるある物を捕捉したる時、身は飄々としてかの白雲の徂徠に寄る、吁清き野水の韻を掬し、誰ぞや、人生の快樂を歌ふは、詩人！、さなり爾に榮多かれよ、さるにても冷やかなること死灰の如く、ものあえかなる萬有の眞美を感ずる情なき者は幸うすきものよ。

○想像の醇化！、そもやこの者を何とかなす、坊は思ふ、吾人の精神作用より想像を除去する時に殘る所は幾許ぞと、最も多く笑ひ、最も多く泣き、最も多く悲しみ、最も多く喜ぶ、青年の時期は心的狀態活躍の時期なり、かくてはまつしぐらに天地萬有の疑團解決に急也、人生の眞意氣は奈何、宗敎の存在將何とかなす、神は何、國家は何、人類は何、彼等はその解決を求むるに急也、さるを青春燃ゆるの想像は、遂に直然疑團を氷解し去らんとして止まず、時には突飛なる斷案の下に自得直截獨り思ふて獨りうなづく、危險何者かこれに如くべき、われ今にして思ふ、予輩如何んぞかの天を仰いで穴に陷るの哲學者たるを敢てせんやと、只夫れ想像の醇化は吾人の切に望む所而已。

○理性の判斷によりて吾人が思索に耽るの時、尚よく感興の湓湧を認むるか、曰く然り曰く否、何が故に然りといふ、吾人は理性の力によりて思索の途中常に胸中に微妙なる感動の働きを覺ゆれば也。或はこれ智的向上心に伴なふ快感なるものか、然れどもこれや本より微動而已、何

が故に否といふ、いふをやめよ、直覺はこれ感興澄湧の一大原素也、直覺によらずんば遂に詩もなく歌もなき也。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

○吾人のさきに小言をなして自我の偉大を認んとするもの、必ずしも架空の言を構へて一時の快を呼ばんとにはあらず、吾人は只吾人が前程の歩調を始めんとするに當り、必ずや先づ自我を顧みて「自我そも〳〵爾は何者なるか」との問題を解決せんとするに急也。すなはち再び茲に吾人が感想を披攊せんと欲する所以にして、或はかの頑者思想界に一潮流を劃したる自然主義？なるものゝ如何に就ては、われ必ずしも説かず、われは只自家本然の管見を直露する而已、吾人の說く所にして誤れるあらんか、幸に諸卿垂敎に吝なる勿れ。

顧みればわれや幾度か自然渇仰にそゞろ心を燃やしけん、呼されどもわれにこの我儘を許せ、よしやそはいかに無味なり枯淡なるにもせよ、學課とあればそれにも幾分の時間と腦力をば拂はざる可らず、身邊を顧みれば清新の氣、飄韻の面影もなき殺風景極まる寄宿舍の窻に倚りて、思つく然としてあはれその日〳〵の大半は書籍堆裡に消費されつゝある吾人にして、時に棵岑に攀ぢ、兒灣に浮び、あはれ〳〵の風露たとしへなき自然の景象に接し、遂には自然渇仰の嘆聲を發するもの又所以なきにしもあらざるべきか、任他、誠に自然の襟懷が藏する籬落微韻の風情を掬して、宇宙の間天地の載、善美の太源に道交せん事、いはゞ吾人が本性の中、其所にも同じ善意識と美意識とあり、これのもの兩々相融合するにより、吾人は爾く天地の美と萬有の眞に風露たとしへなきを味ふにはあらざるべき乎、されど尚一歩を奧にして、試みに理性の判斷によつて一度思索を構ふることせんか、いはばこれ吾人が意識の自然性（假りにかゝる名を用ゆ）に加ふるに、あえかなる想像の力によりて、吾人は只冥々の中に漫然自然の妙韻に接するを得る而已、吁今にして自から借問す、崛爾はよく漫然として自然性が齎らす賜賚を容れんとする程爾く寬懷なるを得るかと、われは寧ろ積極的態度を以てして、少なくとも吾人の立脚

地を明にせざるを得ず。

今の時ルーソーや老莊一輩の言にかぶれて復古自然主義を稱道するの愚を學ぶものもなかるべし、若しそれゴルキーが野獸的自由主義といふ、これにして猶且つフォーマをして「吾が生活とは何ぞや、そは意味なき也、吾れは只一人生活す、吾れは何事をも解せず、然れども吾れは何事をか望む」と叫ばしめしには非ずや、われは最早かくの如きに對しては、一顧の勞も拂はんの遑を有せず、直ちに去つて吾人が標榜して以て吾人の前程を劃せんとする自我發展と自我の偉大とに就いて少しく諸卿と共に研究する所わらしめよ。

吾人は稱して自我の偉大自我の發展といふ、然らばそも／＼自我とは何ぞや、これ當然吾人の解決を要する者也、乃ち曰く、自我の發展自我の偉大とは、自我自然性の發展自我本性の偉大なり、然らばその自然性とは何ぞや、乃ち曰く、われのいふ自我の自然性とは自我の全意識上に於ける善美なる特別狀態なり、而かもそは永劫滅せざる一大精神也、而かもそは活動向上の一大氣魄也、而かもそは萬有の總て以上に超絕する絕對精神にして、これなき時に萬有は死し、これありて始めて萬有吾人の眼前に活躍す、これなき時萬有も無意義にして、これある時萬有は吾人の資料たる可し、さなり、斯の如きものすなはち吾人の所謂自我也、さなり、この偉大なる自我の發展は吾人が終生を通じて、旗皷堂々步調を整へて健鬪濶步せんずる所にして、今は只徐ろに初陣の勝鬨を擧げ、靜かに前程を祝せんとす、若しそれ同志の連判狀を作るとならば、われ亦署名して拈華坊とでっかく記さん、快哉。

（以上三、拈華坊）

我觀漫錄

○『人生五十耻無功』と、古聖人を警むるの言や、切なりと謂ふべし、一片稜々たる奇骨も蹉跌轗軻幾度か重り、張りつめし勇氣も自ら弛みては、亦當時の片影をさへ止め得ぬ今の世、況や言行は互に相背馳し、心の非を掩はん爲めに強て邊幅を修むる底の鼠輩、何ぞ一度思を是に及すべ

けんや、而して今や社會、此鼠輩多きに苦しむ、世は益溷濁して國人を擧て其渦中に投せずんば止まざらんとす、危哉、於是余は蒲生君平其人を偲ばずんばあらざる也。

○人生の意義、詮ずれば只夫れ健鬪に在らむ乎、正義の花粉より薫りいでたる雄心、之れを行ふに何の憚る處かある、障碍は我れの介意する所にあらず、我には天賦の本性あり、移し難き勇氣あり、飜し難き志あり、絶息せば則止む、苟も血あり、骨ある躰軀、何れの所にか鬪ふて不可ならむや、人生の意義!!　健鬪!!　この絶高絶美の眞義を悟り得たる余は幸福哉。

○一連金文字燦爛として人生の純美を說て曰く『朝聞道夕死可矣』と、哲人たるもの〻心情を吐露して些の遺憾なしと謂ふべし、噫醇哉言や、さるにてもこれのみにては人生も餘に枯淡也、餘に窮窟也、殺風景也、吾人の主張せし人生は如斯沒趣味のものにはあらざりき、吾人の要求せし人生は如斯窮窟のものにはあらざりき、野に山に咲きほこる床しの花、その濃艶の色、芳芬の香、よし吾人の胸に湛ゆる詩泉に一點の露を滴らすとも、之を手折り之を接吻し、之を懐に抱かずんば、何やら飽き足らぬ氣持するは人情の常ならずや、況んや吾人萬物の靈長として、他の蟭類に一頭地を挺く所以のものは心理的活動の一點に存するをや、奚んぞ本義を沒却し而して又看すみす一生を淋しく過さんや、活動は吾人の生涯を通じて經緯をなすもの、若し花々しく活動せんと欲せば、只夫れ健鬪にある哉、只夫れ健鬪にある哉、於是大乘實相主義は吾人を億逞せしむるに足らず、小乘無我論に至つては殆んど迂愚に類す。

○余を以て宗教を非認するものと誤る勿れ、そは寃罪なれば也、宗教は宗教として別に存在せしめよ、宗教は生靈の與論者、與慰者として、鹿爪らしく云へば社會秩序の保障として存在せしめよ、然れども宗教を以て直ちに人生に適用して毫も間然する所なしとせん乎、人生なる枷鎖は人情を拘束し去つて、吾人の一生は秋風蕭條の悲劇となりて終らん而已、況んや宗教の教理を捕へ來つて之を人生の意義視するに至つて其の何物たるを知らず、其の弊害は忽ちに悲觀

し、忽ちに樂觀し、一も其の心髓を得會することと能はざるに在り、宗敎は至善至美のものとして、平和の擁護者として、自ら人生と二途をなさゞるべからず。

○一浮一沈は人生の常態也、是をもて往々人生の意義を進取、退嬰の二要素に區分することあり、然れどもこは大なる偏見たる也、こは單に皮相的眼識を以て人生を說明せしに過ぎず、人生の意義は別に在て存す、余をして再言せしめば人生の意義は絕對的進取に在りと云はん、

○首陽山に餘命を晦して終生周の粟を食まずと誓ひし伯夷叔齊が『登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸、于嗟徂兮、命之衰矣』と歌ひしは飢ゑて、辭せざる、鬪ふて、尚且屈せざる二子が高節、凞然たる風采を認めずや、人生は行樂のみ、只夫れ樂まんのみ、役々矻々として臭骸の營む所、我に半錢の價値を認めずと叫びし、伊達政宗が其心の半面に遠く海外に雄飛するの健懷を有せしとは誰か思はんや、觀じ來らば人生の事自ら明瞭也、健鬪は人生の花也、健懷は人生の根蔕也。

○『浮草や今日は向ふの岸に咲く』、浮々泛々、寄るべ渚の捨小船のそれと一般、磊塊胸に橫はる七寸の腸、一片の精髓を認め能はざるに至ては寧憐むべきの至ならずや、朝に大家の論文を讀て、夕に頑老の前に誇張し、昨名士の所論を聞て、今衆庶の前に巧に口吻を擬する所謂口耳四寸の徒、古來社會を繚亂し、國を荼毒するもの、此の徒輩にあらずして何ぞや、

○人あり悔て曰く、浮萍的と輕薄と苟安とが如何に己を蠹毒せしかと、嗟す、春曉惰眠を嘲る雀の痛聲を小癪の奴と立て窻に倚れば、あはれ庭上の淸露一滴の名殘なく消亡ける悲しさよ、玆心寸斷、腸九回するも及ばざる也、半生の心事已に非也、沈考一番、何ぞ猛然立て前非を挽回せざる。

○人若し生の長壽ならんことをのみ希はゞ、そは大なる謬ならん、亭々の松、綠蓊の吳竹と擇ぶ所なければ也、茫々たる長壽は寧ろ朶々たる一瞬に如かざる也、人生の要求は其の長短にあらずして、質量の寡多に存す、於是余は浦島太

郎を天とするの至當なるを知る、而して又必すしも彭祖を壽と言はんや。

○質量の寡多とは活動の寡多を云ふ也、朝に秀麗たる芙蓉の峰を仰て高傑雄偉の氣象を求むべしと唱へて尙且求むることを敢てせず、夕に關山正に暮なんとするを見て轉た人生の墓なきを三嘆し、而かも唯嘆息するの徒、素より相語るに足らざる也、滔々たる河水も墓なき朝露の玲瓏たるに如かざるを察せば、人たるもの、一片の感想なからんや、偉大なるは精神の活動に在る哉。

○佛教の人生觀は餘に厭世也、基督教のそれは餘に樂天也、此に偏せず彼に倚らず行て撓まざれば人生の事遺漏なしと謂ふべし。

（ま、も、生）

濟美旗競走記

濟美旗は高く春風に飜へれり、一周三百碼にも餘れる柵を圍みて、犇々と寄り集へる觀者は肅として眸を凝らしぬ、

時はこれ四月三日の午後將に二時、洛東吉田山下の京都帝國大學陸上大運動會競技場裡、今し風動いて雲將に急ならんとす、

突如號聲は響き渡りぬ、驚破や砂を蹴つて驅け出づる猛者六人、見よ疾脚一鞭先づ衆を拔くものは誰ぞ、白か、青か、あらず赤！これ我が井上撰手！發止出發點を離れて未だ十歩ならず、柵角を廻らむとして他校の撰手、一人が上に又一人、もんどり打つて一輾びして遲れじものと又馳せ出す、

百碼！二百碼！滿場はどよめき立ちぬ、聲援は次第に盛んになりぬ、

あはれけふ此六百碼の濟美旗競走に、名譽ある月桂冠を戴かむものは果して何校の撰手ぞ、見よ、我が撰手の一人は旣でに群に先んじ、他の一人又これに次ぐ、知らず濟美旗つひに我手に落つべきか、

さなり時こそ來つれ、なま優しき洛都の若殿原に一泡ふかせて、日頃吉備津野に鋭を鍛ひし我六高の雄々しさの程を見せんづもの、八幡勝利は我にこそ、三高工藝の校衆共柵外の一面に群

をなして、帽を振り手巾をかざして、青を呼び白と叫び、聲援を與ふる事急なりと雖、我に於ては何かあらむ勝算歷々として明かに我れに在り、

三百碼！四百碼！暫時は三高の一撰手聲援に力を得て、强弩一時に我に迫らんとしたれ共、咄、見ずや宿星旣でに我にかゝれり、井上撰手一度び急調を示せば須忽にして、これに遠ざかる事十步、森鼻撰手又風疾を抱いてしかも尙長脚鑠鑠、兎もすれば彼を拔かんとするの勢を示す、あゝ濟美旗は今や將に我手に來らむとす！

風漸く收まらむとして飛雲更に急に、靑白軍の聲援頗ぶるつとめたりと雖も、今は曆數乃でに定まる、我が井上撰手の急調、決線に近づいて猛又猛、つひに美事數十步を拔いて悠然として決勝線に入りぬ、忽ち起る軍樂壇上凱歌のひゞき！

しかり、グリースの昔のオリムピヤゲームのそれにや較へむ、榮譽に充てる濟美旗は、今しも高く振り翳されて我撰手の獲る所となれるなり、

（K、N生）

洛東の花時に當り大學陸上運動會に臨むを得たるは撰士と共に吾等の大に喜び且つ大に諸君に謝する處なり幸にして諸君の望を空ふせず濟美旗飜しつゝ歸校するを得たるは聊か校友會の爲めに意を强するに足れり

井上森鼻の兩君が試驗前にも拘らず熱心なる練習に怠らず吾人に對する責任を全ふせられたるは吾人の大に感謝する處、殊に森鼻君が歸國以後も看護の餘暇に一夕の練習だも忽せにせざりしとは感服の外なし

圖らずも先に氏の責を重じて自身の看護に心を留しめざりし氏の老母は不幸にも不歸の客となられ以來氏も家事の爲めに休學するに至りしと返す〲も氣の毒の至りにこそ」、

終に一筆記し度きは岳水會より一方ならぬ待遇厚意を受けたる事なり是れ或は昨年來岡當時の反報ならんも吾人は尙ほ報恩の機あらん事を願ふものなり、

（S、F）

雜報

部報

○擊劍部報

北風凜冽膚を劈く山陰颪足下に碎くる霜柱何ぞさまたげむ我校健兒を寒稽古は一月十五日より三十日間行はれたり、瘠せたる四山寂として聲なく万籟眠る朝まだき火氣一點もなき道場に跣足土間を蹴りてやつとうの聲勇ましと云ふもいさまし、其初めは勇士强將雲の如く來會し堂上叱咤の聲劍戟の響屢々寒鴉の眠りを驚かし轉た道場狹きを覺えしめき然るに何事ぞ本數に制限ありし爲か病氣の故か夢暖きベッドの去り難きの故か將た阿部教師の續いて出席なかりし故か日々其出席者を減して皆勤し定めの本數以上を得たる人は左の九氏なりき、

成瀨澄三郎　河村龍雄　木村得太
瀨尾武次郎　合田松太郎　墻山吉平
柏本芳治　田中作次郎　近藤萬太郎

嗚呼劍道衰へたるか將た士氣の振はさる爲か、煙濛々たる煖爐を圍て取り止めなき談話に時を費す懦夫ばあり然れども朔風寒き運動場に野球投げむとするものなし、彼等の顔は菜葉の其の如く五分の馳走に倒れ腕に一塊の肉なく五貫の者も擧くるに全力を費し、毎日重たげに携ふるものは日く教科書、

我校の元氣なく運動の振はさるは諸氏の認むるところ、運動によりて健康なる身体を養成し健全なる精神を保有するに非ずんば如何でか大事をなしうべき、ソレ校友諸子の熱し易くして又冷し易きこと何ぞ鉄棒の熱の傳導の其の如きや、運動部各部の創設せらるゝや大洋の濱の眞砂を洗ふ如く、蝿の臭い物に集るが如くなれどもソノ去る事の早き驚くに堪えたり之卽不撓の精神なきを示すなり、由來我國人は此性を享有し爲に大發見なく大發明なく大思想家なきなり是性にして早く匡正せずんば如何で百折不撓の精神を有する歐洲人と長く角逐しうべき、吾人學に志すもの之が救濟に務むべき大責任を有するに非ずや、

先日慶應義塾との野球競技は何たる醜体なりしぞ彼慶應本年の遠征中本校の如き甚しき敗を取りたる處あらざるなり。之他なし日頃近傍中學を對手として漸く兄分たるの名目或は權威？の爲に其覇を稱せしを以て鳥なき里の蝙蝠の如く獨り高く止り全く練習の積まざりし爲なり。吾人は只野球部のみを責むるに非ず柔道にまれ短艇にまれ擊劍にまれテニスにあれ決して盛なりと云ふべからず。少し上手なる學校と試合ば野球の如き敗を取り校の体面に泥を塗るは火を見るより明なり校友諸子其れ勉めよ

雜報

○柔道部々報

○本年一月十五日より、第一回寒稽古を開き、二月十五日終を告ぐ、出席人員四十七名、其の内皆勤者左の如し。

（A、B、C、順）

赤松得二郎　秋田　哲　岩野誠一
石井格一　板野孝一　黑田憲夫
近藤見長　森　彌三郎　成瀨澄三郎
西村甫太郎　大江清太郎　重田幸吉
柴田信衛　富岡久太郎　渡邊　中
柳原　逹　山上岩二（縣中）（總計十七名）

○本部開始以來日猶ほ淺きも、幸にして今井先生の熱心なる指導に依りて、漸次發達の緒に就き來りしは喜ぶべし。

○本部設立以來種々斡旋の勞を取られたる。山本光衛君は、今回渡米の故を以て、退學せられたり、吾人は玆に本部の驍將を失ひたるを悲むと仝時に、君が從來の盡力を深謝し、併せて君が自重を祈るや切なり。

○二月十五日寒稽古終業式を柔道場に擧ぐ、酒井會長親しく前記皆勤者にメダルを授與せられ、終つて一場の講話あり。次いで萩田部長起つて、客氣の勇は眞勇にあらざる旨を諄諄として諭告せられ、終つて二組の亂取形あり。

（講道舘流、亂取形）　木村得多・森彌三郎
（起倒流、亂取形）　赤松得二郎・山上岩二

午前十時半頃和氣靄々の中に散會せり。

○野球部報

◉岡山師範學校對本校野球仕合

四月十八日

午後一時半尾崎氏の審判の下に、試合を開始す

	P	C	SS	IB	IIB	IIIB	RF	LF	CF	
（師）	德永	宮尾	黑瀨	岡田	大塚	中尾	久越	行森	三宅	6
（六）	千葉	井上	渡邊	馬場	藤田	山岡	玉村	田川	米津	7

事もとより練習マッチに屬すと雖然も僅に一點の差を以て彼をして幸に孺子の名を爲さしめざりしは要するに彼れの技倆進みしか將た我の勢衰へしか。インニングの比較的少數なりしは兩軍共にバッテイングの劣なるに歸せずんばあらず。此の日三度振の名譽を負ひし彼れに十一、我に五、

◉我部對慶應野球仕合

連戰曾て破れたるなき我野球部は、猛然關西を蹂躙し來れる慶應を迎ふ、三高旣に彼れに服し又奚ぞ球友の讎を報ひずし

て可ならんや、有志の面々鋭氣衝天の慨あり、來らむ決戰の日を待つや最も切なり

時は來りぬ、四月二十七日午后一時、村尾尾崎兩氏審判の下に震天の活劇は初まりぬ、觀者無慮一千

慶應		本校	
田邊	IIIB	藤田	IIB
森本	SS	安藤	LF
林田	C	田川	CF
時任	IB	井上	C
宮原	IIB	渡邊	RF
吉川	CF	千葉	P
櫻井	P	馬場	IB
高濱	LF	灘波	SS
宮本	RF	山岡	IIIB

我軍先つ攻む、老將藤田先鋒たり繰り出す熱球美事一二壘の間に打飛ばしぬ、敵の二壘の將投球正を失し二壘を奪ひ得たり、然れども機を誤て空しく殪れぬ、安藤四球に出でしも、田川と枕を並べて二壘に死す井上一壘にてスタンドとなる

我軍代つて守る、田邊森本四球に出で、田邊は一壘にて刺され林田Pに小ゴロを呈して同じく一壘に死す、時任RFにゴロを呈せしも續く宮原空しく一壘に死しIIIBにてスタンドとなる森本ホームインをなせり

我れ兩び攻む渡邊SSにゴロを打しもIBに死し千葉三度振て死し馬場二一壘間にゴロを打ちしも敵將何條逃すべき遂にノーホーム

代りて守る、吉川を三二壘の間に挾擊して討取り櫻井をホームに刺せしも四球續出三點を與へ林田に至り三度振を演ぜしめぬ、蓋し前後只一回のみ

我れ三たび攻む、我軍の驍將灘波、RF小ゴロを送りて一壘に奮死し山岡Pにゴロを與へて藤田と共に一壘に死す

代りて守る、打擊の猛烈我軍亂調又亂調、四面の攻擊支ゆる隙もあらばこそ時任、宮原、吉川、櫻井、高濱、續ひてホームインをなせり、四球に宮本を送り、田邊をフライに倒し、森本四球に出で、林田、フライをLFに呈して死す、宮本をIIBに刺す

我れ四度攻む、安藤三度振、田川RF小ゴロを送りIBを奪ひしがIIBにて最後を遂げたり、我軍の老骨井上美事LFを衝きIBを領し、敵の虛に乘じIIB IIIBを奪へり、我軍の彌次体大ひに動搖めきぬ、續いて立ちしは渡邊、油然バットを把持して期する處あるものゝ如し、見るRFを襲ひ井上をして生還せしめんとせり、然れども、天運既につきたるにや敵のRF素早く球をIBに投じて死出の旅にぞつきにける、「我軍依然として零なり」

代りて守る、宮原吶擊甚た急なり吉川、續いて櫻井奮戰我軍の虛を乘ぜんとす、然れども我軍亦守り嚴なり、高濱フライをSSに送る灘波何條逃すべき直に之れを捕へてIIBに宮原を殪し美事のダブルプレーを演ず、吉川をIIIBに刺せり櫻井スタ

雜報

ンデングとなる

我れ五度攻む、千葉FLをSSに呈し、馬場Pにゴロを送りてIBに死す、灘波三度振て死す

代りて守る、宮本を三壘に、田邊を三壘に、時任をFLに討取り、森本、林田を立往生たらしめぬ

我れ六度攻む、山岡二壘に死し、安藤三度振を演じ、田川Pに小ゴロを與へて一壘に死す、藤田辛ふじて三壘に出でしがスタンデングの厄に遇ふ

代りて守る、宮原生還、吉川三壘に死し櫻井生還せり、高濱LFにゴロを送りて生還す、宮本SSにゴロを呈して一壘に死し田邊LFに大フライを打ちて死す

我軍七度攻む、而かも井上SSにFLを捕へられ、渡邊、千葉RFにゴロを送り一壘に屍を積みぬ

代りて攻む、森本、林田、時任生還、宮原を三壘に刺し、高濱をFLに討取り宮本を同じ厄に會はしむ吉川、櫻井スタンドとなる

我れ八度攻む、馬場灘波三度振をなし山岡SSにゴロを呈して空しく一壘の露と消へぬ

代りて守る、田邊生還し森本Pにゴロを進じて一壘に死し、林田時任生還せり、吉川をIIBに刺す此ときフールベースとなる宮本SSにゴロを送るSS卽ち之をCに投じて櫻井を殺せり、宮原、高濱、宮本スタンデングとなる

我れ九度攻む、嗚呼戰の數既に定まりぬ、敵十八に對する我れ零、藤田FLをSSに與へ安藤IBに死し續く田川IBにFLを得せしめぬ

ゲームセットは宣告せられぬ、かくして我野球史に拭ふべからさる一大汚點を染めぬ

◉通學生對寮生野球仕合

こは本校紀念日に半ばを競技し殘りを五月九日になせるものなれとも一まとめにして記しぬ

通學生	千葉	井上	灘波	馬場	藤田	古橋	和田	牛島	奥富
	P	C	SS	IB	IIB	IIIB	LF	CF	RF
寮生	小山	齋藤	米津	山岡	田川	谷川	安藤	玉村	石井
	P	C	SS	IB	IIB	IIIB	LF	RF	CF

通學生は之れ本校野球界の元勳を以てなり寮生はほこほこの新來者たり其意氣に於て通學生既に後へに瞠着たるものあり、卽ち五點對三點にて全く寮の大勝に歸しぬ

此戰ひ上半に於て通學生の和田、寮生の米津は下半に出席せず、前者には早野、後者には渡邊代りて入れり

◉一部三年對二部三年野球仕合

かりに野球界の分野を劃す、關西の地其の星宿は永く燦として六稜の頂邊（テッペン）に輝きぬ、さるを咄何事ぞ、一度慶應關東の荒武者が猛勢、驀然（まつしぐら）に十八州の野を風靡し去りてより、わが校亦見す〳〵その鋭鋒にくぢけ、落花繽紛の憫態、遂にあはれむべき凋落の最後を遂げぬ、易乾の上九に亢龍有悔されふもの乃ちこれ乎。

突如！　飛報は人の耳目を聳動せり、曰く何、一部三年對二部三年野球仕合！　吁これ何を意味するぞ、敢て老退といふなかれ、敢て退隱を語るをやめよ、この意氣とこの活動と吁これ何を意味するぞ、こはこれ少なくとも無意義なる力瘤の餘勢にあらず、由つて以て野球界に一腹の興奮劑を給し、由つて以て斯界の頂門に一針を賚す、人はこの言に聞きて始めてその仕合の存在をうなづかん、吾人亦以て諾とする而已、若しそれ當日撰手の熱心と覇氣とこれ亦輕々に觀過すべきにあらず、吾人は繰り返しても言はんとす、人間の行動に覇氣と熱心とこの二者にして熖ゆるあらんか、只これ一片事の成否、この熱心とこの覇氣に比す、吁これ何のかゝわる所ぞ、人は一場の野球仕合に對し、尙且つ多大の靜慮を拂ふて可。用九に見郡龍无首と、座右に銘する頗ぶる吉也。

乃ち左に撰士及得表を揭ぐ、因にいふ時は晩春五月の十九日、雨後の快晴に操卒の爽姿は亦一入の緑をそへ吾人十八人の勇士をむかへぬ。

一部三年

P	山下	2
C	山口	1
S.S	成瀨	2
I	天宅	1
II	吉田	2
III	長澤	5
R.F	田中	3
C.F	清水	2
L.F	岸本	1
合計點數		19

二部三年

P	奧富	3
C	北村	1
S.S	芳田	3
I	島田	0
II	安井	1
III	坂本	2
R.F	武藤	2
C.F	犬飼	0
L.F	小野	2
合計點數		16

乃ち十九に對する十六を以て勝利は見ん事一部三年の手に歸しぬ、

（競技者の一人）

○紀念日記事

霞の笆（まがき）、鳥の聲、眺に倦かぬ春景色、あはれ、われに千歳の命あらばゆづらまほしき山櫻も咲き滿ちたる四月十九日、第二回本校紀念式は講堂に於て擧行されたのである、吾人の永く忘るべからざる四月十九日――本校紀念日は、茲にはや第二回の回轉を繰返へしたのであるかと思へば、先づ白駒の過ぎ行く速度の早きに今更あきれると共に思ひ起すは――今

雑報

年に限らずこの日を迎ふ毎に必ず聯想するであらふ——第一回紀念式前夜に於ける慘事!! あゝ聯想したくもない、繰返へしたくもない、忌ましき慘事なれば、桑原〱〱、

午前九時、職員生徒一同講堂に集ひ、先づ君が代の奏樂を合唱し、それから次いて勅語奉讀、瀨戶校長代理の祝辭、生徒總代の祝辭といふ順序で、荻田教官の號令のもとで、噫の一つもするものなければ、咳拂も口の內といふ風に、まるで戴冠式のそれのやう、靜肅の裡にいと嚴かに式を終へたのは、實にめでたいことであつた、

それから當日の餘興として、ロンテニス、ボートの競技、さては會食、茶話會など催されて、一日を愉快に過したのである、左に其概況を少し述べて見やう、

ロンテニス——式後直ちに開始せられた、この技は本校特得の長技として其名聲四隣に轟く程のものなれば、競技の面々、天晴功名仕らんと、かねて練り鍛へたる三略の傳、八陣の法、共に知つたる秘術を盡し、擊ち返へす珠の音は雷の如く、射違ふ珠は雨の降るに異ならず、巴字に擊ち返へし魚鱗にうち遶り、西に當り、東に靡き、北に擊ち、南に走らせ、前にあると思へば、忽然後へにあり、奮戰突擊、忽地切り伏せ擊ち返へして得意がるあれば、空を擊ち虛を切りて茫然たるもある、焦燥(いら)ちて敵に後を見するあれば、機を見て寬厚勝を征するもある、虛々實々、千變万化の秘術に、何れひまありとも見えないので、帝釋宮の戰もかくやと思ひ知られて、語るに更に言語がないのである。

ボートレース——あてなしに出ても面白い春の日に、今日の午後より餘興のボートレースが催ふさるゝと聞きては、矢も楯もたまらず、遙かに聞く一發の銃聲は確かにレースの開始せられた號報であつた、處は烏城の裏手、湍々たる旭の流、淺綠をたゝへたるあたり、時は當に午後一時半、敗は死よりも恐るゝ大和民族、後れて末世の恥かゝじと勇み勇みし六高の健男兒、我れこそ終りを全せん、月桂冠は我占領物なりと口にこそいはぬが、熱望に燃ゆる心の中、眼光すごく輝き、オール握るも無心の手、ラツダー取るも無現の指、血に熱せられて戰ぎ、逆風何ぞ、急流物かは、漕いで〱漕ぎつゞけて、天晴功名仕らんと勇みに勇みし剛のもの、その雄々しさ、勇ましさ、時ならぬ血の雨をも降さんずる勢であつた。

霹靂一聲、ゴーンの號報と共に、赤青白の競艇一齊に漕ぎ出でたが、廻航四百米の航路を、我遲れじと各頭相持して下らず、勇士の腕見せんは當に此の時にありと意氣奮昂、丁度双龍玉を爭ひ、猛虎餌を競ふにたとふべきか、岸よりは赤よ、青よ、白よの聲援が霰の如く起り、玆必死の激戰、俄然最後のヘビー功を奏して月桂冠を頭上に戴くあれば、中途より思

雜報

ひあきらめ悠々迫らず、喜劇を試むる滑稽漢もあり、僅か半艇身の差に敵に兜をぬいで苦惜がるあり、出發點より決勝線まで互に睥睨の姿にて觀物人に冷汗かゝせたのもある、何れ劣らぬ剛の者の內、特に目立ちて勇ましかつたのは、本校當千の豪將安川、藤田の兩雄の決勝であつた、何れも並行し相持することと久し、觀者の叫聲山くづるゝやうで、最後のヘビーは遂に安川君の勝となり、月桂冠はめでたく君の頭上に降つたのであつた。

夫れ諸先生の競漕に至つては、其技は更にもいはないが、上奮ふて下勇むの好範を示された、有りがたき溫き御惠には、喜んで謝するのである。

都合十八回でレースも終り、それから會食の段となつた。（せ）

今日一日でみんなてか〳〵した眞つ赤な顏になつたも、なかなか今日の一日がいかに面白く遊ばれ祝はれたかを證して居る、夕暮の春を樂しい會食はこゝ植物園の中に催されたので、かしこの馬ごやしの中や、こゝの紫雲英の上に、三人五人かたみに會心の友が樂しかりし一日の物語りに笑語喃々として愉快にやつて居る。時に鈴の音は鳴り響いた、一同はしばらくその唇をつぐみその箸を置いた、瀨戸副會長が一場の會辭があつてやがて喝采裡にわが六高の豪――運動界裡の大立物――井上、森鼻の兩君に褒狀は渡された、再び六高萬歲の歡呼の內に、永なへに二君の健康を祝された、おゝ愉快な樂しいこの夕暮ではあるまいか、京都大學の運動會に一番驅の功名を博したわが兩君は、大にわが六高の意氣を洛陽の地に擧げたが今又こゝに滿場の花と咲いたのである、おゝ眞に愉快の極だ、――見渡せば空には薄紅の雲がよう〳〵紫になり、薄綠になつて稀依として夕暮の闇はあたりをそい來た、菜の花黃なのはほの白うかすんだ樣に、池のほとりには蛙のなく音がいひ知れぬ趣をそへて居る、會はこれから餘興に移るべく、人は皆食堂にとつめかけたのである。

餘興の狀態を告ぐる前に、人は南寮階下の紅提灯の赤々とあたりを照らして居るのを見過ごすことは出來まい、飾付は頗ぶる時機に投合したものなので、寄宿寮の博覽會といつたら恐らく當らずと雖も遠からずであろう。ビーアホールあり、書籍舘あり、美術舘あり、さつてはヅット破天荒なる古物舘に入れば、先づ目を驚かす奇物珍品、時代は埃及のミーラ時代を先驅として、正に那翁時代を殿としたり、國は萬邦に渡りて中には頗ぶる奇しく怪しき和漢蘭といふのもある、揚貴妃の寢衣あれば小野道風の傘もあり。怪は怪、珍は珍なりといへども未だ以て眞面目では見えぬものであつた、

餘興の前に當りて藤田君の大學運動會の道行談があつて、井上、森鼻兩撰手又一場の挨拶あり、遂に餘興に入つた、餘興

に就いては事々しくこれを書く程のこともなかつたのだが、內に活動寫眞の頗ぶる喝采を博したのと、綾田君の手品がなかなか愛嬌があつたことさる人はいつて居つた、かくて全く閉會したのは九時前でもあつたろう、七星の影がいたく傾ひて、操山の山の端がほの紅ふ染められて居つた。（よ）

○本校日記

一月八日　第二學期授業開始
二月十一日　紀元節拜賀式擧行
十七日　山口高等學校敎授兼舍監白石眞氏來校
十九日　小松宮殿下御薨去に付哀悼の意を表する爲休業
廿八日　ビショプ敎師滿期辭任に付講堂に於て告別の式を擧げ尙寄宿舍食堂に於て送別の爲會食を催す
三月六日　獨人ハンスザウテル氏を獨語敎師に傭聘す
醫學士高橋金一郞氏を獨語講師に聘す
七　日　娛樂部の催に係る大音樂會を講堂に開く
十一日　米國紐育市ユニオン神學校長ホール博士來校講堂に於て演說す
十二日　海軍機關學校敎授浦口善爲氏、石川縣第一中學校長久保道氏來校
十四日　第三高等學校敎授榊亙三郞氏來校
三月廿三日　第二學期試業開始
廿七日　第二學期試業結了
四月八日　第三學期授業開始
十　日　京都帝國大學運動會各直轄學校競爭に於て得たる全校濟美旗到着
十九日　本校紀念日紀念式擧行
廿七日　慶應義塾對本校野球仕合を本校々庭に行ふ
五月二日　文部總務長官岡田亙平氏本校講堂に於て演說す
十三日　松田敎授休職に付講堂に於て告別の式を擧ぐ

○寄贈雜誌目錄

一、第一高等學校々友會雜誌	自百二十三號 至百二十六號
一、第二高等學校尙志會雜誌	五十三號
一、第三高等學校嶽水會雜誌	三十一、二十二號
一、第四高等學校北辰會雜誌	三十四號
一、城　北	三十九號
一、京華校友會雜誌	十四號
一、烏　城	三十五號
一、豐津中學校友會雜誌	六號
一、千葉中學校友會雜誌	十、十一號
一、七　生	七、八號
一、鶴　城	九號
一、三重中學校友會雜誌	十八號
一、一　橋　會　雜　誌	一號
一、長野縣飯田中學校友會雜誌	二號
一、同　志　社　文　學	一號

附録

下津井記（III. I. 動植物採集）

お、　か、

篠つく雨、ゆくりなくも一陣の風に拂ひ去られ、天霽れて飛ぶ雲の早きと共に、一行二十七人は倉敷驛で滊車を棄てゝ雨後の道程、塵しげき憂目にも遇はずに、かの菅茶山が「戰場全入翌田中、江汐猶餘一線通、底是先登騎馬處、南村北巷祿秩風」と感慨に堪えなかつた藤戸の渡も、唯、橋の名で、あゝ、あれだつたかと想ひ合さるゝやうな始末、桑滄の變、今更ならず驚かれる。七里の行程に坦々たる何の奇も妙もない境を行いて、身は既に兒島半島を横斷して、暮色漸く薄う鷲羽山の峰頭より包み始め、下津井港頭漁火ちらほらと、海を罩めたる夕闇に耀くをり、此處に靜かなる漁村の人となつた。

夜來の殘夢まだ結びかねて明くれば五月九日七艘の漁舟は艤成つて埠頭に待つて居る。干潮と共に纜を解いた。滑々と艫をやる音、颯々と波の碎くる聲、船は舳艫相銜んで矢の如く走つてをる。鏡のやうな灣頭の水、漣波徐ろに起る朝の海、パノラマのやうな港の家々、近き島は翠微かに、清き浪に映じて鮮やかである。遠く四國の峰巒は黛のやうだ。鷲羽山は今や夜の衣を脱いで爽かな朝衣に更めた。何處だらう棹歌幽かに波の間に聞えて居る。あゝ希望と勇氣と樂さに滿ちたこの朝の海、

わが一日の遊も其の快もまた茲に多少の希望なきを得んやである。

西より遠く東に亘りて花崗岩より成れる鷲羽山一帶の起伏は海に臨み逶迤として味野灣頭に連なつてをる。全山、麓に暖竹(ヨシの一種)繁茂し、磯馴松は僅かに碧水にのぞんで處々に點裝して其の餘命を有つて居る。峨々たる禿頭の山、宛然一幅の文人畫である。が自然は巧妙なもので、兀山疊峰、何の趣もないが、見よ、あの砂質の土層に、美はしい愛すべき月見草が四邊の境遇が乾燥無味なるにも係はらず、獨、怡然として暮れ行く三春の名殘を樂しんで居るではないか。暮れ行く春、實に此の山に取つては無殘な今の光景ではないか。「寄言全盛紅顏子、應憐半死白頭翁、此翁白頭眞可憐、伊昔紅顏美少年、」嘗て、月明の夜に、翠の髮を浦上の風に梳つて、灔々波に湧くの時、玉なす月の歌を歌ひ、夕雲潮のあなたに流るゝの時、妙なる琴の調(しらべ)もあつたのである。春や、秋や、紅そむる更衣の艶(あで)やかさはなかつたが、千秋に替らぬ移らうことなき操はあつた。が人の子てふ罪深き者此の世に出でしより、あはれ汝が色はあせぬ、汝が宛轉たる蛾眉は霜をきぬ。いまは鶴髮亂れて半は禿た老いの人となつた。希望もいまは無いだらう。勇氣もいまは消えただらう。磯打つ浪の夜、白砂躍る風の朝、唯何の感もなく無言で汝は永久に老い行くであらう。風雨は軈て汝を骨と皮とに爲し終るだらう。一莖の黄花、滿山に幾莖ぞ。しかも汝が老の悲は愛すべきいと小さき平和の花によつて慰め得らるべきか。さるにても無知蒙昧なる人の子程、あはれに罪深きものは又とあるまい。濫伐の弊は誠に恐るべきものではなからうか。

船は此の岸に沿ふて東に馳せた。輕風襟に滿ちて四面の巒巘は悠忽として變つた。六口、櫃石等下津井港頭の諸島は遙かに、味野灣內、水漫々として味野の人烟糢糊と日比の港影は遠く彼方にある。一碧萬頃の波の上に堅場島は呼ばゞ正に應へんとして居る。長汀曲浦、蜿々として端はわからぬ。久須美と云ふて一時海水浴場のあつた所は前の鷲羽山の山續きである。これが、あのいま離れた岬なのだ。此處には溪間〳〵に倚、紅杜鵑、めがしの類が生ひ肥つて居る。やがて上曳網は舷につけられた。硅藻類だの、魚の幼虫など、沙蠶類と共に非常に採集されたが何れも顯微鏡下の美觀である。が皆のものが豫期して居つた夜光蟲は何度網をあげて見ても影さへ見せないのである。舟子は夏期に於ては澤山夜間に輝くのを認めるといつてをる。今しがた縫ふやうに通つて來たよし島、松島と久須美、田の浦の磯は飛ぶが如く去つて餘程遙かに見える。船は舵を轉じて南に鬱蒼たる松に蔽はれた釜島に向ふた。こゝも餘程以前は、鹽燒く海人が飯炊ぐ代、磯漁る舟人が酒炙る薪となつたのであるが、この爺の先代の幼ない時、苗を植ゑたのだそうだと、年老いた船頭が話しだ。この爺なか〳〵の物識で充分なにや、かや、說明してくれるのだ。島々の模樣など業からだとはいへ、餘程、詳細い。何でも松島の漁夫で海に出たが父子三人鰒を食ふて其のまゝ死んでしまつた。など罪もない話も聞かされた。が此の話だけは妙に余の耳に殘つて居る。といふのは未だ中學校に居つた時羽生といふ余がわけて親しく懷敷思つた先生があつた。そうだ尋中の一年の時だ六人許の友と「ますらを會」といふ禁烟主義の小團欒を創つた。師は其の會の親父であつたのだ。この會は樂しい

家庭的の美しい園であつた。一日、其の中の一人が海軍兵學校に入學するとて中途に學校を去つた時、親しい一人が旅の發途(かどで)であるからといふので、送別の團欒(まどゐ)を開いた。其の時六人の者が六枚の紙に書いた種々の其の中に、余のには、師の「鰒汁や鯛のあるのに無分別」と或る俳諧師の句が書かれてあつた。これに就て師の意見と皆の者に懇ろな注告があつた。それだ、夫を今想ひ起して、遠く信濃の故山にいます大人(うし)の清廉なる人格を慕ふのである。

釜島の東濱は水が深いから船を留めて烏賊釣を始めた。皆夫れ〳〵長い綸を下して世話を燒いて居る。がどうも一匹も來そうでない。處が大渡先生は先釣第一の者は宜しく名乘を擧ぐべきだと云はれたから、皆の者はたまらない。切りに吾れこそ第一の功名せんとて急(あせ)るが駄目である。それもその筈だ、漁界の腕利といはれる舟子が糸を垂れて茫然として居るのだもの。さうなると晝の豫算はがらりと違ふてくる、今日の獲物で肥やそうと思ふた皆の者はそろ〳〵こぼし始めた。海島に遊んで野菜を食する亦快ならずやと苦笑した者もあつた。形勢大に面白くなつてきた。處が、やー來た來た！そらつ！と云ふと共に先登第一は大渡先生であつた。こいつは大きい！と得意に高く差上げ玉ふた時、驚いた、不意に、ピユッー！と烏賊、彼れが唯一の武器たる黑汁を噴き出した。こいつは！と流石に先生も溜らない。遠慮もなく Sepia を噴き掛けられてしまつた。これも好い紀念だ。と滿船どつと笑つた。衆船等しく拍手した。そら來たつ！と大音聲に釣上げたのは鈴木君だつた、又黑汁かと思つたら豈計んや長い足をうや〳〵と高く翳した章魚坊主であつた。又も笑聲どつと海

に響いた。次に渡邊君が又一匹釣たが最う夫れきりだ。腹は空しきを告ぐる事切であるが糸は重くなりそうでない。如何に太公望を氣取つても萬事文明の餘澤には、難有いかな、魚に滿身の智慧ありと見えて、決して一匹も竿に懸りそうにない。で船を此の島に着けることゝした。大槌小槌は彼方に盆水中の盆山の如く、四國の諸山は正に指呼すべきである。あなべ島の燈臺は白く波のあなたに著るく碧い濃い水に映じて、えも云はれぬ風光である。Inland sea の明媚なる光景、三嘆をかざる者、啻、己れのみであらうか。山岳秀靈なる日本の國を想ふと共に、永久腦裏に存すべきは水淸き此の內海であらう。

十時過、上陸して濱邊に自由散歩をした。寄せては返し返しては寄する浪のまに〳〵種々の貝ども拾ひての品評め。習ひ覺えた現存せの智慧を絞て、互に較べ合ふ。中々騷しい。小磯に遊ぶ魚も驚いて砂の中に潛んだだらう。一行は晝の事もうち忘れて面白さに夢中であつた。舟子等が種々の奔走によつて漸く七匹許で七艘の船頭とわれ等で食ふのでまづ〳〵海で野菜の難は脫るゝを得たが、鍋の底に章魚と烏賊とが海水浴と洒れて居るには驚いた。食に飽けるわれ等は聽て零時半といふに顯微鏡實驗を終へて船を出し、島の南を西に向ひ松島さして進めた。玆には十三軒の漁家あるが、富は小島に滿ち〳〵て、例の爺さん其の樣を說くこといと切なり。瑣やかな小學校だが島立で廣い海の裡に唯獨りで立つて居る。小さい樂園ではあるまいか。流るゝ潮に船は西南に馳せて矢のやうに櫃石島の小島に着いた。ほんだわら (Sargassum) は此の邊の海底には深林の如くに生ひ茂つて居る

が。見よ、水淺き處を覗器(のぞき)を以て窺ふに、美しい海藻、珍しい魚介、あゝ大海を一つの水族館と爲したといふ可きだ。一枚の硝子板が底の無い方尺の箱に嵌入して有るが、實に簡單であるが、然し道理の深い器具だ自由に船から海底を眺めることができるのである。なんと、大海を一の水族館としたと云つても誣言ではあるまい。着いたのが一時四十分だつたが早速船を辭して皆の者海濱の動植物採集をやつた。此處は櫃石島と洲續きの小島であるが、勿論、香川縣である。島の東南岸は奇巖疊々と重なつて居る全島翠濃く松はこの鹽風に鳴つてをる。西北は一帶淺く、洲は長く島を繞つて東に亘つて居る。而して干潮の時は櫃石島に續くのである。われ等はこの磯邊を漁つた。あまりの美しさと樂しさとに、淺き水を渡り、危き岩を途つて二度までも覺えず回つた。洞窟浪ゝ洗はるる裡、斷崖水に臨む處、巖より巖に飛べば千種萬態只自然の如何に好妙に美麗に精細に造られてあるかを見るのである。菟葵茄(いそぎんちやく)は觸手を開いて波の寄する間に搖げて居る。珊瑚類が紅の polypen を出せる。海綿類の黄なる、紅なる、とりどりなる、水母は玉の如く水のまに／＼游ぎ、海盤車は岩より岩と磯を傳ふてをる。そして海藻類の萌えださん許綠なるが其の間に點裝して、濃やかなる夏草、紅なる紅葉の花も、どうして之れに及ぼうぞ。陸離たる光彩に皆われを忘れたのである。先生は切(しきり)に好個の島だと言はれ、皆の者はあゝ樂しい、美しい、奇妙だと唯其の好妙なるに驚くばかりだ。澤山の獲物は船に運ばれて、大なる壜の中に入れられた。吾人は此の島を去るのは好まなかつた。あゝ奇麗な海！

生物學敎室に於て奇異なる動物。物珍しげなる魚介を見た。がしかし思ふて見よ。壜に藏られて、机上に列られた、魚が、介が、自然の美を存して居るだらうか。一寸の微動にも變化にも、此の目の醒めるやうな珊瑚類は、其の花のやうな polypen を縮めるであらう。況んや酒精中に入れたなら、畏縮した色あせた形骸は最早自然の面貌は無くなるのである。到底此の複雜な色彩の配合分別は繪畫でも勿論寫眞にも表はすことは出來まい。自然の美觀は宜しく自然によつて味ふべしだ。百聞は一見に若かずとは誠にそうだ。此の好望に對し世の美觀にうたれて、此の一日、正に三年の壽を延すべく、しかも百聞一見の眞理を尙一層深くした。何時まで居つても仕方が無いからと云ふので、此處でも亦顯微鏡實驗があつて硅藻類を見た後、四時前といふに船を出して櫃石島に暫時休憩した。此處で幸にも黑いがぜといふ海膽を土產物の中に收める事ができた。この邊には特に此の類が居るらしい。今は目的も達した。希望通の土產物も調つた。而して今日の採集は好結果であつた。船は歡聲と微笑に滿ちて直ちに下津井に向つて纜を解いた。「誰謂水無心、濃艶臨兮波變色、誰謂花不語、輕漾激而影動唇」夕雲西に棚引く時、下津井港頭靄霞に漸く罩むるをり、自然の子らはいまや此の淸き漁村に歸るのである。

この夕、獨り埠頭に立つて、湧く春潮に一輪の明月霞を破つて出る時、海光、碧明かにして、滿身の意氣は覺えず大聲雲か山かと吟ずるを禁じ得なかつた。

我が師と助手平松氏はこの夜、船を出して夜光蟲を求め玉ひたるが只沙蠶の一種暗に輝くを捕えら

れたのみで遺憾だが居ないのである。

歸途（海路隊）

連夜のコンパニーと疲勞との爲めに熟睡たゞ束の間の感あつて、今日は愈樂しき海を去らねばならんのである。船頭が切に急ぐのと、談判不意に調つたのとで、旅裝そこ／＼に船に飛び乘つた。一行二十名で、平松氏は荷物と共に同船であつた。船頭大に時期を失したるをこぼして、急ぐこと夥しだ。七人許は途中でやつと二挺艫で追ひついた始末でモットの事で置き去りに遇うとした有樣だ。船は六口島を回つて今や高島と水島との間を滿ち潮に乘じて滿帆に風を孕まして走つた。われ等はいま玉島さして船出したのだ。顧れば下津井の人烟は杳として、波か、山か、唯髣髴の界にある。あの美しい島、あの樂しかつた磯の邊、いまは影も波間に消えてしまつた。船は水島灘に乘り出した。鏡の如き水一つの島なく、ひた青に碧い海。高島を見て神武創業の當時を懷古したわれは此の海に入つて源平の戰を想ふのである。如何に關東の荒くれ夫が平安の公達を惱したかを想ふのである。幾多の感慨胸に交々迫る時、突然船頭は駄目と叫んだ、見ればいまは片帆も益がなくなつた。風は逆しまに吹いて居る。潮は引かんとして居る。船は少しも進まないのだ。滑々勉めて漕いで居るが風が玉島から吹いてをると言ふて居る。船底に籠居していた人達も驚いた。だて船を水島の眞中に只浮べて居るのは馬鹿げた事だと大に意氣卷いている。中には船頭が無法の賃金を強ゆるのではあるまいかと言つて最後は宜しく強硬談判に出で尚解決する能はずば魯西亞的に萬國の平和を

破つて鐵拳政策に出づ可しと、手を鉾にした者もあつた。が萬事支那的に乃公關せず焉と濟すべしとの議に一決して、皆、默して舟子と語らず。大に船底に踞して歌ふ。暫くして舟子の懇願によつて、中途、船を呼松に寄すことゝした。で皆の者は玆に兒島の順禮となつて、徒歩立となつた。倉敷までは三里許だが、道も至極よくて、何の奇もなく、瀛笛一聲身はゆら〳〵と元の默阿彌となり、自然を夢るの人となつた。（お、か、）

徒歩黨の記

二組に分れたこの組は船便黨に比して僅かに七人である、が然し、皆健脚家（但し自稱かもしれぬ）のお揃で、强將の下に弱卒なしで、意氣正に天を衝くてふ勢である。會計係が宿泊等の支拂を濟して、大渡先生を先達として出發したのが午前八時。途は一つの坂路を越えて味野に向ふのであるが、顧れば近くは下津井の港は眼下に靜かな波を湛へて居る、昨日漕ぎ廻つた海も、採集した島々も一幅の畵圖である。いまや身は一杖一笠南無大師と唱へつゝ此の浦々の靈場を廻るなる遍路の道づれとなつた。

味野に入つて富豪野﨑氏が先考の頌德碑の美はしいのを看た。高さ十間もあるかと思ふ嚴しい立派な石碑である。野﨑氏邸に立ち寄り、案内せられて十數町許の出張所に導かれた。此處は廣い鹽田の中に位して遙に內海の烟波を眺めるを得て好風趣である。氏が私設の測候所も序に見た。二等測候所に屬するのであるから取分け珍らしいものもなかつた。墟田に導かれて詳細な說明を聞いたが、

煩雜に渡るからこゝには省く。一行の中には岡山へ直ぐ歸らうと云つた者もあつたが、遂に、一同瑜珈山へ登る事となつた。道は上村を經るのが最も近いと聞いたから、畑の中を通り小山を越えて上村に至つた。饒々たる野の麥は穗重げである。さぞ農夫は此の夏を待つて喜んでをるだらう。が然し、あはれ、未だ熟するには早しとて怪みつゝ取つて見れば、恐るべき銹病菌が附いて居るのである。農夫は知らずに氣にも留めないが繁殖すると少なからぬ害を爲す者だと先生が說明された。下村より道は爪先上りとなる。日は漸く高く滿天一の雲影をも止めない。遠慮もなく光線を浴せかけられるのだから、一行は汗を拭ふて大に困うじた。が羊腸たる山道は、一景去つて、又一景、吾等をして飽しめぬのである。誰に磨かれたのだらう山裡の一鏡、碧水を湛へてをる。轆々たる水車は人無きに、長閑に、銀玉珠雪を散らして廻つて居る。此の小屋、あの小溪、吾等は寫眞器を携へなかつたのを遺憾に思ふのである。こゝで余等は圖らずも好個の土產物を得たのである。夫れは眞先に先生の慧眼に依て發見されたので、見れば「モウセンゴケ」「イシモチ草」などの食虫植物が濕潤な地に生い茂つて居るのだ。先づ下り立ちて、やをら採集箱に收めた。斯て、瑜珈に着いたのが正午少し過ぎで、先づ路傍の茶店に憩ひながら腰辨當に飢を醫した。蓮臺寺に詣でゝ瀨戸內海の眺望を恣にした。衣を千仭の岡に振ふとは確かに吾等が快である。前途尙遠ければとて急ぎ下山して八濱に向ふた。先生は何時も得意の健脚で皆のものは大に困じた。余等は稍ともすれば後るゝこと數町なるから、殆んど走るが如くに山を下りた。この邊は山林繁茂して眼界少しく開けたかと思へ

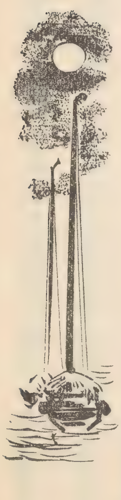
ば復た林中を途が通ずるので、幾度か繰返して、長蛇の如き道は漸く人家に近づき、潺湲たる池より流るゝ小溪、靜かなる小川、と變化してきた。幾多の山徑廻り廻つて遂に灣内の水を見ることができた。見よ北方遠く烟霞の裡に一群の連峯を幽かに認むるだらう。其の中の高いのは、あの、金山だらうが、未だ岡山は夫れとも見分けがつかぬ。行くこと數里前途に當り巍峨として群峰を抜げる金光山を見た。其の麓まで行けば八濱はそこなのだ。崩れかゝつた勇氣はこゝに一倍した。然し是も淡墨の畫のやうに遙である。里人に問へば五十町だ、又行くと四十町だといふ。依つて皷腹一番勇を增さんと一小店に腰を下した。折から吹き下す清風に滿身の汗は影もない。一椀の澁茶に渇を凌いだ。長堤曲浦、灣に沿ふて行くこと暫く、五時といふに八濱に達した。直ちに舟を傭ふて三蟠に渡らうと思ふて、聞合したら、泣く兒に蜂、情ないかな「今引き潮で生憎舟は出ません」。見れば成程、正に潮は引き切つて濱邊數町は洲となつて舟は泥沙の上に踞まつて居る。舟の出ないのも無理はない「晩までお待ちになれば出します」何時にかと問へば「八時頃」とは何んぼうか憂いやら。三時間も、重くなり增る足を止めて空しく此處に時を費さんは上策にあらずと、飽浦まで棒のやうな脚を曳くことゝした。其處には絕えず渡船があるのだから。八濱で豫算はガラリと違うて此の勞れた脚には大大事が起つたやうに思はれた。が余等の勇氣は未だ沮喪せぬ。左に灣内の清波を眺めつゝ、右に金光山を仰ぎつゝ、歩を進めた。十數町で傍に呼ぶ者がある。省れば水夫が舟をやらんと磯より曳き下して居る「三蟠までお出でか、行きましやうか」といふので談判は直ちに

纏つて、皆、共に舟中の客となつた。時に夕陽は帶江銅山の方に當つて紅(くれゐ)の雲を吐いて居る。漁舟兩三、さし來る潮に夕の代獲んとにや、夕榮を海の波に流したその中に、弱い入相の日影を浴びて、綸を垂れて居る。かくて三蟠に上陸したのは七時で、淡い白い月が今しも東天に懸つた。日は全く途に暮れて御幸堤を歸るわれは京橋の畔燈火燦爛として旭の水に輝くのを見た。（か、ひ、）

家苞の品々。

（原生類）、放射蟲。（海綿類）、レニエラ三種。（腔腸類）、みづくらげ、いそぎんちやく二種、アルシヲニユーム二種、コーラリユーム、うみしやぼてん。（棘皮類）、ひとで、くもひとで、うみしだ、がぜ、むらさきうに、なまこ。（扁蟲類）、ひもむし。（環蟲類）、ごかい一種、セルプラ。（苔蟲類）、あみがひ。（軟體類）、はまぐり、いがひ、たいらぎ、まて、かき、にし、うみうし二種、まいか、たこ。（節足類）、コピポーダ、うみぼたる、くるまゑび。（被嚢類）、ほや。等

（海濱植物）、はまだいこん、はまゑんどう、とべら、つるな、だんちく、くろまつ、いまめがし、はまひるがほ。等



Consider the lilies of the field, how they grow; they toil not, neither do they spin: and yet I say unto you, That even Solomon in all his glory was not arrayed like one of these. Wherefore, if God so clothe the grass of the field, which to-day is, and to-morrow is cast into the oven, shall he not much more clothe you, O ye of little faith?

grow a stronger man I must keep close to Christ. I do not press that upon you to-day; this is not the place in which to do it. But I do press upon you the thought that *your country wants good men*, and that your Government has established colleges like this not merely to train up educated men, but first of all to train up *good* men.

I pray that God may bless you, and your honorable president, and your instructors, and that the moral life of this place may be so strong and pure that it shall be an example to Japan and an object of admiration to the world.

THE END

to take your pleasures sparingly. Do not throw yourselves recklessly into pleasure; it is better for you to take it sparingly: it is better for you to hold yourself well in hand so that the life of self-indulgence shall never become your master, deadening your sensibilities to right and wrong.

One last word. Remenber from day to day that every one of you leads a representative life. Now the meaning of that phrase is, that you stand for something in this world more than yourself. No man liveth to himself. Every man's life affects some other interest besides himself. I dare say if I knew you better I could point out how *your* life is affecting the youth over there, and *you*, again, are affecting another over there. And so you are all bound together in the bundle of life. You have power to make each other better or worse. It matters much what you do, because you are not your own. You represent some one else besides yourself, and your influence passes out to some other life. Now, my friends, that idea of the representative life is something you can carry out with you into the open world. Citizens of Japan; you stand for more than mere individuals. You represent the welfare of your nation and of your time. It is of little advantage to Japan that you shall be educated men, unless, first of all, you are *good* men. If you are going to take a liberal education and then go out and lead bad lives, lives that are to be a temptation to others, it would be better for you and Japan that a millstone were hung about your neck and that you were drowned in the depths of your beautiful Inland Sea! Japan needs good men, with senses exercised by use to distinguish good from evil. If you are good first, then your liberal education becomes a mighty instrument of power, and with God's blessing and help you can work almost anything for the advancement of your native country. There is much more that I could say. You will quite understand that for myself I would go one step further; for myself I feel that if I am to

older? I have still a few moments left in which to speak. Let me ask you to allow me to give you in a few words these simple suggestions about the way in which every one of us, younger or older, can train these moral natures of ours so that they shall become more sensitive and not more dull. These are very simple words, but life is, I assure you, made noble in simple ways which are open to all. One thing I advise you to do, if you want your moral nature to become stronger, is *to be faithful in the smaller duties of life.* Take, for example, the discipline and duties of this college. The man who wishes to gain strength morally will put himself in line with the discipline of the college, and his ideal will be to do with absolute fidelity the smallest thing that is required of him. If a man undertakes to say; "Oh, when I get older I shall be faithful to my responsibility, but in the meantime I can do as I like in school or college," he is deceiving himself, for as he grows older the habit of unfaithfulness will grow upon him. He is playing fast and loose with himself, and little knows what a harvest of weakness he will be reaping hereafter. The men who can command and lead others are they who, as children, as boys, as youths learned to obey, to realize the importance of discipline, and were faithful in that which is least. I beg that you will not treat carelessly any duty in the whole range of duties, but be faithful in the smallest things.

Another suggestion I would give is this: *Take your pleasures sparingly.* You understand just what that means. Do not look at life as merely a time in which to enjoy yourselves. Do not make enjoying yourselves the chief aim of your life. We all need our pleasures. If we had no pleasures and enjoyments we should be dull and sad people; but he who makes his pleasure the chief end of his life is simply preparing weakness for the time to come. For by-and-by your pleasures will rule you and you will be the slave of self-indulgence, and there is no enemy of moral sensibility more bitter and pitiless than self-indulgence. I beg you

of joy. And what do I mean by the picture of joy? I mean a life that once was in the unconsciousness of innocency, with the moral nature asleep. In that life the moral sense has waked up in the course of natural growth. From the beginning of its self-conscious moral history, that life has so used and so trained its moral sense, that instead of growing weaker and weaker it is growing stronger and stronger. Day by day it is gaining vigor and manly power. What is the test of vigor in moral character? How do you know that you are gaining, that you are on the upward path as a moral being? I will tell you what the test is. The test is sensitiveness to right and wrong, the degree to which you respond to right and wrong.

Every one of you here is familiar with Marconi's great invention which we know as the wireless telegraph, by which messages are transmitted over land or water without the medium of intervening wires. What is the principle of the Marconi telegraph? It is simply the principle of acute sensitiveness. The receiver is an instrument of such extraordinary sensitiveness that it can respond to and feel the infinitely subtle waves that are sent over it and touch it. So is it with the moral life. The test of moral vigor is sensitiveness to right and wrong. The ideal thing would be for a man, as he grows, instead of becoming hard and dull in his moral life, to become keener all the time. A beautiful old saying there is that the ideal state of manhood is to have one's senses "exercised by reason of use to discern between good and evil." The senses are exercised by use. A man always using himself in the right way should become ever more sensitive, ever more responsive to the difference between good and evil. He should be attracted by right, and repelled by wrong, and so his manhood should become more noble and glorious from day to day.

How shall we train ourselves? What shall we do with ourselves in order that we may grow more sensitive to right and wrong as we grow

Japan — about a man trying "to pull the wool over his own eyes." When a man tries to deceive himself, we say, in America, that he is trying "to pull the wool over his own eyes." Now boys and young men get to that stage in the decline of the moral life. They know the difference between right and wrong, and they have grown accustomed to doing wrong; and finally they try to throw off the burden of responsibility for wrong-doing by calling wrong right: they say; "Oh, it is not wrong to do these things; I was born this way; I was made this way; I am not responsible for these tastes and appetites and desires; I can do what I want to do."

Then there is one stage below that, in the weakening of a young man's moral nature. It is when he gets to the point where he feels no longer the difference between right and wrong.

I saw a picture the other day, a horrible picture, representing a man whose eyes had been put out, burnt out with a hot iron: there were no eyes there; it was probably done as some sort of terrible torture or as a punishment. Now there is an old saying about the conscience, this beautiful instrument within us, that tells the difference between right and wrong. It says that a man may at last, by constantly yielding to wrong have his conscience "burned as with a hot iron." * It is true. There *is* such a thing. It is the death of the moral sense. The great endowment which made us different from the beasts may be turned to nothing, extinguished, ruined, by wong doing. If there ever was a tragedy on earth, it is when a man takes this noble and most delicate instrument of conscience, the thing of all things which lifts him above the brutes, and extinguishes its power as with a hot iron.

And now, gentlemen, you have seen with me the picture of sorrow, and I think we have looked upon it long enough. I want, in the presence of these hopeful young men, to look, in my last few moments, upon the picture

* I Timothy, 4, 2.

that you did not mean to touch. Just so I have seen the moral nature of childhood awake bewildered, not knowing what was right and wrong; and many a boy has gone wrong ignorantly; he did not really know that it was wrong; he was bewildered, and in his bewilderment he went the wrong way. I have the most loving sympathy for a boy at that stage in his career, and here I want to say that I think the worst act that an older boy or a man can do is to take advantage of a younger life that is just waking up and does not see clearly the difference between good and evil. There was a tremendous word spoken many long years ago by Christ, who said that if any man, thus taking advantage of a younger life, made it go wrong, "it were better for him that a millstone were hanged about his neck, and that he were drowned in the depth of the sea."*

What is the next stage in this progress of sorrow? It is when the boy knows perfectly the difference between right and wrong, knows good from evil, but the power of wrong is so tremendous that in the battle from day to day he fails every time. I have seen that, and you have seen it, too! You are no longer bewildered like a child waking; you see quite clearly the difference between good and evil; you know it is a battle between right and wrong, and you know that you are getting beaten. The forces against you seem to be stronger than any force you can bring to bear on your foe, and day by day you get beaten and pounded down by evil, until you begin to get not only discouraged, but *hardened.* You get used to doing wrong and it does not make you sorry as it once did. That marks one farther stage.

Then what is the next step? The next step comes, and I have seen it come, when a man tries to persuade himself that wrong is right! That is distinctly beyond anything we have yet considered. We have a saying in America — I do not know if you have anything like it in

* S. Matt. 18, 6.

I realize that after a moral nature has awaked, one of two things must happen. Either it must grow weaker and weaker, yielding to the influence of wrong; or else is must be growing stronger and stronger, seeing the goodness of good and loving and grasping right with ever firmer hand. Such is the destiny of our manhood; and He who gave us our manhood has made us to choose our destiny, and to determine what it shall be. He has not only put this wonderful instrument of the moral nature into our breasts, but He has given us the key by which to unlock the secrets of the moral nature and to use its powers either as a means of elevation and advancement, or as an instrument of self-destruction.

Now, will you allow me to draw two pictures before your thought; perhaps these pictures you yourselves have seen as you have watched the lives of one another, and studied their meaning. What I am about to say, I am saying from the observation of real life. I could give you, if necessary the names of the persons of whom I speak, for in every case have seen what I am about to describe. Let us look then first upon the picture of sorrow: a moral nature waking up from the sleep of infancy only to fall more and more a victim to evil and to become weaker and weaker, through failure. What are the steps in that story of sorrow? What are the stages by which a human life that has waked up from its innocent sleep only to be conquered by wrong, goes further and further down into the abyss of weakness? The first stage that I have noticed is when the boy whose moral nature is just waking up, really does not quite know what is good and what is bad. I wonder if when you have been sleeping soundly at night, some sudden noise or sudden blaze of light has come to awake you from your slumber, and for a moment you have been bewildered, confused; you did not know where you were; your mind was not steady; your eyes were not clear, and you reached out your hands, perhaps, and touched things

I have gone and stood by the bedside of one of my little children, lying there asleep, knowing not good or evil, its moral nature sleeping; and as I have looked on the beautiful little face — perhaps smiling in its sleep, no care, trouble, or wrong to disturb it — I have been thankful for the help that that vision of childish innocency gave to me. It made me a better man simply to look on the pure face of my little child, and I could go from the bedside stronger; I could go out into the open field of life and fight my moral battle with a braver heart, because of the memory of the sweet and stainless innocency of that little child. But that little child, if it were always to stay like that, with its moral nature asleep, while it would be innocent and pure, could never become the highest type of a human life. It would be deficient; it would never come to the strongest and the best position that man can attain. And so He who gives us our lives, and who made us at first as little, unconscious children, not knowing good from evil, has ordained that, as we grow older, this moral nature shall wake up and begin to know itself, and to know that in the world there is a great distinction between good and bad. Now, I need not remind you, my friends, how real that waking up is. Many a boy far younger than any youth in this room, has known to his sorrow the waking up of the moral nature, for it awaked only to know itself as having gone far wrong. But in one way or another our moral nature must awake, and when it has awaked, and only then, are we ready to advance to the heights of manhood, or are we prepared to sink to the depths to which manhood may sink and *must* sink, if it loves evil more than good, darkness more than light! For, as I look back over the years of my life, and as I remember the many lives that I have known — and I have seen many, for always I have loved and been interested in human lives and have sought to understand their problems, — I say, as I look back over the years and remember those whom I have known,

President, Ladies and Gentlemen:

I regard it as one of the great pleasures of my visit in Japan that I stand before you now. I am glad to meet this great company of manly young fellows. I am glad to be permitted to speak to you without an interpreter in the English language; and I flatter myself by the light in your faces and the smile on your lips, that you know quite well what I am saying.

I have been asked to speak to you this afternoon about a very great question: one of the greatest questions that any man can consider. There never was a finer chance to speak of that question than at this moment and in this place, for I am speaking to the young men who are to be the future leaders of Japan, the men that in this twentieth century are to make Japan for better or for worse what she shall be. I am asked to speak about the growth of our moral life; and how we can so cultivate it that it shall grow stronger and stronger, and we be able, as we grow older, more perfectly to separate good from evil, and more intelligently to love good, and to hate, despise, and turn away from evil. We are so made by that divine power which gave us our lives, that we know the difference between good and evil, between right and wrong. This I hold to be our noble distinction above the lower orders of animals. We have no evidence that any order of life in this world save the human order of life know good from evil. This is our distinction as *men*; our mark of nobility. When we are born into the world as little infants, and are carried about in the arms of our mothers, that moral nature is, as it were, asleep: it has not yet waked up to know itself and to know its powers. I think that one of the most beautiful sights in the world is a little, innocent, helpless child. I have little children of my own, and often, while I have been fighting the battle of life, meeting my temptations and trying to win my victories,

APPENDIX

Speech delivered in the Sixth Higher School, on Mar. 11th, 1903, by Rev. Charles Cuthbert Hall, D. D., President of the Union Theological Seminary, New York.

From shorthand report by

EDWARD GAUNTLETT, F. I. P. S., F. INC. S. T.

投稿規定

一、本誌に投稿せんとするものは本部規定の原稿用紙を用ゐること

一、書体は正楷にて明瞭に認めらるゝこと

一、如何なる長篇と雖も全文を投せられんこと

一、類を別にするものは必ず用紙を異にし毎篇姓名を記せられんこと

一、凡て投稿の採否取捨は役員の意見によりてなすこと

一、如何なる原稿も返附の請求に應せざること

一、詞藻、雜錄欄に限り匿名を許す、但し役員迄には姓名を通知せらるゝこと

明治三十六年五月二十九日印刷
明治三十六年五月三十一日發行

第六高等學校内
發行兼編輯者　小野磯次郎

發行所　第六高等學校校友會

岡山市大字弓之町第百十四番地
印刷者　河合堯永

岡山市大字東中山下百二十三番第一地
印刷所　研精堂

Hall, Chas Cuthb.

7/28

Edward Gauntlett, F. I. P. S., F. Inc. S. T. Representative in Japan of the Incorporated Phonographic Society. Membre de l'Institut Sténographique des Deux Mondes, Paris; Holder of Sir I. Pitman & Sons' Full Certificate, and Teachers' Diploma; Holder of the Incorporated Phonographic Society's Teachers' Diploma; Inventor of "Phonographia Japonica," the Briefest System of Japanese Shorthand.

Okayama, June 1st, 1903

Dear Dr. Hall

Kindly pardon haste. By this mail I send you a copy of the 6th Higher School magazine containing a report of your speech given there. I trust it will reach you safely. The copy for the Y.M.C.A. is now in the press.

With kind regards,

Very truly yours,
E. Gauntlett.

明治三十六年五月三十一日發行

〔非賣品〕